仙台市文化財調査報告書第339集

大 野 田 古 墳 群

―第14次発掘調査報告書―

２００９年 ３ 月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第339集

大野田古墳群

―第14次発掘調査報告書―

2009年 3 月

仙台市教育委員会

序　　文

日頃、仙台市の文化財保護行政に対しまして、多大なご理解とご協力をいただき、心から感謝しております。

本書に収めた大野田古墳群は仙台市太白区に所在し、地下鉄南北線の富沢駅の東側に広がる遺跡です。現在、この富沢駅周辺では総合的な街づくりを目的に区画整理事業が推進しております。

それに伴い、仙台市大野田保育所が移転することとなり、今回、発掘調査が行われました。

今回の発掘調査は、関係機関と事前に十分な協議を行った上で、記録保存を目的に行いました。本報告書が幅広く皆様に活用されることで、新たな郷土理解が深まり、文化財保護活動へとつながるものと信じております。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書作成にご指導、ご協力いただきました多くの皆様や関係機関各位に心より感謝を申し上げる次第です。

平成21年３月

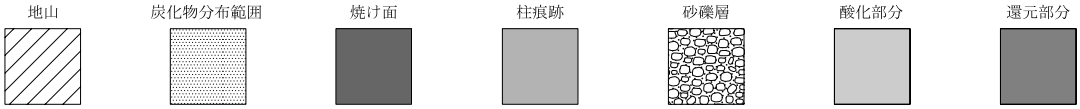
仙台市教育委員会
教育長　荒井　崇

例　　言

1．本書は、仙台市大野田保育所の移転改築工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
2．発掘調査は、仙台市教育委員会の指導のもとに、株式会社玉川文化財研究所が行った。
3．本書の作成及び編集は、平間亮輔（仙台市教育委員会文化財課）、佐々木竜郎（株式会社玉川文化財研究所）が行った。
4．本書の執筆は、平間亮輔の責任のもとに下記の通り行った。
　第Ⅰ章第１節……平間亮輔
　第Ⅰ章第２節、第Ⅱ～Ⅴ、Ⅶ章……佐々木竜郎
　第Ⅵ章……パリノ・サーヴェイ株式会社
5．調査と報告書作成にあたり、富沢駅周辺開発事務所ならびに大野田はぎの苑、サポートはぎのご協力を賜った。記して感謝の意を表す次第である。
6．自然科学分析についてはパリノ・サーヴェイ株式会社が行った。
7．調査及び報告書作成に関する諸記録、出土遺物等の資料は、仙台市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．土層注記に記載している土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原 1977）に基づいて認定した。
2．本書に使用した地形図は、国土地理院発行の１：25,000『仙台西南部・仙台東南部』の一部を縮小して使用している。周辺の遺跡では仙台市発行の都市計画基本図１：5,000を使用した。
3．調査の際の平面座標基準は、日本測地系直角平面座標第Ｘ系を基にしている。
4．本書に使用した挿図縮尺は以下の通りである。全体図1／2,500、1／600、1／150、1／250、遺構平面図1／30、1／60、断面図1／60、1／80、遺物分布図1／30、遺物の挿図・写真図版縮尺1／3、1／6
5．挿図中のレベルは海抜標高を示す。
6．遺物の登録は種別ごとに行い、番号の前に以下の略号を付している。
　Ａ：縄文土器　Ｂ：弥生土器　Ｃ：非ロクロ土師器　Ｄ：ロクロ土師器　Ｇ：平瓦　Ｋ：石器　Ｐ：土製品　Ｓ：埴輪
7．ＳＩ挿図及び本文中での遺物の表記には、挿図番号の他に登録番号を用いた。尚、Ｓは自然礫を表す。
8．本書で使用した遺構略号は以下の通りで、番号は種別毎に付した。
　ＳＤ：溝跡　ＳＩ：竪穴住居跡　ＳＫ：土坑　ＳＭ：小溝状遺構群　ＳＸ：鍛冶遺構・性格不明遺構
　Ｐ：ピット
9．層位名は基本層位をローマ数字「Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ…」、遺構内堆積土層位を算用数字「１・２・３…」で表した。
10．遺構および遺物観察表では（　）は推定値、〈　〉は現存値、［　］は歪みのある土器の最小～最大値を記した。
11．新旧関係は各調査面で検出されたものを表記している。
12．土師器実測図のスクリントーンは黒色処理を示している。また、遺構図・全体図等で使用しているスクリントーンは以下の意味を表現した。



目　　次

序　文
例　言・凡　例
第Ⅰ章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　調査要項 …… 1

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 1

第Ⅲ章　調査の方法と経過 …… 5

第Ⅳ層　基本層序 …… 9

第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物 …… 10
　第１節　Ⅲ層上面検出遺構 …… 10
　　１．土　坑 …… 11
　　２．溝　跡 …… 11
　　３．小溝状遺構群 …… 12
　　４．性格不明遺構 …… 12
　　５．ピット …… 12
　第２節　Ⅳ層上面検出遺構 …… 13
　　１．小溝状遺構群 …… 13
　　２．ピット …… 15
　第３節　Ⅴ層上面検出遺構 …… 16
　　１．竪穴住居跡 …… 16
　　２．土　坑 …… 31
　　３．溝　跡 …… 31
　　４．小溝状遺構群 …… 32
　　５．鍛冶遺構 …… 34
　　６．性格不明遺構 …… 35
　　７．ピット …… 35
　　８．その他の出土遺物 …… 36

第Ⅵ章　自然科学分析 …… 38

第Ⅶ章　ま　と　め …… 43
写真図版 …… 47
報告書抄録 …… 巻末

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　調査区の位置と周辺の遺跡 …… 3
第３図　グリッド及び周辺調査範囲図 …… 6
第４図　調査区壁面土層断面図 …… 7・8
第５図　Ⅲ層上面遺構平面図・ＳＤ１～３溝跡断面図 …… 10
第６図　ＳＫ１・２土坑平面・断面図 …… 11
第７図　Ⅳ層上面遺構平面図 …… 13
第８図　ＳＩ１竪穴住居跡平面・断面図 …… 16
第９図　Ⅴ層上面遺構平面図・ＳＤ４溝跡断面図 …… 17・18
第10図　ＳＩ２竪穴住居跡平面・断面図 …… 20
第11図　ＳＩ２竪穴住居跡床面遺物出土状況 …… 21
第12図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物（１）…… 22
第13図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物（２）…… 23
第14図　ＳＩ３竪穴住居跡床面遺物出土状況 …… 24
第15図　ＳＩ３竪穴住居跡平面・断面図 …… 25
第16図　ＳＩ３竪穴住居跡出土遺物（１）…… 26
第17図　ＳＩ３竪穴住居跡出土遺物（２）…… 27
第18図　ＳＩ４竪穴住居跡平面・断面図 …… 29
第19図　ＳＩ４竪穴住居跡床面遺物出土状況 …… 30
第20図　ＳＩ４竪穴住居跡出土遺物 …… 30
第21図　ＳＫ３・４土坑平面・断面図 …… 31
第22図　ＳＸ６鍛冶遺構平面・断面図 …… 34
第23図　ＳＸ５性格不明遺構平面・断面図 …… 35
第24図　その他の出土遺物 …… 37
第25図　試料採取位置図 …… 38
第26図　植物珪酸体組成 …… 40
第27図　（仮称）大野田官衙遺跡全体図 …… 44
第28図　第８次・14次調査（Ⅴ層）全体図 …… 45

表　目　次

第１表　大野田古墳群調査一覧表 …… 4
第２表　調査区壁面確認小溝状遺構群・性格不明遺構土層観察表 …… 9
第３表　Ⅲ層上面検出小溝状遺構群観察表 …… 12
第４表　Ⅳ層上面検出小溝状遺構群観察表 …… 15
第５表　Ⅴ層上面検出小溝状遺構群観察表 …… 33
第６表　植物珪酸体分析結果 …… 39
第７表　樹種同定結果 …… 40

写真図版目次

写真図版１　調査区全景 …… 49

１．調査区全景（南から）　２．完掘全景（東から）

写真図版２　竪穴住居跡（１）…… 50

１．ＳＩ１全景（北から）　２．ＳＩ２全景（南東から）

写真図版３　竪穴住居跡（２）…… 51

１．ＳＩ３全景（東から）　２．ＳＩ４全景（東から）

写真図版４　竪穴住居跡（３）…… 52

１．ＳＩ１ピット１断面（南から）　２．ＳＩ２断面（南東から）

３．ＳＩ２－２層遺物出土状況（西から）　４．ＳＩ２床面遺物出土状況（南から）

５．ＳＩ３床面遺物出土状況（南東から）　６．ＳＩ３ピット７断面（西から）

７．ＳＩ４断面（北西から）　８．ＳＩ４床面遺物出土状況（西から）

写真図版５　溝跡（１）…… 53

１．ＳＤ４全景（西から）　２．ＳＤ４断面Ａ－Ａ’（東から）

３．ＳＤ４断面Ｂ－Ｂ’（東から）

写真図版６　鍛冶遺構 …… 54

１．ＳＸ６全景（南から）　２．ＳＸ６炉Ａ・Ｂ断面（南東から）

３．ＳＸ６ピット１炭化物検出状況（西から）

写真図版７　土坑・溝跡（２）…… 55

１．ＳＫ１断面（東から）　２．ＳＤ１全景（南西から）

３．ＳＤ１北壁断面（南から）

写真図版８　小溝状遺構群・調査区壁断面 …… 56

１．Ⅳ層遺構検出状況（東から）　２．Ⅳ層上面全景（北西から）

３．ＳＭ１全景（西から）　４．ＳＭ５全景（北西から）

５．ＳＭ５全景（東から）　６．ＳＭ６－12、５－８、４－５断面（西から）

７．調査区西壁断面（南東から）　８．調査区南壁断面（北西から）

写真図版９　竪穴住居跡出土遺物（１）…… 57

１．ＳＩ２出土土器　２．ＳＩ３出土土器

写真図版10　竪穴住居跡出土遺物（２）…… 58

ＳＩ２出土土器（１）

写真図版11　竪穴住居跡出土遺物（３）…… 59

１．ＳＩ２出土土器（２）　２．ＳＩ３出土土器

写真図版12　竪穴住居跡出土遺物（４）・その他の出土遺物 …… 60

１．ＳＩ４出土土器　２．その他の出土遺物

写真図版13　炭化材・植物珪酸体 …… 61

写真図版14　鉄滓のマクロ・ミクロ断面組織 …… 62

第Ⅰ章　調査の概要

第1節　調査に至る経緯

今次調査は富沢駅周辺土地区画整理事業による仙台市大野田保育所の移転改築工事に伴うものである。移転予定地は大野田古墳群の中央部に位置し、建物の構造から遺構に影響を及ぼすことが予想された。このため、仙台市教育委員会は仙台市子供未来局子育て支援部子供施設課と協議し、記録保存を図るための発掘調査を実施することになった。工事開始は平成21年3月の予定であるため、調査はそれ以前の平成20年7月～9月にかけて実施することとした。

第2節　調 査 要 項

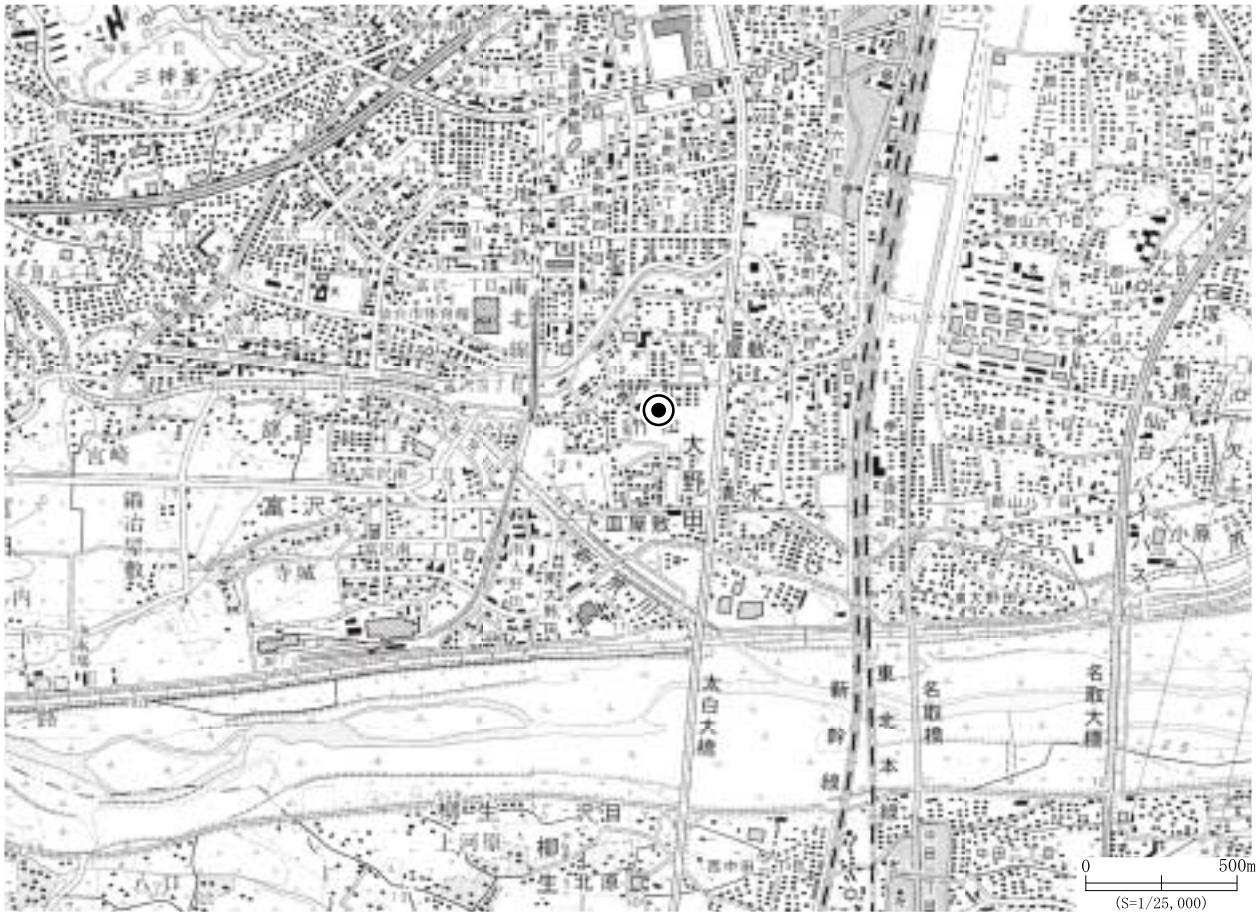
1	遺 跡 名 称	大野田古墳群（宮城県遺跡地名登録番号01361・仙台市文化財登録番号Ｃ－054）
2	所　在　地	宮城県仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業27Ｂ13，14，15（太白区大野田字竹松・宮脇）
3	調 査 原 因	仙台市大野田保育所移転改築工事に伴う埋蔵文化財の事前調査
4	調 査 主 体	仙台市教育委員会（生涯学習部文化財課）
5	調 査 担 当	調査係主査　荒井　格
		調査係主任　平間亮輔
		主任調査員　小林義典（株式会社玉川文化財研究所）
		調　査　員　佐々木竜郎（株式会社玉川文化財研究所）
6	調 査 期 間	平成20年7月1日～平成20年10月22日
7	調査対象面積	917㎡
8	調 査 面 積	916㎡

第Ⅱ章　遺跡の位置と歴史的環境

大野田古墳群は仙台市南部の太白区大野田字宮・宮脇・竹松・千刈田・塚田・王ノ壇に所在し、現在その範囲は東西600m、南北430mおよび面積は約150,000㎡に達する。今回の調査地点は大野田古墳群の北側中央部分にあたり地下鉄南北線富沢駅の北東約400mに位置する（第1・2図）。

仙台市の地形は大きく西側の丘陵地帯と東側の沖積平野に分けられ､沖積平野はさらに広瀬川以北の霞ノ目低地、名取川と広瀬川に挟まれた郡山低地、名取川以南の名取低地に区分される。大野田古墳群は郡山低地南部にあたり東南東約3㎞付近が名取川と広瀬川の合流地点となる。大野田地区を含む富沢駅周辺の地域は太白山麓を源流とする名取川水系の笊川が北側へ袋状に大きく曲流しており、自然堤防および後背湿地の発達した複雑な微地形が形成されている。これまでの周辺域における発掘調査で確認された旧河道はその形成過程の一端を示すものである。

大野田地区は東側へ緩やかに傾斜する自然堤防上に立地し、標高は11～12mを測る。名取川・笊川の河川改修以前は大雨などで度々水害の被害を受ける地域として知られていた。30年ほど以前は水田・畑地に宅地が点在する田園風景が広がっていたが、地下鉄南北線の開業や都市計画道路「川内・柳生線」（現県道仙台館腰線）の開通によって急速に宅地化が進み、現在も富沢駅周辺の区画整理事業が進行中であるなど、当時の風土や景観からは大きく様変わりしている。



第１図　遺跡の位置

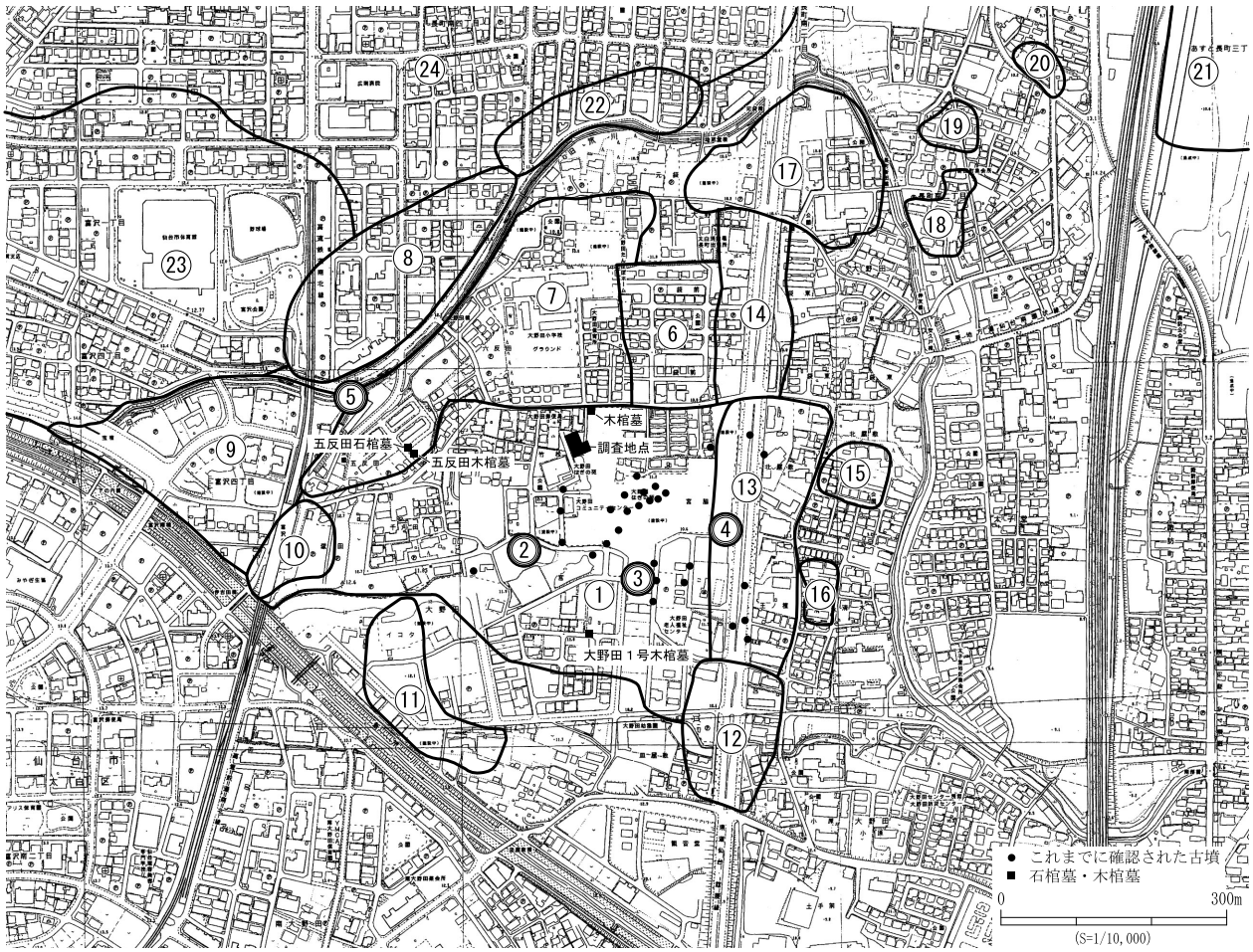
大野田地区周辺は仙台市域において特に遺跡の分布が密集している地域であり、大野田古墳群では南側の一部を除き遺跡に囲まれた状態にある（第２図）。以下、これまでの調査成果から大野田古墳群周辺における各時代毎の様相を見ていきたい。

旧石器時代では富沢遺跡で後期旧石器時代の森林跡が検出されている。石器とともに確認された焚火跡等から狩猟における活動の場であったことが明らかとなり、植生や気候を含めた古環境の復元など自然科学分野においても大きな成果が上げられている。

縄文時代に入ると自然堤防上から多くの遺構が検出されるようになり、下ノ内浦遺跡では早期前葉の住居跡と落し穴が検出されている。その後、中期後半～後期にかけては遺跡数が増加し、集落が安定して営まれるようになる。主だった集落では中期末の複式炉をもつ敷石住居が複数棟検出された下ノ内遺跡や、10軒を超える後期初頭の住居が検出された六反田遺跡等があげられる。大野田遺跡では後期前半の環状集石群・配石遺構・埋設土器が検出され、包含層中からはハート形土偶をはじめ約300点程の土偶が出土するなど墓域と祭祀の場と考えられている。また、伊古田遺跡では包含層中から多量の土器・石器とともに後期中葉期の全長40㎝以上の大型土偶が検出される等、特筆される遺構・遺物の多い地域ともいえる。

弥生時代では富沢遺跡や山口遺跡で水田跡が重層的に検出されており生産域は明確であるが、住居跡など集落は具体的に明らかになっていない。現時点では大野田地区周辺での遺構・遺物の検出例は少ない状況であるが、下ノ内浦遺跡では後期の墓壙が検出されており、副葬品と考えられる石庖丁と太形蛤刃石斧が出土している。

古墳時代では中期後半以降になると古墳が密集して検出されるようになる。墳丘が確認された代表的なものでは市内最大級の円墳である春日社古墳をはじめ前方後円墳の鳥居塚古墳、円墳の王ノ壇古墳がある。



番号	遺跡名	種別	立地	時代	番号	遺跡名	種別	立地	時代
1	大野田古墳群	古墳、集落跡	自然堤防	古墳	13	王ノ壇遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	縄文後期、弥生～中世
2	春日社古墳	円墳	自然堤防	古墳	14	大野田遺跡	祭祀、集落跡	自然堤防	縄文後期、弥生中期、古墳～平安
3	鳥居塚古墳	前方後円墳	自然堤防	古墳	15	北屋敷遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
4	王ノ壇古墳	円墳	自然堤防	古墳	16	長町清水遺跡	散布地	自然堤防	古墳
5	五反田古墳	円墳	自然堤防	古墳	17	元袋遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	弥生、奈良～近世
6	袋前遺跡	集落跡	自然堤防	縄文、奈良、平安	18	新田遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
7	六反田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩期、奈良、平安、近世	19	長町南遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
8	下ノ内浦遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防	縄文早・前・後期、弥生～近世	20	長町六丁目遺跡	散布地	自然堤防	奈良～平安
9	下ノ内遺跡	集落跡	自然堤防	縄文中～晩期、弥生～中世	21	長町駅東遺跡	集落跡	鉄道敷地	弥生、古墳末、奈良初
10	伊古田遺跡	集落跡	自然堤防	縄文後期、古墳～平安	22	袋東遺跡	散布地	自然堤防	古墳、奈良、平安
11	伊古田Ｂ遺跡	散布地	自然堤防	古墳～平安	23	山口遺跡	集落跡、水田跡	自然堤防、後背湿地	縄文早・中～晩、弥生中、古墳～中世
12	皿屋敷遺跡	集落跡、屋敷跡	自然堤防	奈良～中世	24	富沢遺跡	集落跡、水田跡	後背湿地	後期旧石器～近世

第２図　調査区の位置と周辺の遺跡

その他に中小の円墳等を含めて現在まで42基が確認されているが、いずれも墳丘は削平されており周溝のみが確認されている。周溝内からは朝顔形埴輪や円筒埴輪が検出されるものも存在しており、埴輪を有する群集墳としては原遺跡とともに注目される。これらの埴輪は北西２㎞の三神峯丘陵に存在する富沢窯跡系列のものと考えられている。春日社古墳では埋葬施設が２基発見され、第２主体部から副葬品として矛、鉄鏃の金属製品とともに革盾が東北地方で初めて出土しており、春日社古墳の被葬者とヤマト政権との関係も指摘されている。集落については前期～中期の竪穴住居跡が大野田古墳群や伊古田遺跡、下ノ内遺跡で検出されている。これまでは調査区の制約等によって住居の在り方について断片的な認識であったが、継続して行われている区画整理事業に伴う発掘調査（第５次調査等）によって徐々に集落の状況が判明しつつある。

古代に入ると郡山低地の東部では多賀城以前の陸奥国府である国史跡の郡山遺跡と郡山廃寺が造営され、それに伴い周辺での竪穴住居跡や掘立柱建物跡の検出数が増加する。大野田地区周辺においても、これまで多くの竪穴住

居跡を始め掘立柱建物跡などが検出されている。六反田遺跡、袋前遺跡、大野田古墳群にまたがって柱筋をそろえた大型の掘立柱建物跡やこれらを取り囲む区画溝が確認されており郡山遺跡に関連する官衙跡の存在が考えられている。出土遺物では六反田遺跡の竪穴住居跡の堆積土中から円面硯の破片が出土している。その他に畑の耕作に関わる痕跡と考えられている小溝状遺構群が大野田古墳群を中心として大規模に展開している。

中世に至ると大野田地区では武士の屋敷が造営されるようになり、王ノ壇遺跡では大溝による方形区画を有する館跡や幹線道路（推定「奥大道」）が検出されている。

大野田古墳群のこれまでの調査成果

大野田古墳群の調査は1976年に行われた六反田遺跡の発掘調査を契機として五反田古墳、五反田石棺墓、五反田木棺墓が検出され、それとほぼ時を同じくして春日社古墳・鳥居塚古墳の調査及び大野田１～４号墳が新たに発見されるなど大野田地区周辺で古墳が群集していることが明らかとなった。また埴輪片が周辺の広い地域で採集されていることから、現在ではその指定範囲は東西600m、南北430mの約150,000㎡に及んでいる。

この度の第14次調査に至るまでに大野田古墳群の周辺域で検出された古墳の総数は42基を数える。第１表には大野田古墳群のこれまでの調査面積と検出遺構の一覧を示した。個人住宅の建設に伴う小規模な調査が殆どである中、大規模なものでは富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う第５次調査があげられる。平成６年度の確認試掘調査から開始して現在も調査が継続中であり、平成20年で大野田古墳群の調査は13年目を数える。調査面積では大野田古墳群のみで32,000㎡を超え、富沢駅周辺の調査（大野田古墳群、六反田、元袋、大野田、王ノ壇、皿屋敷、伊古田、伊古田

第１表　大野田古墳群調査一覧表

調査次数	調査面積(㎡)	調査原因	調査年	検出遺構・備考	報告書名	
1	200	市道・春日通線拡幅整備工事	1977	古墳２基(３号墳、４号墳)	大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳発掘調査報告書	108集
2	160	大野田コミュニティーセンター建設	1980	溝跡１条、古墳２基(１号墳、２号墳)、ピット・古墳の周溝内から円筒埴輪が等間隔で出土している。	年報３(昭和56年度)	41集
3	273	共同住宅建設	1984	円形周溝１基、小溝状遺構群、ピット・伊古田遺跡として報告されるが後の範囲指定変更で大野田古墳群に含まれることになった。	年報６(昭和59年度)	83集
4	593	共同住宅(アパート)建設工事	1989	竪穴住居跡１軒(古墳時代前期)、小溝状遺構群	大野田古墳群発掘調査報告書	138集
5	32,026	富沢駅周辺土地区画整理事業	1994～継続中	古墳、竪穴住居跡、木棺墓、掘立柱建物跡、井戸跡、土坑、溝跡、水田跡、小溝状遺構群、ピット列他	大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ	243集
6	54	個人住宅建設	2002	掘立柱建物跡１棟、土坑４基、溝跡２条、その他の遺構２基、ピット	国分寺東遺跡他発掘調査報告書	266集
7	110	給油所建設に伴う地下タンク埋設	2004	小溝状遺構群	山田本町遺跡他発掘調査報告書	287集
8	550	大野田はぎの苑移転建設	2004	竪穴住居跡１軒(古墳時代前期)、柱列、溝跡、小溝状遺構群、土坑	大野田古墳群第８次発掘調査報告書	290集
9	200	マンション建設	2004	小溝状遺構群、溝跡	大野田古墳群第９次発掘調査報告書	291集
10	198.6	個人住宅建設	2005	小溝状遺構群	前田館跡他発掘調査報告書	301集
11	47.5	個人住宅建設	2005	小溝状遺構群・ピット	前田館跡他発掘調査報告書	301集
12	70.47	個人住宅建設	2007	古墳１基(26号墳)、掘立柱建物跡、溝跡、土坑、ピット	南小泉遺跡他発掘調査報告書	326集
13	231	マンション建設	2007	中世の道路跡(推定「奥大道」)、小溝状遺構群	大野田古墳群第13次発掘調査報告書	319集
14	916	仙台市大野田保育所移転建設	2008	竪穴住居跡４軒(古墳時代前期)、官衙区画溝１条、鍛冶関連遺構、小溝状遺構群、土坑、ピット	大野田古墳群第14次発掘調査報告書	339集

Ｂ、下ノ内）全体ではこれまで50,000㎡以上の調査が行われている（註１）。道路部分が主な調査対象であるため遺跡全体へのトレンチ調査を行う形となり、古墳等の規模の大きな場合には全体が明かにされるものは少ないが、広い範囲における遺構分布の在り方や、数多くの古墳を検出することが可能となった。また大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡では柱筋を揃えた大規模な掘立柱建物跡やそれらを区画する溝の存在などから官衙跡が新たに想定される等、多くの成果が上げられている。

今回の第14次調査では調査区の南西側に第８次調査区が隣接し、それ以外の北・東・南側は第５次調査区（５Ａ・９Ａ・11Ｄ・13Ａ・13Ｅ区）によって囲まれた状態にある（第３図）。また、調査区南西隅には平成６年度試掘調査№.30トレンチが位置しておりⅤ層上面で溝跡が確認されている。今次調査は面積の上で第５次調査に次ぐ規模を有していることから、新たな古墳の発見や第８次調査で検出された古墳時代前期の集落の広がり、また東側の隣接地でこれまで確認されてきた区画溝の検出が期待された。

註１）第５次調査は富沢駅周辺土地区画整理事業に伴う調査の総称で、算用数字は遺跡毎の調査年数を表し、アルファベットは同一年度内の地区名を指している。例えば平成12年度の大野田古墳群５Ａ区の場合は、平成12年度に行われた第５次調査の大野田古墳群発掘調査５年目のＡ地区という具合である。

第Ⅲ章　調査の方法と経過

今回の調査地点は土地区画整理事業に伴う造成地内にあり大野田小学校の南方100ｍに位置する。調査区のほぼ中央には小学校から南に延びる通学路が通り宅地及び水田が存在していたが、現況では山砂等によって0.4～0.8m程の盛り土がなされた更地になっていた。

この度の調査は仙台市大野田保育所建設用地の建物範囲（917㎡）を対象にやや変則的なＬ字形の調査区を設定することになった。グリッドの配置は５ｍ毎に西から東へアルファベット、北から南へ算用数字を付してＡ－１、Ａ－２グリッドなどのように呼称した。Ａ－２（Ｘ＝－198400.Ｙ＝3940）は富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡調査（第５次調査）のグリッド表記ではＮ・Ｓ－０、Ｅ－140となる（第３図）。

残土置き場を含めた開発予定地の外周に防護柵を設置して作業を行う際、「大野田はぎの苑」の北側にある東西方向の水路の切り回し工事が必要なことから、諸工事との調整を図りながら調査を開始した。

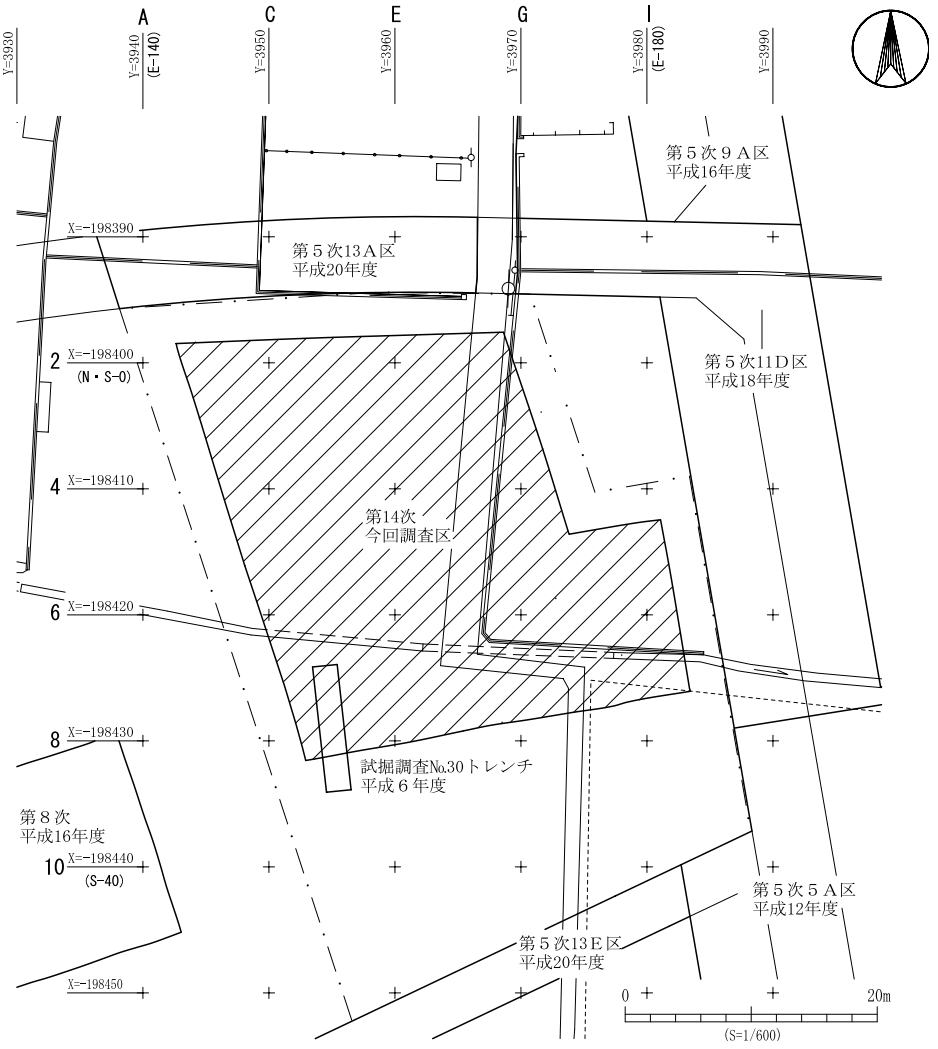
まずはじめに重機による盛り土を含む表土掘削を行ったところ、造成前の旧水田耕作土および床土にあたる酸化した硬化面がほぼ全域で認められた。ただし調査区中央付近は住宅の基礎による撹乱を受け、Ｃ～Ｉ－６グリッド付近は上記した東西方向の水路の影響によって地山の一部が削り取られていた（註２）。調査区南西部では平成６年度に行われた試掘調査№.30トレンチを確認している。試掘調査の結果をふまえ調査区の中央にベルトコンベアを設置して人力で掘り下げ及び精査を行った結果、Ⅲ層は調査区南側で部分的に認められるが、それ以外では削平されていることが明らかとなった。調査区の内側には排水用の側溝を設定して壁面の土層観察に利用した。

調査は遺存するⅢ層上面から遺構精査を開始して順次各層毎の記録作業の完了した後、人力によって下層への掘り下げを行うことにした。Ⅲ層上面では土坑、溝跡、小溝状遺構群、轍状の性格不明遺構、ピットが検出された。記録作業完了後、Ⅴ層への掘り下げを行う過程でⅣ層中からの遺構が確認されたことから精査を行い、小溝状遺構群、ピットを検出した。Ⅴ層上面では竪穴住居跡、土坑、鍛冶遺構、溝跡、小溝状遺構群、ピット列など最も多くの遺構が検出された。これらの中には本来Ⅲ・Ⅳ層で検出されるべき遺構が含まれていることも考えられたが、遺構名称の煩雑化や混乱を招く恐れがあったため現地調査時にはⅤ層上面遺構として取り扱い、整理段階で堆積土や遺構のあり方から判断して認定を行うこととした。平面プランの新旧関係で最も新しい小溝状遺構群から調査を行

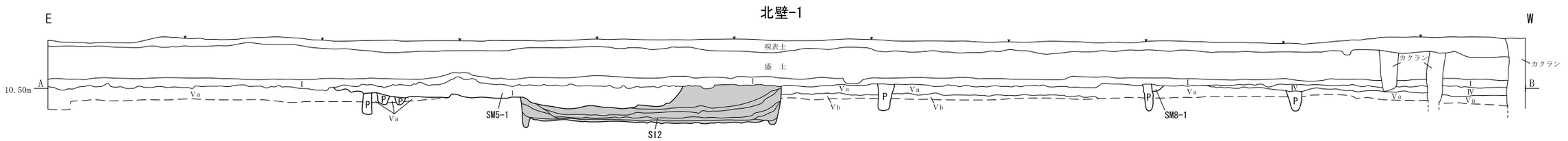
い、北側から漸次南へと作業を進めていった。調査期間半ばの８月中旬以降は曇りや雨の不安定な天候が続いて断続的な調査であった他、大雨時には調査区が一部冠水するなど、度々、排水にポンプアップが必要であった。この際に南東側の壁の一部が崩落したため養生・補強の対策を実施した。小溝状遺構群・ピットを完掘した９月12日には高所作業車による第１回目の空中写真撮影を行い、その後に住居や溝等その他の遺構調査を継続して行った。調査区中央から北側部分で竪穴住居跡が４軒検出されたが、いずれも古墳時代前期に属するもので住居床面からほぼ完形品を含む複数の土器が出土している。調査区中央からやや南西で検出された鍛冶遺構では２基の炉跡が確認された。調査区南端ではこれまでに周辺の調査により確認されてきた官衙関連遺構を区画する南辺の溝跡が調査区内で全長22mにわたって検出された。南壁際の一部は壁崩落の可能性があることから安全面に配慮し底面までの調査は行わなかった。10月17日に第２回目の空中写真撮影を行い、仙台市教育委員会文化財課との現地調査終了立ち会いの後、撤収作業を行って10月22日にすべての作業を終了した。

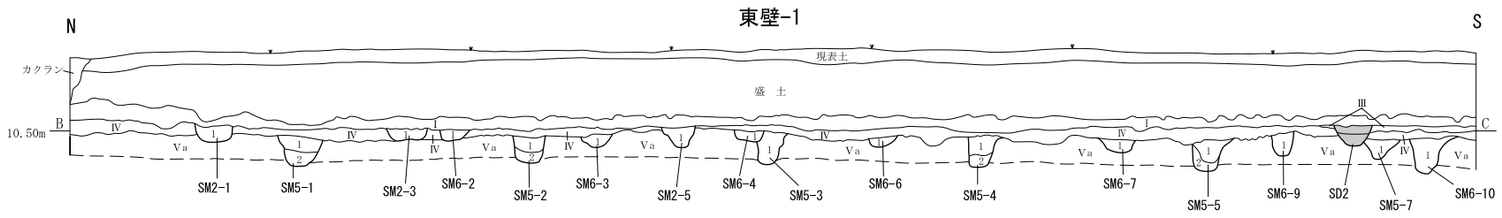
現地での測量・実測図作成は基本的にトータルステーションによるが、土層断面図については手実測方式で行った。なお、測量の際の座標数値は日本測地系第Ｘ系を基準としている。

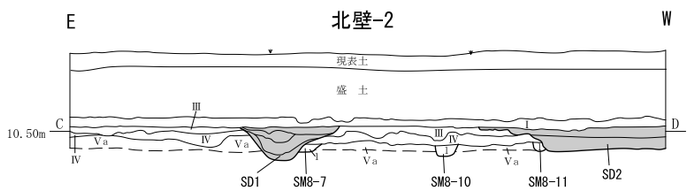
註２）この水路は少なくとも昭和22年建設省国土地理院撮影の航空写真において確認されることから、土側溝からコンクリートのU字形側溝へ改修を経ながら継続して機能していたことが窺える。

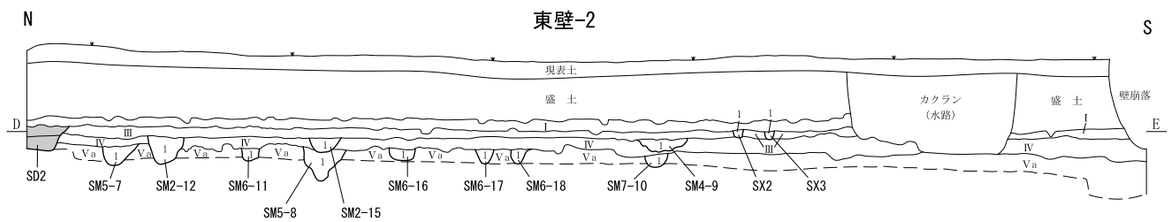


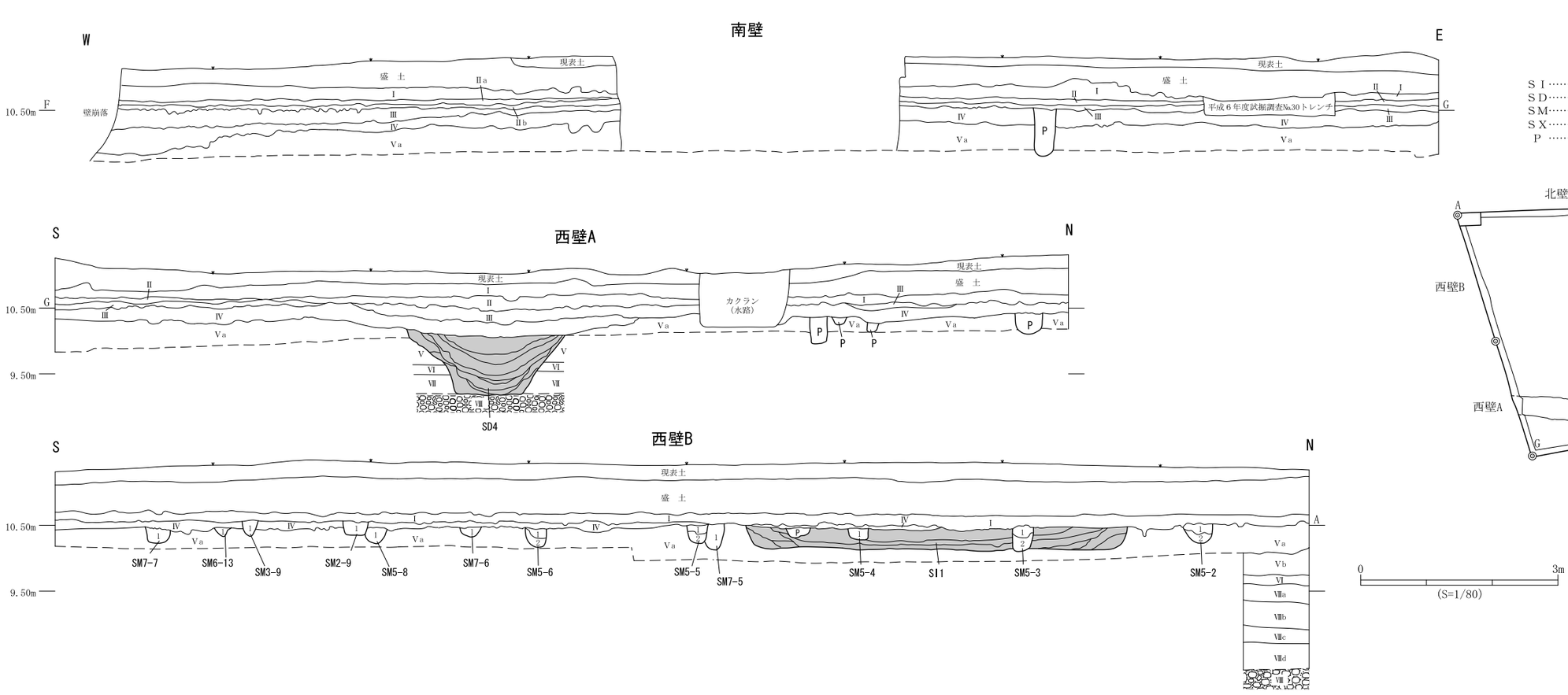
第３図　グリッド及び周辺調査範囲図



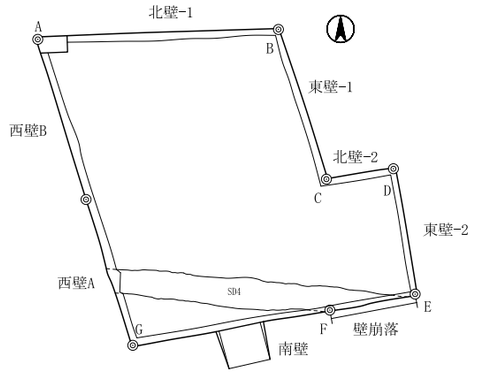








ＳＩ……竪穴住居跡
ＳＤ……溝　跡
ＳＭ……小溝状遺構群
ＳＸ……性格不明遺構
Ｐ　……ピット



0　3m
(S=1/80)

第４図　調査区壁面土層断面図

第Ⅳ章　基本層序

今次調査地点は区画整理計画に伴う造成地になっており旧水田耕作土上部は0.4～0.8m程の山砂によって覆われていた。基本土層では旧水田耕作土をⅠ層とし、砂礫層であるⅧ層まで確認することができた。調査区の内側には排水のための側溝を設置し、調査時に土層観察に利用することができた。壁断面の観察ではⅢ層上面、Ⅳ層上面、Ⅴ層上面からの遺構の掘り込みが確認されている。Ⅴ層以下の状況は北西隅の深掘り箇所およびＳＤ４遺跡の壁面で観察を行いⅧ層（砂礫層）までを捉えることができた（第４図）。

Ⅰ層：灰黄褐色（10YR5/2）粘土質シルト。盛り土直下の旧水田耕作土。下部の田床と考えられる部分は酸化鉄により橙色味を帯びて硬化する部分も認められる。

Ⅱ層：暗褐色（10YR3/3）粘土質シルト。マンガン・酸化鉄を含む。調査区壁断面の一部で確認することができた。南壁東側では10YR3/3暗褐色のⅡa層、10YR2/3黒褐色のⅡb層に細分層される。

Ⅲ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質シルト。部分的に層中位～上位にかけて灰白色火山灰が１～３㎜程度の薄層として観察できる。調査区の中央から北側は削平されて存在していない。

Ⅳ層：暗褐色（10YR3/4）粘土質シルト。マンガン・酸化鉄を含む。北側の一部を除いたほぼ全域に分布しており南側では堆積が厚く残る。

Ⅴ層：にぶい黄褐色（10YR5/4）粘土質～砂質シルト。北壁の断面では土性によってa・bに細分が可能。Ⅴa層は粘土質シルト、Ⅴb層は砂質シルトである。

Ⅵ層：暗褐色（10YR3/3）砂質シルト。有機質を含む砂質シルト層。部分的に１～３㎜程度の炭化物が認められる。今回の調査ではⅥ層中から遺物は検出されていないが、大野田地区周辺では縄文時代後期の遺物包含層が形成される。

Ⅶ層：灰黄褐色（10YR4/2）砂質シルト。北西隅部分では砂の粒径及びシルトの含有によってa～dに細分される。Ⅶa・Ⅶc層は粘土質が強く、Ⅶb・Ⅶd層は砂味が強い。

Ⅷ層：砂礫層。調査区西側の観察結果ではⅧ層上面の標高差は0.8m程北側が低い。南側ではＳＤ４溝跡の底面となり５㎝以下の礫の隙間に砂が混在する。一方、北側部分では砂を主体とする中に拳大の礫が含まれ北側と南側では様相が異っている。

第２表　調査区壁面確認小溝状遺構群・性格不明遺構土層観察表

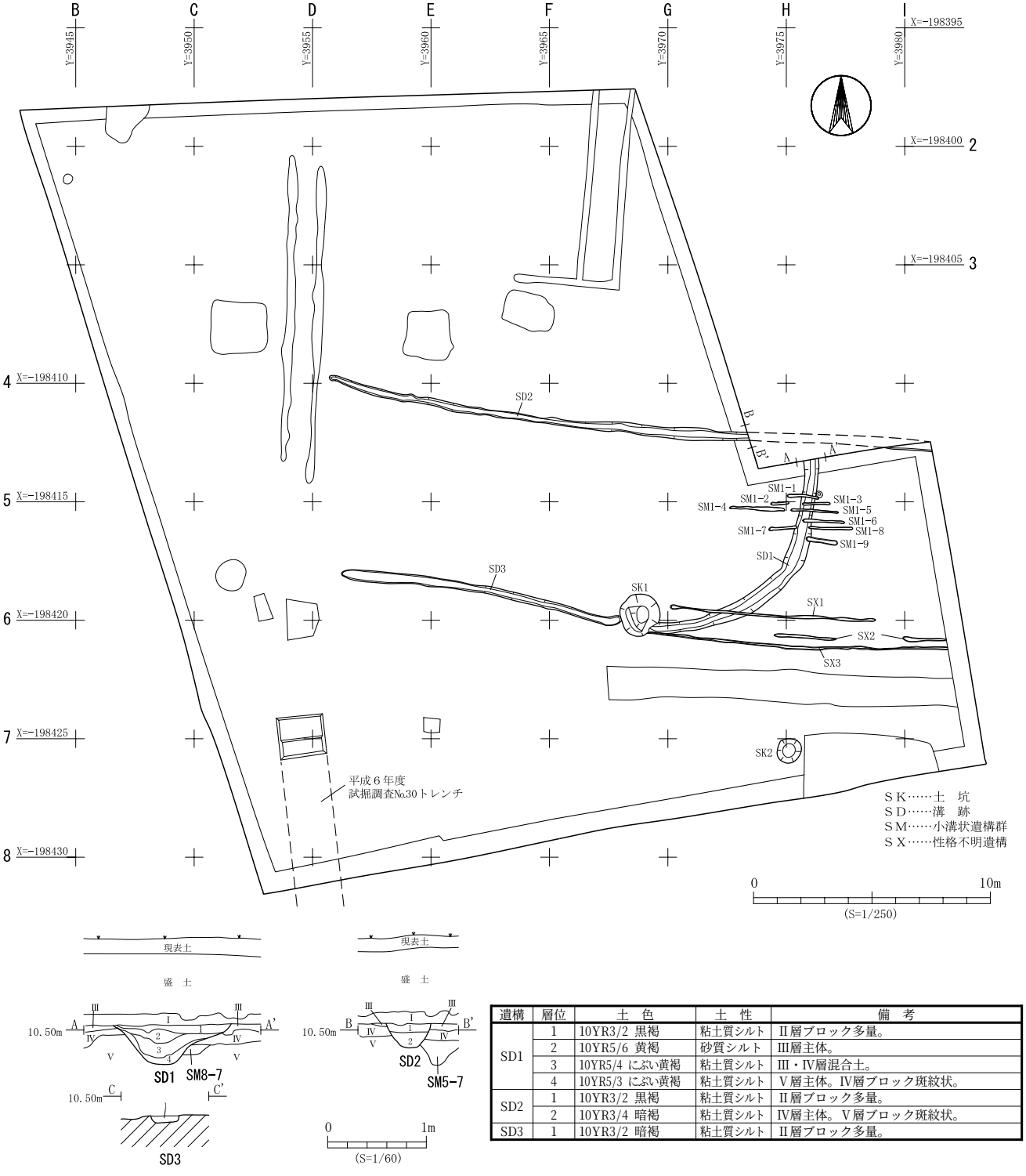
遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SM2-1	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
SM2-3	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。Ⅴ層ブロック斑紋状。
SM2-5	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層ブロック含む。
SM2-9	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層ブロック含む。
SM2-12	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
SM2-15	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
SM3-9	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
SM4-9	1	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック含む。
SM5-1	1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	Ⅳ層ブロック含む。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	マンガン粒少量。Ⅳ層主体。
SM5-2	1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	Ⅳ層主体。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック少量。
SM5-3	1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
	2	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層混合土。
SM5-4	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ・Ⅳ層混合土。
SM5-5	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	砂質味有り。
SM5-6	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅴ・Ⅳ層混合土。
	2	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM5-7	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅲ層主体。全体に酸化。
SM5-8	1	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。砂質有り。

遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SM6-2	1	10YR3/2 暗褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-3	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
SM6-4	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-6	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-7	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-9	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	灰色味有り。
SM6-10	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-11	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-13	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層主体。
SM6-16	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅳ層主体。
SM6-17	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	砂質味有り。Ⅳ層主体。
SM6-18	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	斑紋状ブロック含む。
SM7-5	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	やや砂質。Ⅲ層主体。
SM7-6	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	粘土質強い。
SM7-7	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
SM7-10	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅲ層よりも色調暗い。
SM8-1	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	粘土質味強い。
SM8-7	1	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅲ層主体。
SM8-10	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	やや砂質味強く、色調暗い。
SM8-11	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	粘土質味強い。
SX2	1	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	灰黄褐色シルトブロック含む。
SX3	1	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	マンガン含む。

第Ⅴ章　検出遺構と出土遺物

第１節　Ⅲ層上面検出遺構

Ⅲ層上面で検出された遺構は、土坑２基、溝跡３条、小溝状遺構群１群９条、性格不明遺構３基、ピット１個である。ＳＤ２・３はⅤ層上面で検出したものであるが、堆積土からⅢ層上面の遺構と判断した。以下、各遺構種別毎に記述する。



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SD1	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック多量。
	2	10YR5/6 黄褐	砂質シルト	Ⅲ層主体。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅲ・Ⅳ層混合土。
	4	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層ブロック斑紋状。
SD2	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック多量。
	2	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。Ⅴ層ブロック斑紋状。
SD3	1	10YR3/2 暗褐	粘土質シルト	Ⅱ層ブロック多量。

第５図　Ⅲ層上面遺構平面図・ＳＤ１～３溝跡断面図

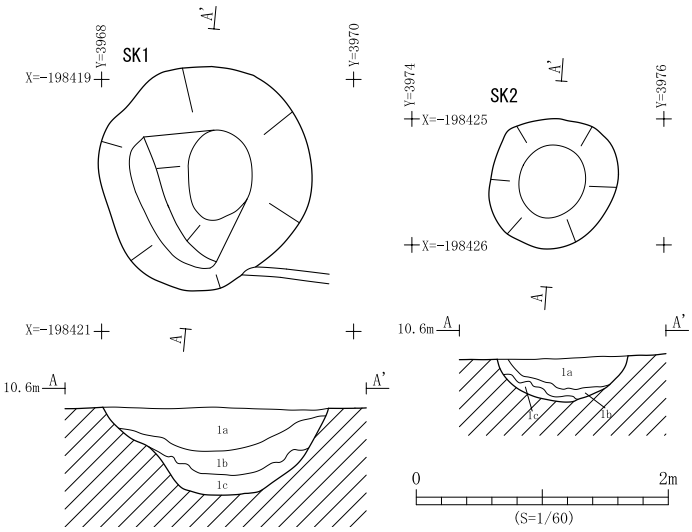
１．土坑

ＳＫ１土坑（第６図、図版７）

Ｆ－５・６グリッドで検出した。ＳＤ１・３を切る。平面形は楕円形を基調として規模は177×168㎝、深さ70㎝である。断面形はＵ字形で南西側には中間にテラス状の平坦面を有して壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は人為堆積層で３層に細分される。遺物は江戸中期以降の唐津焼小片と在地産甕小片が出土していることから時期については近世後半以降と考えられる。

ＳＫ２土坑（第６図）

Ｇ・Ｈ－７グリッドで検出した。平面形は円形を基調とする。規模は100～110㎝、断面形はＵ字形で深さ35㎝を測る。堆積土はＳＫ１類似の人為堆積層であることから、遺物は出土していないがほぼ同時期と考えられる。



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SK1	1a	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト	灰黄褐色シルトブロック主体。
	1b	10YR6/2 灰黄褐	粘土質シルト	1a層類似。Ⅳ層ブロック混入。
	1c	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅱ・Ⅲ層ブロック混入。
SK2	1a	10YR7/2 にぶい黄橙	シルト	灰黄褐色シルトブロック主体。
	1b	10YR6/2 灰黄褐	粘土	1a層類似。Ⅳ層ブロック混入。
	1c	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅱ・Ⅳ層ブロック混入。粘性強い。

第６図　ＳＫ１・２土坑平面・断面図

２．溝跡

ＳＤ１溝跡（第５図・図版７）

調査区東部のＦ～Ｈ－４～６グリッド付近で検出した。ＳＫ１、ＳＭ１、ＳＸ１に切られる。方向は南北のＮ－71°－Ｅから西へ湾曲してＮ－15°－Ｅとなる。確認されたのは全長11.4m程で北側は調査区外へと伸びる。規模は上端幅39～84㎝、下端幅18～39㎝、深さ５～16㎝を測る。断面形はＵ字形である。壁は緩やかに立ち上がり、北壁断面ではⅢ層からの掘り込みと東側に段が確認され、堆積土は４層に分層される。底面はほぼ平坦であるが中央部分が若干下がっている。遺物は土師器の甕が出土しているが図示できるものはない。

ＳＤ２溝跡（第５図）

Ｄ～Ｉ－４グリッド付近で検出した。方向はＮ－82°－Ｗである。Ｇ－４グリッドで調査区外へ伸びるが、東側の側溝及び壁断面で延長部分が確認されたことから全長26m以上と考えられる。規模は上端幅20～52㎝、下端幅16～27㎝、深さ７～14㎝を測る。断面形はＵ字形で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土はⅡ層を起源とするもので２層に分層される。底面はほぼ平坦で東側へ緩やかに下がる。遺物は土師器甕が出土しているが図示できるものはない。

ＳＤ３溝跡（第５図）

Ｄ～Ｆ－５グリッド付近で検出した。Ⅴ層上面で確認されたものであるが、堆積土がＳＤ２と類似することからⅢ層上面遺構と判断した。ＳＫ１に切られる。方向はＮ－81°－Ｗであり、ＳＤ２とはほぼ平行関係にある。ＳＤ２との距離は溝の心々間で7.5～8.0m程である。規模は全長12m、上端幅29～48㎝、下端幅17～38㎝、深さ３～８㎝を測る。断面形は上部が削平されているがＵ字形であるものと推測される。底面はほぼ平坦で東側に下がっている。出土遺物では土師器甕が出土しているが図示できるものはない。

３．小溝状遺構群

ＳＭ１小溝状遺構群（第５図、図版８）

調査区中央東側のＧ・Ｈ－４・５グリッド付近で東西方向の溝跡９条を検出した。ＳＤ１を切る。方向はＮ－81～95°－Ｅであり、真東西からは若干傾く。規模は全長約0.8～2.3m、上端幅７～21㎝、下端幅４～16㎝、深さ１～２㎝を測る。断面形は浅い皿形で緩やかに立ち上がり、堆積土は単層で10YR4／2灰黄褐色シルトを主体とする。溝の方向によってＳＭ１－１・４・５・７・８をＡ群、ＳＭ１－２・３・６・９をＢ群とした場合、溝の間隔は心々間でＡ群では56～72㎝、Ｂ群では76～83㎝である。遺物は出土していない。

第３表　Ⅲ層上面検出小溝状遺構群観察表

遺構名	番号	規模（cm）				方向	グリッド	新旧関係（古→新）	出土遺物
		全長	上端幅	下端幅	深さ				
SM１	1	135	9～15	7～12	1～2	N－85°－W	H-4・5	SD1→SM1-1	－
	2	78	10～13	8～9	1	N－93°－W	G・H-4・5	－	－
	3	119	9～11	6～9	1～2	N－90.5°－W	H-4・5	SD1→SM1-3	－
	4	235	9～18	5～16	1～2	N－88°－W	G-5	－	－
	5	202	7～11	4～9	1～2	N－86.5°－W	H-5	SD1→SM1-5	－
	6	178	8～15	6～11	1	N－87.5°－W	H-5	SD1→SM1-6	－
	7	120	11～16	7～13	1～2	N－95°－W	G・H-5	SD1→SM1-7	－
	8	188	9～12	6～9.5	2	N－88°－W	H-5	SD1→SM1-8	－
	9	135	17～21	11～16	1～2	N－81°－W	H-5	SD1→SM1-9	－

４．性格不明遺構

ＳＸ１～ＳＸ３は調査区南東で検出した轍状の落ち込みである。上層からの圧入による堆積状況が観察され、荷車等の轍跡である可能性が考えられる。堆積土は黄褐色粘土質シルトの単層であり、断面形はＵ字形で底面に凹凸が認められる。尚、ＳＸ１～ＳＸ３の方向はほぼ平行関係にある。

ＳＸ１性格不明遺構（第５図）

調査区南東部のＧ・Ｈ－５グリッド付近で検出した。南側にＳＸ２・３が存在する。ＳＤ１を切る。方向はＮ－87°－Ｅである。規模は全長8.75m、上端幅５～20㎝、下端幅２～16㎝、深さ１～10㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＸ２性格不明遺構（第５図）

調査区南東部のＧ～Ｉ－６グリッドで付近で検出した。北側にＳＸ１、南側にＳＸ３が存在する。方向はＮ－88.5°－Ｗである。途中で分断され全長は西側で2.64m、東側で1.84mであり、更に東側の調査区外へと伸びる。規模は西側で上端幅８～15㎝、下端幅６～12㎝、深さ３～８㎝、東側で上端幅７～20㎝、下端幅４～17㎝、深さ１～６㎝を測る。遺物は出土していない。

ＳＸ３性格不明遺構（第５図）

調査区南東側のＧ～Ｉ－６グリッド付近で検出した。北側にＳＸ１・２が存在する。ＳＤ１を切ってＳＫ１に切られる。方向はＮ－87°－Ｅである。全長は12.7m検出され更に東側の調査区外へと伸びる。規模は上端幅５～16㎝、下端幅２～20㎝、深さ３～10㎝である。遺物は出土していない。

５．ピット（第５図）

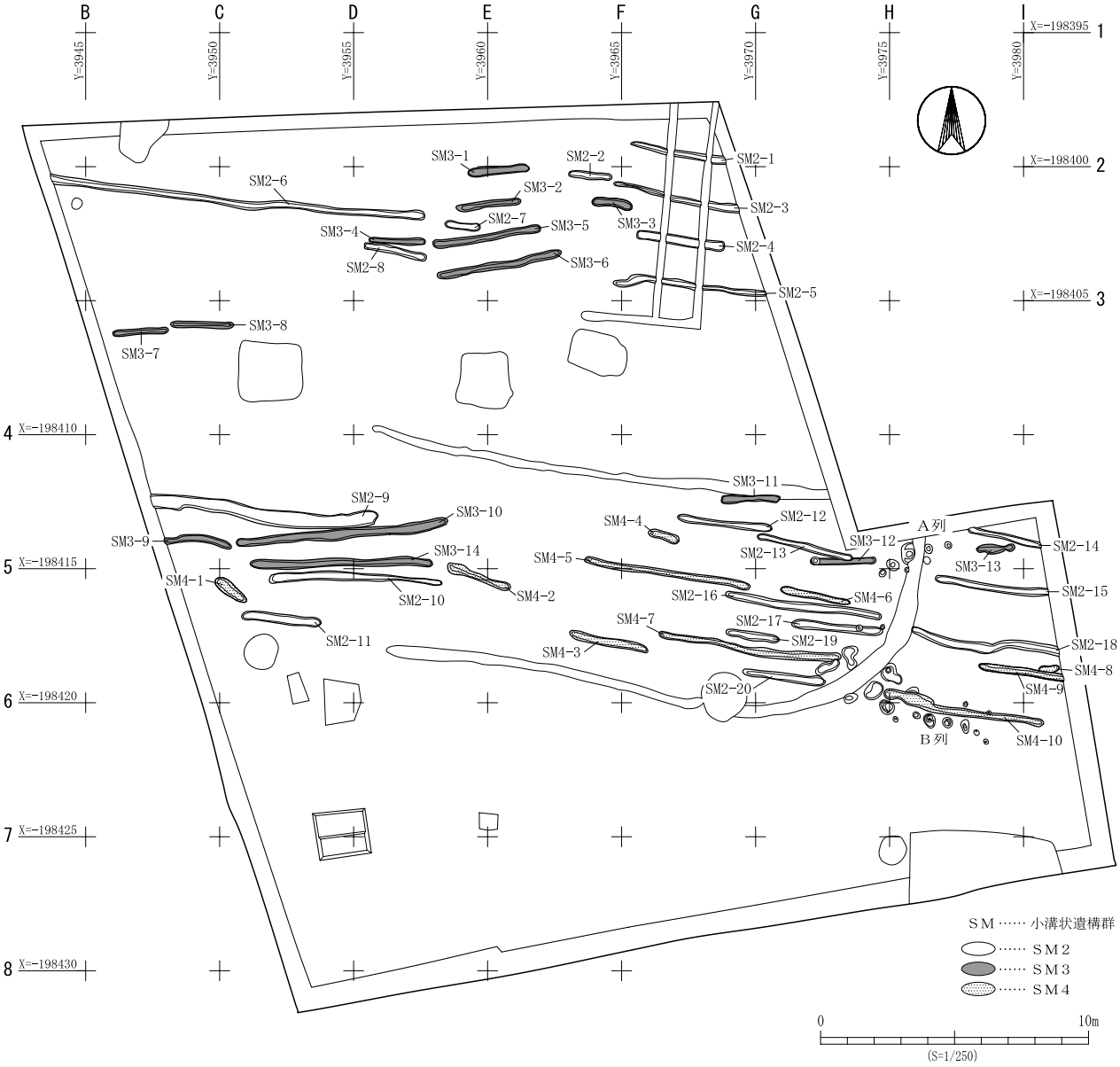
Ｈ－４グリッドで１個を検出した。平面形は円形を基調とするもので、断面形はＵ字形である。規模は29×23㎝、深さ８㎝を測る。堆積土は10YR3／4暗褐色粘土質シルトの単層である。遺物は出土していない。

第２節　Ⅳ層上面検出遺構

Ⅳ層上面で検出された遺構は小溝状遺構群３群44条、ピット21個である。Ⅲ層遺構調査後の掘り下げ時に存在が確認されたものである。小溝状遺構群については検出面がⅤ層上面のものもあるが、堆積土及び壁断面等の検討を踏まえ抽出作業を行った。以下、遺構種別毎に記述する。

１．小溝状遺構群

小溝状遺構群は３群44条を検出した。いずれも東西方向を主体としており南北のものは確認されていない。方向及び堆積土の類似性と溝の間隔等から分析を行い、３群のまとまりとしてＳＭ２～４の抽出を行った。検出長では全長約0.7～14mとばらつきが認められ、Ⅴ層上面のものと比較した場合には全体の規模が短く深さも浅い傾向が窺える。調査区中央から北側部分ではⅤ層上面で検出していることから、確認できなかったグリッド付近にも遺存状況が悪く削平された小溝が存在した可能性も考えられる。



第７図　Ⅳ層上面遺構平面図

ＳＭ２小溝状遺構群（第７図）

Ａ～Ｉ－１～５グリッド付近で検出された東西方向の溝跡20条をＳＭ２とした。同一方向の溝の中には途中で分断されたような状態のものもある。方向はＮ－76～88°－Ｗであり、平均はＮ－82.2°－Ｗとなる。ＳＭ３を切り、ＳＤ１に切られる。ＳＭ２－１・３・５・９・14・15は壁面の土層観察で更に調査区外へ伸びていることが確認されている。規模は調査区内での現存値を含めると全長1.3～14ｍ以上、上端幅10.5～60㎝、下端幅２～50㎝、深さ１～22㎝を測る。断面形はＵ字形であるが北側部分のＳＭ２－１～８では上部が削平されているために浅い皿状となっている。堆積土は大きく２層に大別が可能であり、色調は１層が10YR3／4暗褐色、２層は10YR4／3にぶい黄褐色を主体とする。２層にはⅤ層ブロックを含むものが多く認められ、深さが浅いものでは小溝底面で確認される工具痕による凹凸が僅かに確認される程度のものもある。土性はシルトを基調とするが場所によって粘土質、砂質の違いが認められた。

削平されて検出されなかった小溝の存在を考慮しなければならないが、小溝の分布を調査区中央よりやや北を境にして見てみると、北側のＳＭ２－１～８と南側のＳＭ２－９～21の２群に大きく分けることが可能であり、前者をＡ群、後者をＢ群とした場合、溝の間隔は心々間でＡ群は140～170㎝、Ｂ群は60～260㎝、平均では180㎝程となる。遺物は土師器甕、須恵器蓋、弥生土器が出土している。土師器、須恵器は小片のため図示できなかったが、弥生土器底部１点を第24図に示した。底部には布目圧痕が残り、底部外面及び底面外周にはヘラナデ調整が施されている。

ＳＭ３小溝状遺構群（第７図）

Ｂ～Ｈ－１～５グリッド付近で検出された東西方向を主とする溝跡14条をＳＭ３とした。同一方向の溝の中には途中で分断された状態のものもある。方向はほぼ真東西のＮ－81～92°－Ｅである。新旧関係はＳＤ３、ＳＭ２に切られる。ＳＭ３－９は西側壁断面で確認されることから調査区外へ更に伸びる。規模は全長1.42～7.95ｍ、上端幅13～43㎝、下端幅５～38㎝、深さ２～12㎝を測る。断面形はＵ字形であるが、浅いものは上部が削平されているため皿状となる。堆積土は２層に大別され１層は10YR3／4暗褐色、２層は10YR3／4にぶい黄褐色を主体とし、土性はシルトを基調するが粘性・砂質は場所によって異なっている。浅いものでは２層下部の工具痕が僅かに観察された。小溝の分布をＳＭ２と同様に見てみると北側のＳＭ３－１～８、南側のＳＭ３－９～14に分けられる。前者をＡ群、後者をＢ群とした場合、溝の間隔は心々間でＡ群120～140㎝、Ｂ群80～250㎝、平均では140㎝程となる。遺物は土師器甕が数点出土しているが小片のため図示できるものはなかった。

ＳＭ４小溝状遺構群（第７図）

Ｂ～Ｉ－４～６グリッド付近で検出された東西方向を主とする溝跡10条をＳＭ４とした。同一方向の溝の中には途中で分断された状態のものもある。方向はＮ－54～96°－Ｗである。ＳＭ４－９は東側壁断面で確認されたことから更に調査区外に伸びるものと考えられる。規模は全長0.75～6.85ｍ、上端幅18～50㎝、下端幅５～28㎝、深さ２～21㎝を測る。断面形はＵ字形であるが上部が削平されているものでは浅い皿状となる。堆積土はＳＭ２・３と同様に２層に大別される。土性は粘土質シルト、砂質シルトの両者が認められた。削平による影響のためか小溝の分布は調査区中央でのみ確認されており、平行関係もＳＭ２・３と比較した場合には把握し難い状況であるが、ＳＭ４－３～9での溝の間隔は心々間で230～280㎝である。遺物は土師器甕・壺、平瓦が出土しており、平瓦１点を第24図に示した。

第４表　Ⅳ層上面検出小溝状遺構群観察表

遺構名	番号	規模（cm）				方向	グリッド	新旧関係（古→新）	出土遺物
		全長	上端幅	下端幅	深さ				
SM2	1	〈360〉	20～30	10～20	5～8	N－81°－W	F-1	－	－
	2	164	23～30	11～19	3～4	N－85°－W	E-2	－	土師器甕
	3	〈480〉	11～32	2～21	3	N－78°－W	E・F-2	－	－
	4	330	30～39	28～30	2～6	N－82°－W	F-2	－	土師器甕
	5	〈575〉	11～38	10～22	2～4	N－86°－W	E～G-2	－	－
	6	〈1405〉	20～38	11～26	2～11	N－84°－W	A～D-2	－	土師器甕
	7	130	21～29	20～23	3	N－85°－W	D-2	－	－
	8	235	23～32	10～20	3～4	N－78°－W	D-2	－	－
	9	〈850〉	40～60	28～50	1～11	N－85°－W	B～D-4	－	－
	10	645	11～35	8～32	2～9	N－88°－W	C・D-5	－	土師器甕、須恵器蓋
	11	298	30～35	20～28	10～15	N－84.5°－W	C-5	－	－
	12	355	19～30	10～25	7～10	N－82.5°－W	F・G-4	－	土師器小片
	13	365	20～29	10～19	2～4	N－76°－W	G-4	SM3-12→SM2-13	－
	14	〈280〉	19～25	9～19	15	N－76°－W	H・I-4	－	弥生土器
	15	〈428〉	23～30	15～20	12～16	N－83°－W	H・I-5	－	－
	16	585	23～35	10～25	3～14	N－81.5°－W	F・G-5	－	－
	17	340	25～35	18～22	8～11	N－85.5°－W	G-5	－	－
	18	〈555〉	25～41	10～28	13～18	N－81°－W	H・I-5	－	－
	19	195	24～33	12～18	7～9	N－80°－W	F・G-5	SM2-18→SD1	－
	20	308	23～38	10～25	9～22	N－82°－W	F・G-5	－	－
SM3	1	230	28～32	20～28	2～8	N－81°－E	D・E-1・2	－	土師器甕
	2	242	23～30	10～19	4	N－84°－E	D・E-2	－	－
	3	150	29～35	18～28	3～4	N－98°－E	E・F-2	－	－
	4	210	20～28	12～18	3	N－92°－E	D-2	－	－
	5	405	28～30	10～22	4～9	N－81.5°－E	D・E-2	－	－
	6	470	23～32	10～22	8～9	N－79°－E	D・E-2	－	－
	7	210	20～23	9～13	4	N－86°－E	B-3	－	－
	8	285	22～27	5～ 7	2～3	N－91°－E	B・C-3	－	－
	9	〈255〉	20～28	10～18	4～6	N－91°－E	B・C-4	－	－
	10	795	29～43	18～38	3～9	N－84°－E	C・D-4	－	土師器甕
	11	(218)	20～30	10～27	7～12	N－89°－E	F・G-4	SM3-11→SD2	土師器甕
	12	245	22～23	18～19	3～4	N－88.5°－E	G-4	SM3-12→SM2-13	－
	13	142	13～38	5～22	8～9	N－86°－E	H-4	－	－
	14	680	22～35	10～28	8～13	N－90°－E	C・D-4・5	－	土師器甕
SM4	1	140	28～48	20～28	7～12	N－54°－W	B・C-5	－	－
	2	245	20～40	8～18	8～10	N－70°－W	D・E-4・5	－	土師器甕
	3	299	27～30	15～23	3～4	N－87.5°－W	E・F-5	－	－
	4	115	28～33	18～22	13～16	N－74°－W	F-4	－	土師器小片
	5	625	22～30	8～20	2～7	N－80.5°－W	E～G-4・5	－	土師器甕・壺、平瓦
	6	265	20～29	11～28	2	N－78°－W	G-5	－	－
	7	685	18～38	5～20	10～21	N－82°－W	F・G-5	－	－
	8	75	20～28	20～27	2～3	N－96°－W	I-5	－	－
	9	〈320〉	28～29	15～18	9～15	N－80.5°－W	H・I-5	－	－
	10	705	23～50	10～40	13～15	N－80°－W	G～I-5・6	－	－

２．ピット（第７図）

ピットは調査区南東側のＧ・Ｈ－４～６グリッド付近で合計24個が検出された。平面形は円形～楕円形を基調としており一部不整形のものも認められる。断面形はＵ字形であるが底面に段を有するものも存在する。規模は15～98㎝、深さ11～42㎝を測る。堆積土は10YR3／4暗褐色～10YR5／3にぶい黄褐色粘土質シルトを主体とするものであり、柱痕跡等は確認されていない。Ｈ－４グリッド南側と、Ｈ－６グリッド北側に列状の分布が認められ前者をＡ列、後者をＢ列とした場合、Ａ列は規模29～50㎝、深さ11～36㎝、方向はＮ－70°－Ｅである。Ｂ列は規模15～60㎝、深さ14～42㎝、方向はＮ－74.5°－Ｗである。Ｂ列では1.5ｍの間隔で４個のピットが並んで検出されている。いずれのピットからも遺物は出土しなかった。

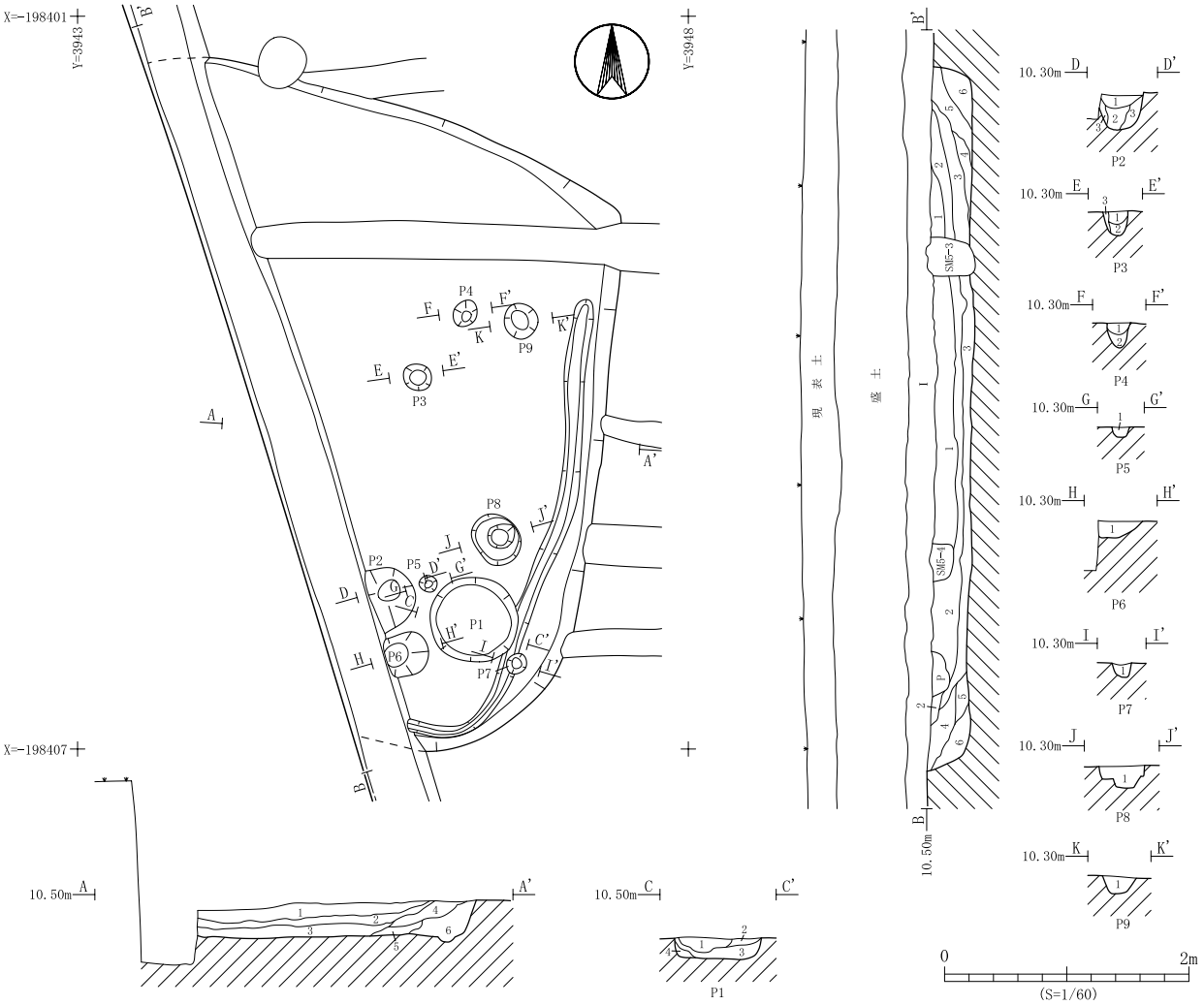
第３節　Ｖ層上面検出遺構

Ｖ層上面で検出された遺構は竪穴住居跡４軒、土坑２基、溝跡１条、小溝状遺構群４群49条、鍛冶遺構１基、性格不明遺構１基、ピット約900個である。以下、各遺構種別毎に記述する。

１．竪穴住居跡

ＳＩ１竪穴住居跡（第８図・図版２）

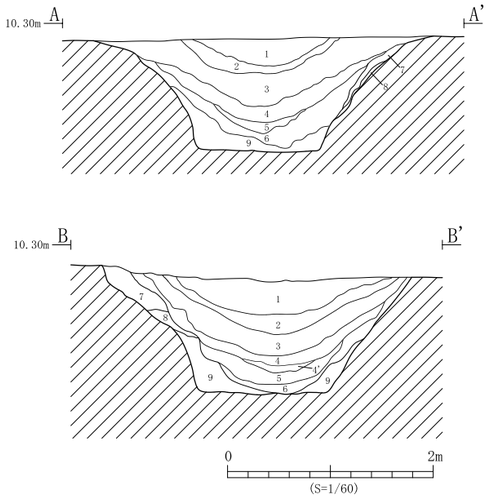
〔位置・新旧関係〕調査区北西部のＡ・Ｂ－２・３グリッドで検出された。小溝状遺構群ＳＭ３－７、ＳＭ５－３・



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
竪穴	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層斑紋状に含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	炭化物粒微量。
	3	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	腐植化進行。炭化物粒増加。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層ブロック斑紋状に含む。
	5	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ｖ層主体。
	6	10YR4/2 灰黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層粒含む。
P1	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ｖ層主体。炭化物粒含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。
	3	10YR6/4 にぶい黄橙	砂質シルト	炭化物粒微量。
	4	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。
P2	1	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。炭化物粒微量。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ｖ層の混合土。炭化粒微量。

遺構	層位	土　色	土　性	備　考
P2	3	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
P3	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ｖ層主体。Ｖ層粒ブロック斑紋状に含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅳ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐	砂質シルト	Ⅳ層斑紋状に含む。
P4	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ｖ層混合層。炭化物粒微量。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
P5	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
P6	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。Ｖ層斑紋状に含む。
P7	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	Ｖ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
P8	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	灰色味有り。
P9	1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	Ｖ層粒斑紋状に含む。

第８図　ＳＩ１竪穴住居跡平面・断面図



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SD4	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	層上端に灰白色火山灰を部分的に含有。
	2	10YR4/4 褐	粘土質シルト	管状斑鉄含む。酸化して全体橙色（鉄錆色）。
	3	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	グライ化進行。ブロック全体斑紋状に含む。
	4	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	大炭化物極微量。
	4’	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	砂粒含む。
	5	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	グライ化進行。酸化鉄錆橙色。
	6	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層ブロック含む。腐植化進行。
	7	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
	8	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
	9	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。

ＳＤ４断面図

第９図　Ⅴ層上面遺構平面図・ＳＤ４溝跡断面図

４、ＳＭ７－２・４に切られる。

〔平面形・規模〕およそ西側半分が調査区外のため全体は不明であるが、検出された範囲から平面形は隅丸方形を基調とするものと考えられる。規模は推定で南北5.1m、東西は4.4m以上である。方向は南北の壁を基準にするとＮ－17°－Ｅである。

〔堆積土〕堆積土は６層に分層された。Ⅴ層起源と考えられる黄褐色系の粘土質～砂質シルトを主体とする。土層観察ではⅤ層ブロックが確認されるが量・規模ともに少なく、レンズ状の堆積が認められることから自然堆積と考えられる。２～３層は炭化物粒を含み全体と比較して色調が暗く、有機物等の腐植化が進行したものと考えられる。

〔床面・壁面〕土壌化が進行している３層下部を生活堆積の一部と想定して床面と判断した。床面直上では炭化物粒がやや多く見られるが、硬化面や焼け面は確認できていない。床面は掘り方の底面であり、ほぼ平坦である。壁はやや緩やかな角度で立ち上がる。調査区西壁の断面では床面までの深さは30～35㎝を測る。

〔柱穴・周溝〕床面を精査した結果、ピットは９個検出された。南東部及び北東部でのまとまりが認められるが、いずれも規模が小さく浅いことから主柱穴と認定できるものはない。Ｐ１は形態および位置関係から貯蔵穴の可能性がある。Ｐ２～９の平面形は円形または楕円形を基調とするもので、規模は長軸14～52㎝、短軸11～35㎝、深さ９～31㎝を測る。断面形はＵ字形または浅い皿状である。Ｐ２～４の断面観察では２～３層に分層されるが、それ以外はいずれも単層である。周溝は東及び南側の現存する壁のやや内側で検出された。規模は上端幅８～17.5㎝、下端幅３～10㎝、深さ３～５㎝、断面形はＵ字形である。

〔炉〕調査範囲から焼け面および炭化物の集中箇所などは確認されなかった。

〔付帯施設〕Ｐ１は規模や位置関係から貯蔵穴の可能性がある。平面形は円形を基調として、規模は上端が直径72㎝、下端57～60㎝、深さ18㎝を測る。断面形は箱形で底面から壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４層に分層され、１層下部では炭化物粒がややまとまって検出されている。土師器甕の胴部破片が１層下部から出土している。

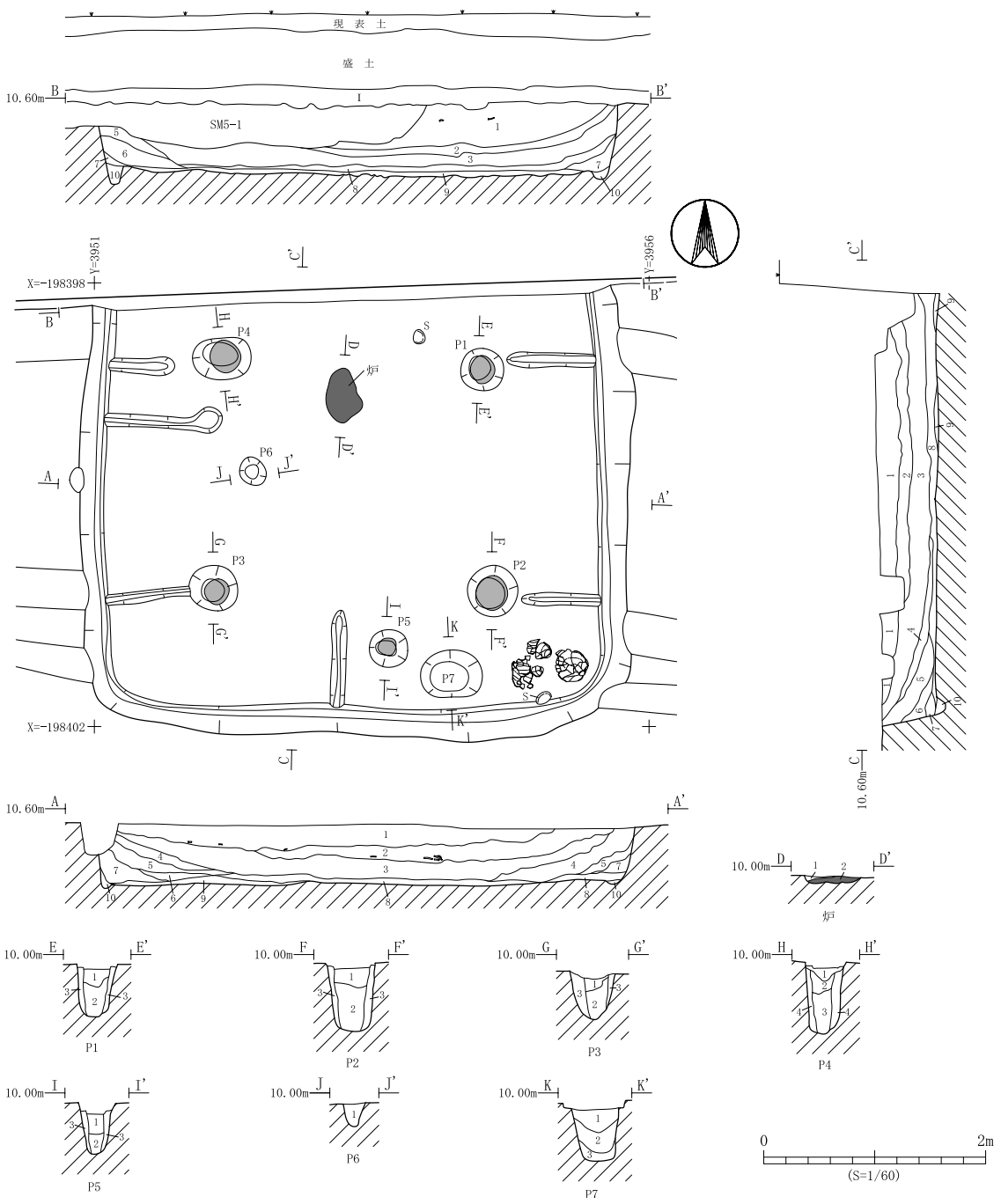
〔出土遺物〕遺物は堆積土中から土師器甕・坏の小片が少量検出されているが、いずれも小片のため図化できるものはない。しかし土師器甕の外面調整等を観察するとハケ目調整が施されるもので、周辺で検出されたＳＩ２～４出土のものと同じ特徴を有していることから古墳時代前期のものと考えられる。

ＳＩ２竪穴住居跡（第10・11図、図版２・３）

〔位置・新旧関係〕調査区北側中央やや西のＣ・Ｄ－１・２グリッドで検出された。小溝状遺構群ＳＭ２－６、ＳＭ５－１・２、ピットに切られる。

〔平面形・規模〕北側が調査区外のため全体の規模は不明であるが、検出された範囲から平面形は隅丸方形を基調とするものと考えられる。規模は東西4.9m、南北は４m以上である。炉の位置から主軸を南北と考えた場合、方向はほぼ南北である。

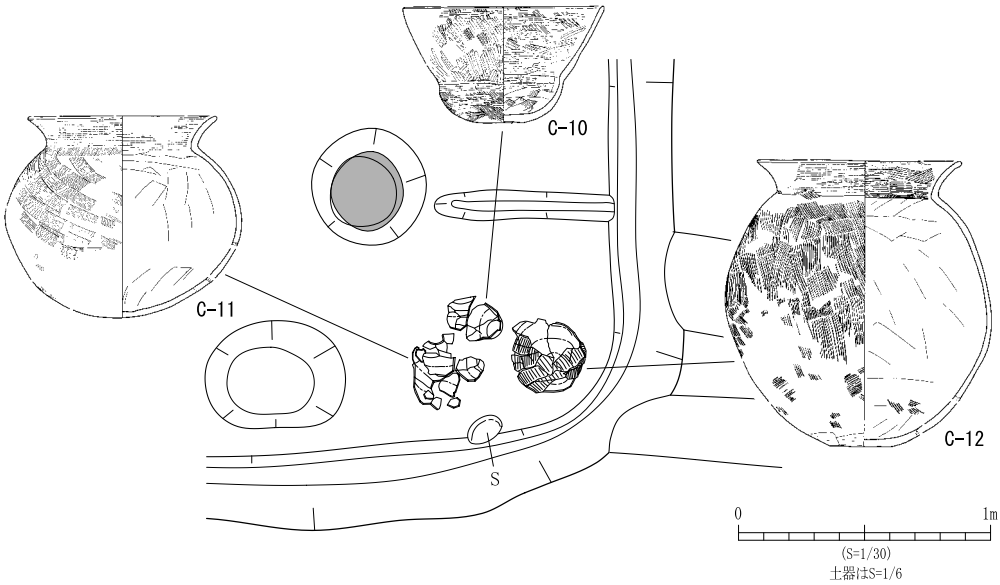
〔堆積土〕堆積土は10層に分層された。２層のにぶい黄褐色土層からは多量の土器が出土しており、遺物の分布は本住居の中央から東側に集中している。３層の灰黄褐色粘土質シルト層は、平面で見た限りではⅤ層に酷似していたが、本遺構を切るピットの壁面観察から更に下層で暗褐色土層（８層）が存在していることが明らかであり、また土性では３層がやや粘性が強く、Ⅴ層は砂質味が顕著なことから堆積土と判断することが可能であった。８層は炭化物を含み床面直上の生活堆積土層と考えられる。また、同様に床面から検出されたピットの柱痕跡部分でも炭化物粒の混入が確認された。レンズ状堆積のため自然堆積の可能性が指摘できるが、中層以下にあたる３～７層の黄褐色系のⅤ層を起源とする土層の堆積は、通常の風性や水性起因の堆積であった場合には風化のため酸化した状態（つまり黄褐色）は保たれず、色調には漸次的な変化が生じるものと考えられ、８層との間には大きな相違が認められることから比較的短時間で形成されたものと推測される。この際、仮定として３層を含めた黄褐色土層の形



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
竪穴	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	炭化物粒多く含む。腐植化顕著。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	層下部に土師器の出土集中。
	3	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ｖ層類似。粘性有する。
	4	10YR4/4 褐	粘土質シルト	酸化して鉄錆色味帯びる。
	5	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒含む。
	6	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	炭化物粒含む。
	7	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	砂質シルトとの互層(壁崩落)。
	8	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	炭化物粒多量。粘性有する。
	9	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	灰色味有り。全体斑紋状(貼り床)。
周溝	10	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ｖ層主体。炭化物粒微量。
炉	1	10YR4/4 褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。焼土粒斑紋多量。
	2	5YR4/8 赤褐	粘土質シルト	焼土主体。Ｖ層斑紋状に含む。
P1	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	砂質味やや有り。炭化物粒微量 (柱痕跡)。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒極々微量。Ｖ層粒含む (柱痕跡)。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ｖ層ブロック斑紋状に含む(掘り方埋土)。
P2	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量(柱痕跡)。

遺構	層位	土　色	土　性	備　考
P2	2	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量(柱痕跡)。
	3	10YR4/4 褐	粘土質シルト	層全体Ｖ層ブロック斑紋状構成(掘り方埋土)。
P3	1	10YR3/2 黒褐	砂質シルト	炭化物粒層左側に濃集(柱痕跡)。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	シルト味強い。炭化物粒子含む(柱痕跡)。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ｖ層斑紋状に含む(掘り方埋土)。
P4	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	炭化物粒微量(柱痕跡)。
	2	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒微量(柱痕跡)。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	砂質味有り。Ｖ層斑紋含む(柱痕跡)。
	4	10YR4/4 暗褐	粘土質シルト	Ｖ層斑紋状ブロック構成(掘り方埋土)。
P5	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒微量含む(柱痕跡)。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒微量(柱痕跡)。
	3	10YR6/4 にぶい黄橙	砂質シルト	シルト味強い。Ｖ層主体(掘り方埋土)。
P6	1	10YR5/3 にぶい黄褐	砂質シルト	上部に炭化物粒斑紋状に濃集。
P7	1	10YR4/2 灰黄褐	砂質シルト	Ⅳ層ブロック斑紋状含む。
	2	10YR4/4 褐	粘土質シルト	炭化物粒含む。
	3	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	暗灰色粘土の互層。

第10図　ＳＩ２竪穴住居跡平面・断面図



第11図　ＳＩ２竪穴住居跡床面遺物出土状況

成に関しては住居の上屋を覆った土屋根等が埋没したことも想定される。

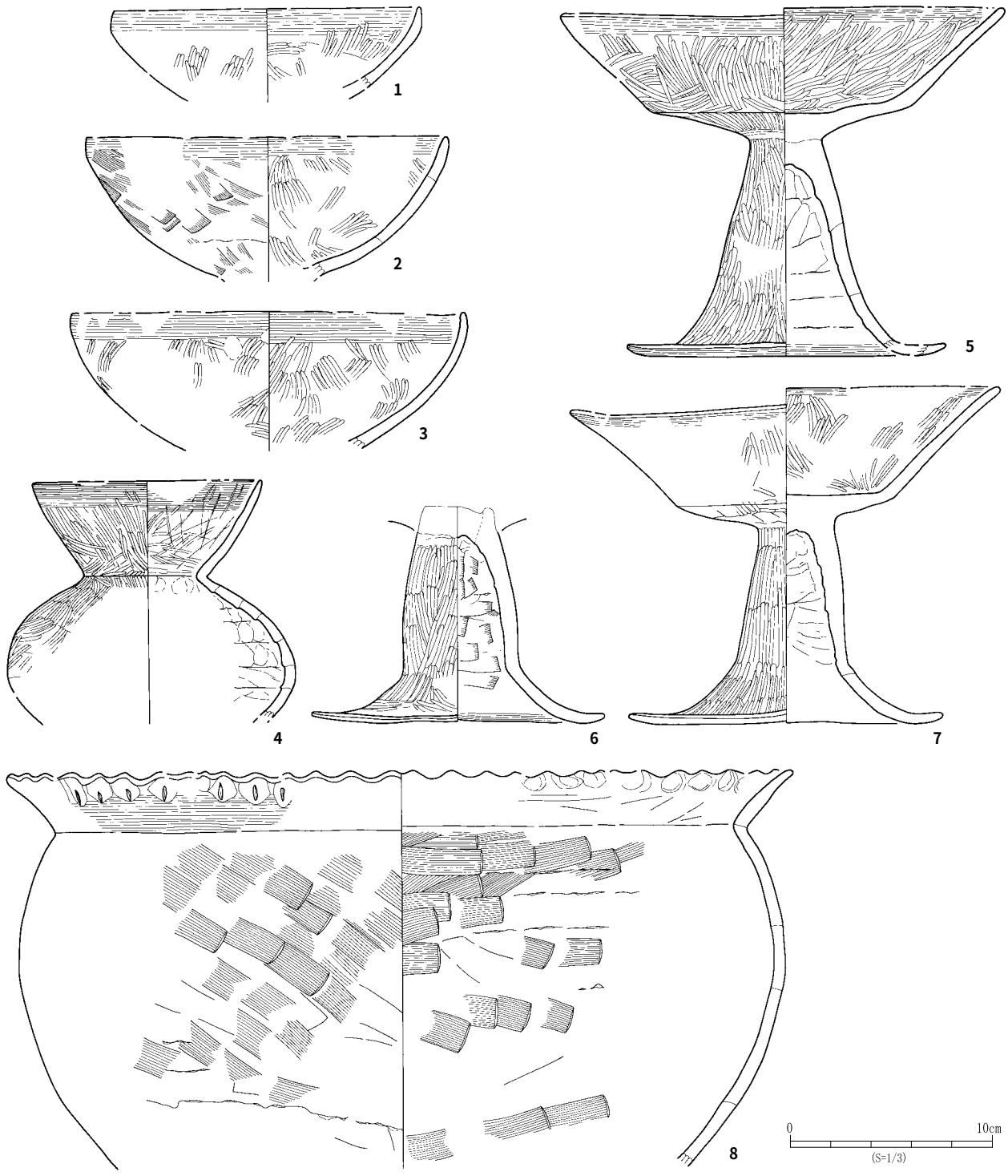
〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦であるが、中央部分は壁際周辺よりも堅く締まっている。断面では９層の貼床が確認された。壁はほぼ垂直に立ち上がり、北壁断面の観察では床面までの深さは60～66㎝を測る。

〔柱穴・周溝〕住居床面からは合計７個のピットが検出された。住居の対角線上に位置するＰ１～４はその配置から主柱穴と考えられ、本遺構は四本柱構造のものと推測される。いずれも直径22～30㎝程の柱痕跡が確認された。ピット掘り方の平面形は円形または楕円形を基調とし、断面形はいずれもＵ字形である。直径は36～53㎝、深さ44～65㎝を測る。Ｐ５はＰ２・３の中央からやや南東寄りで検出された。径18㎝程の柱痕跡が確認され、掘り方の平面形は円形で、規模は33×34㎝、深さ45㎝である。後述する貯蔵穴状ピット（Ｐ７）周辺で確認される、いわゆる「壁際ピット」と考えられる。また、Ｐ３とＰ４の間のやや内側からＰ６が検出されているが、規模22×27㎝、深さ20㎝とその他のピットに比べると規模・深さともに小さい。周溝は調査区外の北側を除いた壁直下で検出された。断面形はＵ字形で上端幅10～15㎝、下端幅３～６㎝、深さ４～16㎝を測る。また、壁側の周溝からは住居内側へほぼ直角方向に伸びる間仕切り状の小溝が６条検出されており、規模は長さ60～107㎝、上端幅10～18㎝、下端幅３～６㎝、深さ３～10㎝、断面形はＵ字形である。

〔炉〕住居北側に位置するＰ１・４の中間からやや内側中央よりで検出された。炭化物を含む赤変した部分を炉と判断した。範囲は46㎝×32㎝のほぼ南北を長軸とする不整楕円形である。被熱による焼け締まりは顕著ではないが、断面では５㎝程下まで赤変がおよんでいる。

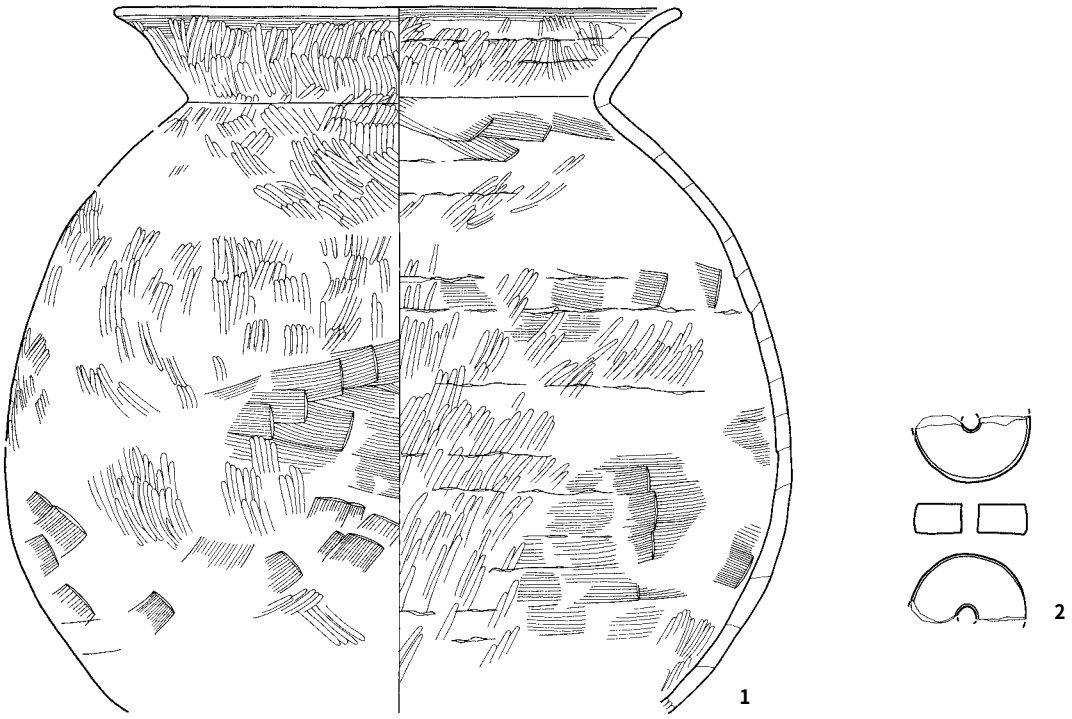
〔付帯施設〕床面南東側の南壁寄りで検出されたＰ７は、検出された位置及び形態から貯蔵穴状ピットと考えられる。平面形は長楕円形で規模は55×42㎝、断面形はＵ字形で深さ53㎝を測る。堆積土は３層に分層された。遺物は出土していない。

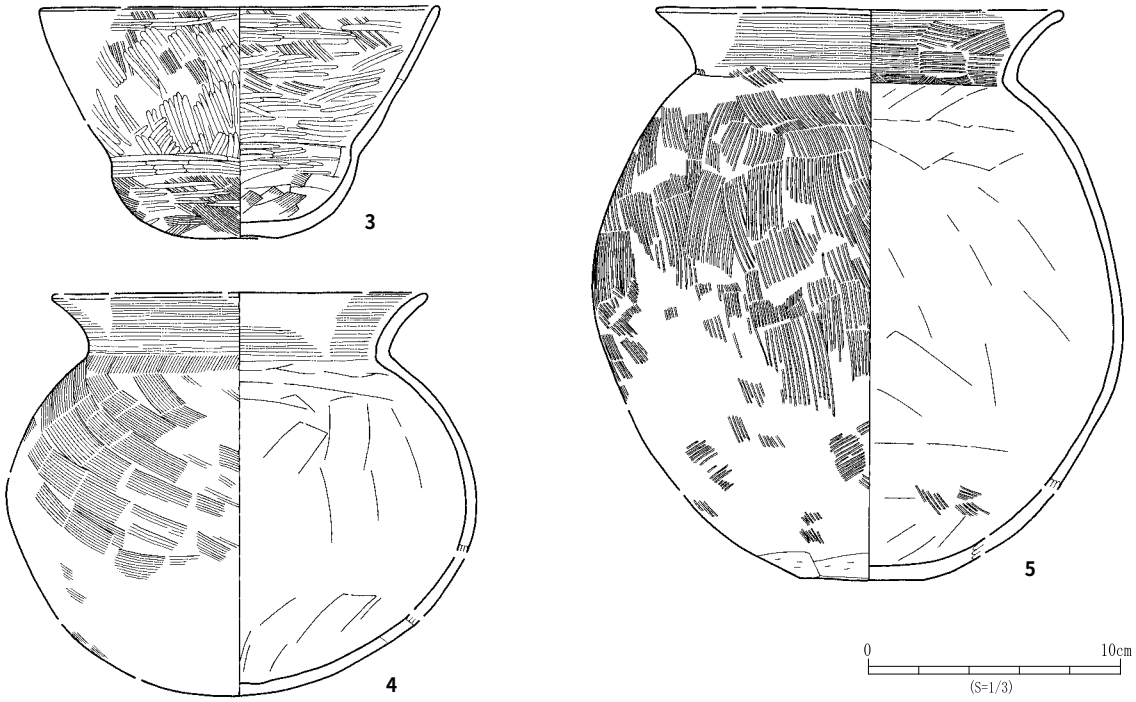
〔出土遺物〕（第12・13図、図版９～11）土師器坏・壺・高坏・甕を第12・13図に示した。上層にあたる２層下部では平面中央から東側部分に遺物の出土が集中しており、ほぼ完形品となった脚部柱状中空の高坏（第12図５・７）の出土状況が散在した状態であったことから、東側から投棄された状況が推測される。遺物が出土しなかった３～７層のにぶい黄褐～褐色土層を挟んで床面から出土した土器群Ｃ－10～12（第13図３～５）とは時間差を持つ一群として判断される。土師器甕（第12図８）は口径に比べて高さが低い器形を有し、口縁部には指頭圧痕及びつまみにより波状口縁を作出し、外面凹部の中央に爪形状の圧痕が施される。南東隅の床面からは土師器Ｃ－10壺、Ｃ－



№	登録番号	種別・器種	層　位	残　存	口径×器高×底径（cm）	調　整	備　考	写真図版
1	Ｃ－１	土師器・坏	2層	口縁部1/4	(14.9)×＜4.5＞×－	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	－	10－１
2	Ｃ－２	土師器・坏	2層	口縁部2/3（坏部1/2）	17.7×＜6.9＞×－	外面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	－	10－２
3	Ｃ－３	土師器・坏	2層	口縁部1/2弱	19.3×＜6.75＞×－	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ	－	10－３
4	Ｃ－４	土師器・壺	2層	口縁部ほぼ遺存・胴部上半1/3	11.2～11.4×＜11.8＞×－	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラミガキ、オサエ	－	10－７
5	Ｃ－５	土師器・高坏	2層	坏部ほぼ遺存・脚部3/4	21.5×17.3×13.8	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ	－	10－４
6	Ｃ－６	土師器・高坏	2層	脚柱部ほぼ遺存・裾部3/4弱	－×＜10.75＞×12.6×	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　内面：ヘラミガキ、ヨコナデ、ヘラナデ	－	10－６
7	Ｃ－７	土師器・高坏	2層	4/5	21.1×16.7×15.5	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ、ヘラナデ　内面：ヘラミガキ、ヨコナデ、ヘラナデ	－	10－５
8	Ｃ－８	土師器・甕	2層	口縁部1/8・胴部上半1/6弱	(39.0)×＜19.6＞×－	外面：指頭圧痕(爪形)、ヘラナデ　内面：指頭圧痕、ヘラナデ	－	11－２

第12図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物（１）





№	登録番号	種別・器種	層　位	残　存	口径×器高×底径（cm）	調　整	備　考	写真図版
1	Ｃ－９	土師器・甕	2層	口縁部1/3・胴部中位1/3	(26.0)×＜27.9＞×－	外面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	最大胴部形(31.0cm)	11－１
2	Ｐ－１	土製品・紡錘車	2層	1/2	外径(4.5)、内径(0.5)、厚さ1.2	ミガキ、ナデ	重量19.4g	11－３
3	Ｃ－10	土師器・壺	床面	口縁部上半1/3強・底部下半ほぼ遺存	(15.5)×9.2×3.3	外面：ハケ目、ヘラミガキ　内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	－	10－８
4	Ｃ－11	土師器・甕	床面	口縁部1/2弱・胴部1/3（上半ほぼ遺存）	14.8×16.0×－	外面：ヨコナデ、幅の狭いハケ目　内面：ヘラナデ、ヨコナデ	底部丸底	10－９
5	Ｃ－12	土師器・甕	床面	口縁部1/8・胴部3/4・底部遺存	(16.0)×23.6×4.7～5.2	外面：ヨコナデ、ハケ目、ケズリ　内面：ハケ目、ヘラナデ、ヨコナデ	－	10－10

第13図　ＳＩ２竪穴住居跡出土遺物（２）

11・12甕が出土している。Ｃ－11甕は底部が丸底のもので、外面の頚部～胴部のハケ目には、今回の調査で出土した甕のハケ目調整とは異なった幅が狭く浅い工具が用いられている。土製品では上層から紡錘車が１点出土した。本住居跡の時期は床面出土土器の特徴から古墳時代前期塩釜式期と考えられる。

ＳＩ３竪穴住居跡（第14・15図、図版３・４）

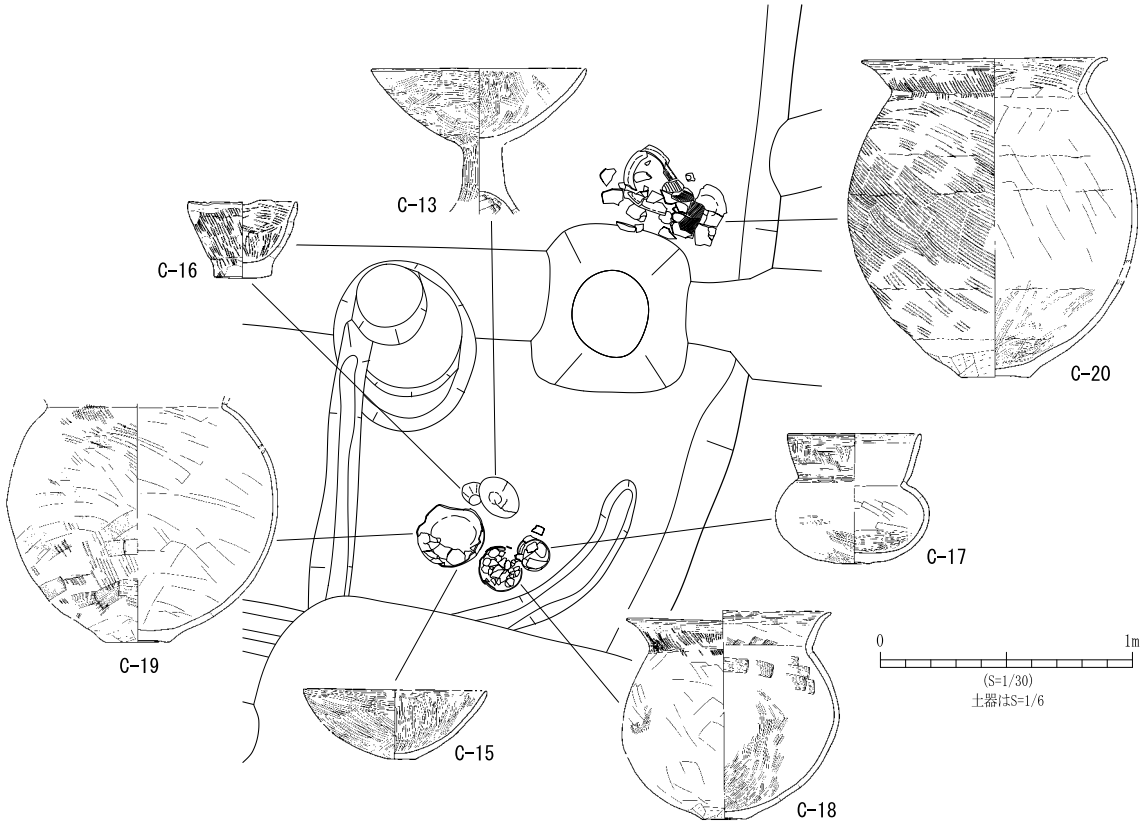
〔位置・新旧関係〕調査区北側中央やや東のＤ～Ｆ－３・４グリッドで検出された。小溝状遺構群ＳＭ２－５、ＳＭ３－２・３・５・６、ＳＭ５－２・３、ＳＭ６－２・３・５、ＳＭ８－１・２、ピットに切られる。

〔平面形・規模〕住居南東隅が宅地の基礎によって破壊されているが、遺存状態は良好なものと言える。平面形は隅丸方形を基調とするもので、規模は東西5.7m、南北5.4mを測る。炉の位置から主軸を東西と考えた場合、方向はＮ－85°－Ｗである。

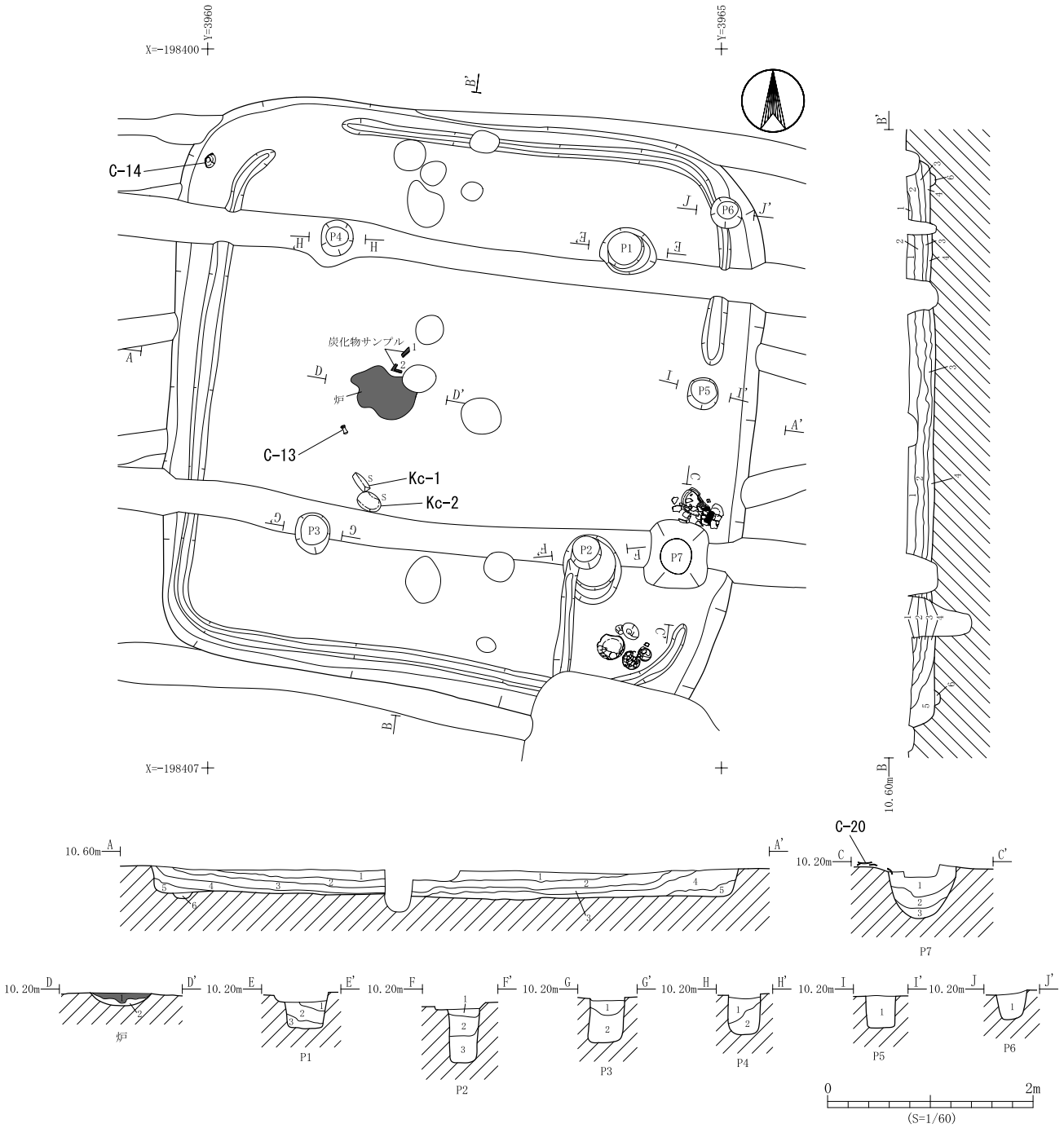
〔堆積土〕堆積土は６層に分層された。１・３層は暗褐色、２層は黄褐色、４層は褐灰色、５・６層はにぶい黄褐色の粘土質シルトでレンズ状に堆積した自然堆積層である。炭化物を含む１・３層は有機物の腐植が進行した層と考えられ、土層の堆積状況の在り方はＳＩ１に類似している。北西隅等では周溝が壁直下から内側で検出されているが、断面では住居の拡張等を示す土層の堆積状況は確認できなかった。

〔床面・壁面〕床面では貼り床や明瞭な硬化面は確認されず、ＳＩ１同様に炭化物粒を含む３層下を一つの基準として精査を行った。その結果、住居中央のやや西寄りの位置で地山が赤変した状態の焼け面が検出され、ピットや貯蔵穴等も検出されたことから床面と判断した。床面は平坦で目立った凹凸等は認められない。壁はほぼ垂直に立ち上がり、検出面から床面までの深さは20～26㎝程である。

〔柱穴・周溝〕ピットは床面から合計６個検出されている。Ｐ１～４は住居の対角線上に位置しており、その配置から主柱穴と考えられる。平面形はいずれも円形または楕円形を基調とするもので、断面形はＵ字形である。規模は31～53㎝、深さ33～56㎝を測り、柱痕跡は確認されていない。その他、住居東壁際の中央からやや北でＰ５、北



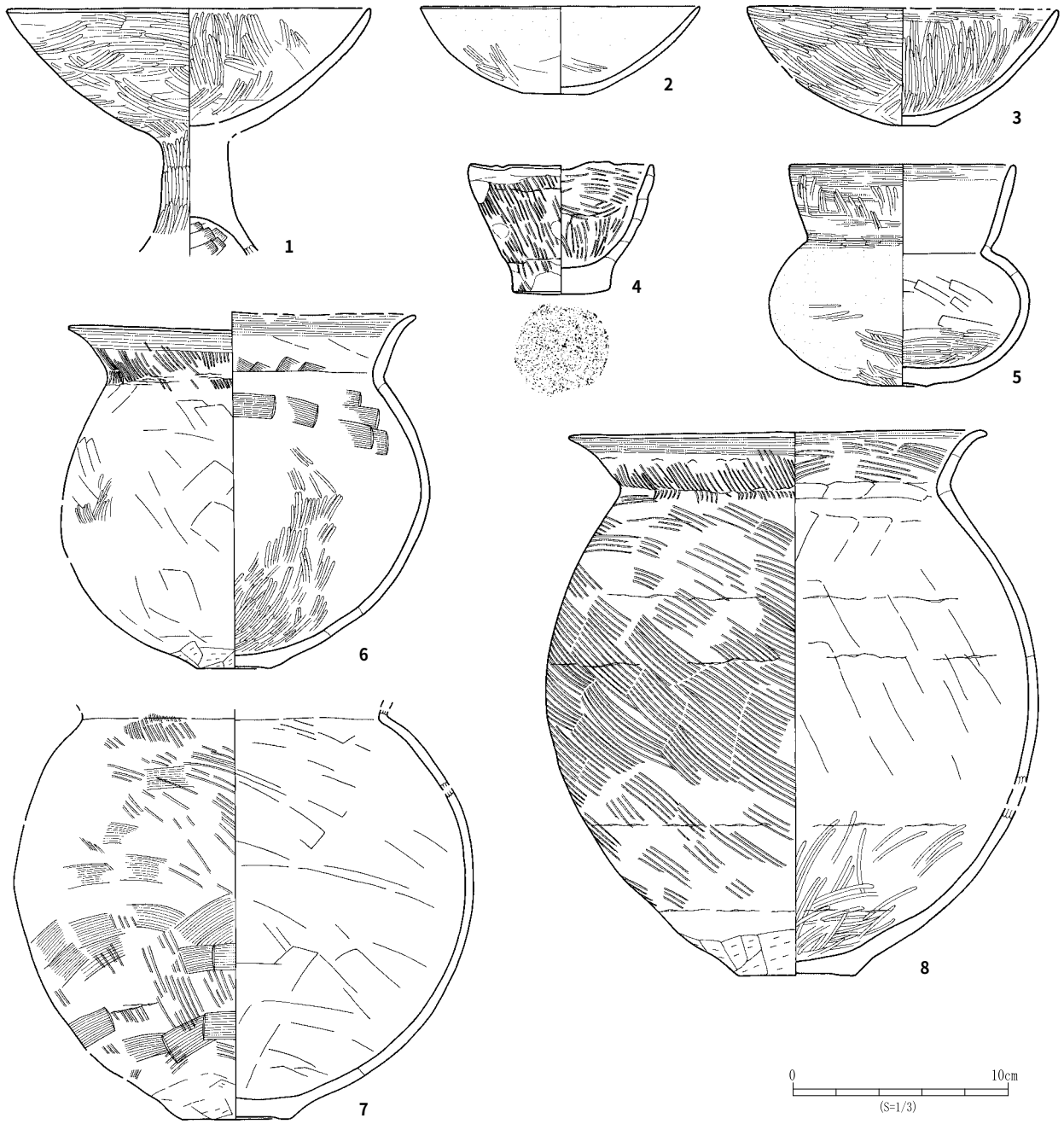
第14図　ＳＩ３竪穴住居跡床面遺物出土状況



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
竪穴	1	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。腐植化進行。炭化物粒含む。
	2	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層ブロック斑紋状に含む。
	3	10YR3/4 暗褐	粘土質シルト	腐植化進行。炭化物粒含む。
	4	10YR5/1 褐灰	粘土質シルト	炭化物粒少量。グライ化進行。
	5	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体の壁崩落土。
周溝	6	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。
炉	1	2.5YR5/6 明赤褐	砂質シルト	焼土粒斑紋状に含む。炭化物粒少量。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	焼土粒斑紋状含む。
P1	1	10YR3/3 暗褐	砂質シルト	砂質味強い。炭化物粒斑紋状に含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	砂質味強い。灰色粘土ブロック含む。
	3	10YR4/4 褐	砂質シルト	灰色味有り。
P2	1	10YR4/4 褐	粘土質シルト	砂質味やや有り。Ⅴ層主体。

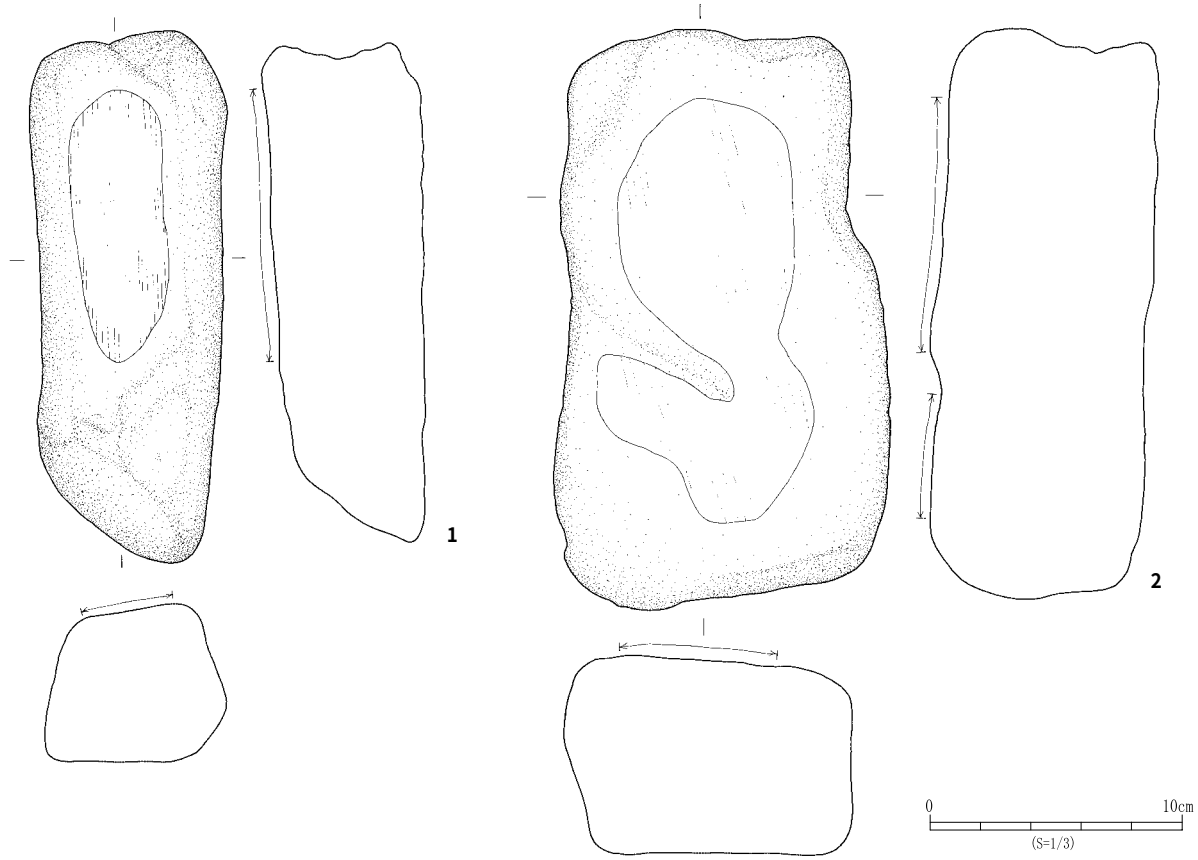
遺構	層位	土　色	土　性	備　考
P2	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
	3	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	砂質味やや有り。
P3	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。グライ化。炭化物粒含む。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅴ層ブロック斑紋状に含む。
P4	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	Ⅴ層ブロック斑紋状に含む。
	2	10YR4/4 褐	砂質シルト	Ⅴ層ブロック斑紋状に含む。
P5	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック斑紋状に含む。
P6	1	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック含む。
P7	1	10YR5/2 灰黄褐	砂質シルト	炭化物粒少量。土師器片混入。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	炭化物粒含む。
	3	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒含む。

第15図　ＳＩ３竪穴住居跡平面・断面図



№	登録番号	種別・器種	層　位	残　存	口径×器高×底径（cm）	調　整	備　考	写真図版
1	Ｃ－13	土師器・高坏	床面	坏部～脚柱部ほぼ遺存	16.6×＜11.5＞	外面：ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ、ヘラナデ	脚部欠損	11－４
2	Ｃ－14	土師器・坏	床面	2/3・底部遺存	12.8×4.0×3.0	外面：ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ	摩滅激しい	11－５
3	Ｃ－15	土師器・坏	床面	口縁部3/4弱･底部遺存	14.0～14.3×5.5×2.4	外面：ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ	－	11－６
4	Ｃ－16	土師器・小型鉢	床面	完形	8.3[7.8～8.4]×6.2×4.5[4.1～4.5]	外面：オサエ、ハケ目　　内面：オサエ、ハケ目	口縁部・底部の歪み激しい	11－７
5	Ｃ－17	土師器・壺	床面	口縁部2/3強・胴部ほぼ遺存・底部遺存	10.4～10.6×10.3×2.7	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　　内面：ヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキ	外面の摩滅激しい	11－８
6	Ｃ－18	土師器・甕	床面	口縁部4／5・胴部2/3強・底部遺存	16.0×16.5×3.5	外面：ヨコナデ、ハケ目、ヘラナデ、ケズリ　　内面：ヨコナデ、ヘラナデ	－	11－９
7	Ｃ－19	土師器・甕	床面	胴下半から底部遺存	－×＜18.9＞×6.0	外面：ハケ目、ヘラナデ、ケズリ　　内面：ヘラナデ	－	11－10
8	Ｃ－20	土師器・甕	床面	復元により略完形(胴部部分的に欠損)	19.3～19.8×20.3×5.1～5.3	外面：ヨコナデ、ハケ目、ケズリ　　内面：ヨコナデ、ハケ目、ヘラナデ、ヘラミガキ	－	11－11

第16図　ＳＩ３竪穴住居跡出土遺物（１）



№	登録番号	種別	出土遺構・層位	石質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	写真番号
1	Kc－1	礫石器・砥石	床面	珪質頁岩	21.1	7.8	6.2	1600	－	－
2	Kc－2	礫石器・砥石	床面	ホルンフェルス	22.6	13.2	8.6	5220	－	－

第17図　ＳＩ３竪穴住居跡出土遺物（２）

東隅ではＰ６が検出されているが規模は28～32㎝、深さ26～30㎝と主柱穴に比べやや小さいものである。後述するＰ７は形態及び位置関係から貯蔵穴状ピットと考えられる。周溝は壁のやや内側で検出され、北西隅と東中央付近では確認されなかった。規模は上端幅13～24㎝、下端幅５～10㎝、断面形はＵ字形で深さ４～８㎝を測る。また、床面南東隅では住居南壁からＰ２へ向かって直角に伸びる間仕切り状の小溝が検出されており、規模は上端幅12～18㎝、下端幅３～６㎝、深さ２～５㎝である。

〔炉〕住居床面中央から約50㎝程西の位置で検出された赤変した部分を炉と判断した。36～65㎝の不整楕円形の範囲で焼土の広がりや赤変した部分が認められた。被熱による焼き締まりは顕著ではないが、断面では12㎝程下まで赤変した状態が認められた。炉の北側では炭化材が検出されている。

〔付帯施設〕主柱穴Ｐ２の東側で検出されたＰ７は形態および位置関係から貯蔵穴状ピットと考えられる。平面形は隅丸方形を基調とするもので規模は63×59㎝、断面形はＵ字形で深さ47㎝である。堆積土は３層に分層される自然堆積層であり、北側の床面で出土した土師器Ｃ－20甕の破片の一部が１層へ流れ込んだ状態で検出されている。

〔出土遺物〕（第16・17図、図版９・11）本住居の堆積土中からはほとんど遺物が検出されておらず、図化したものはいずれも床面出土のものである。ここでは住居床面南東隅で集中が見られた土器の出土状態について詳述する（第14図）。周溝からＰ２に伸びる小溝と貯蔵穴状ピットに挟まれた狭い範囲からほぼ完形品となる土師器がまとまって検出されている。口縁部を欠損するＣ－19甕はＣ－15坏を受け皿にした状態で検出された。Ｃ－18甕は口縁部を下に伏せた状態、Ｃ－17壺は正位に置かれた状態で土圧により潰れていた。Ｃ－13高坏の坏部は伏せた状態の

Ｃ－16小型鉢から転落したような状態で出土している。このＣ－13高坏は炉の南側で検出された脚部と接合し、上記した状況からみて意図的に坏部と脚部が分離された可能性もある。その他、Ｃ－20甕は貯蔵穴状ピット北側で横位に潰れた状態で出土している。Ｃ－14坏は北西側の住居壁と周溝の間から検出されたものである。また、炉の南側ではＫｃ－１・２砥石が２個並んで検出されている。本住居跡の時期については出土土器の特徴から古墳時代前期塩釜式期と考えられる。

ＳＩ４竪穴住居跡（第18・19図、図版３・４）

〔位置・新旧関係〕調査区中央のＥ・Ｆ－３・４グリッドで検出された。ＳＤ２、小溝状遺構群ＳＭ２－５、ＳＭ３－２・３・５～７、ＳＭ５－５～７、ＳＭ６－８～10・12、ＳＭ７－６、ピットに切られる。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形を基調とするもので、規模は東西4.3m、南北4.4mである。柱穴の配置及び炉の位置関係から主軸を東西と考えた場合Ｎ－85°－Ｗであり、ＳＩ３とは同じ方向を示す。

〔堆積土〕堆積土は９層に分層された。１・３～５層は暗褐色、２層はにぶい黄褐色の粘土質シルトであり、黄褐色系の土層を挟んで暗褐色土層が上下に存在する堆積状況の在り方はＳＩ２と酷似している。底面直上にあたる５層では炭化物粒・焼土粒が認められる等ＳＩ２と同様の埋没要因が考えられる。断面の観察ではレンズ状の堆積が認められることから自然堆積層と考えられる。

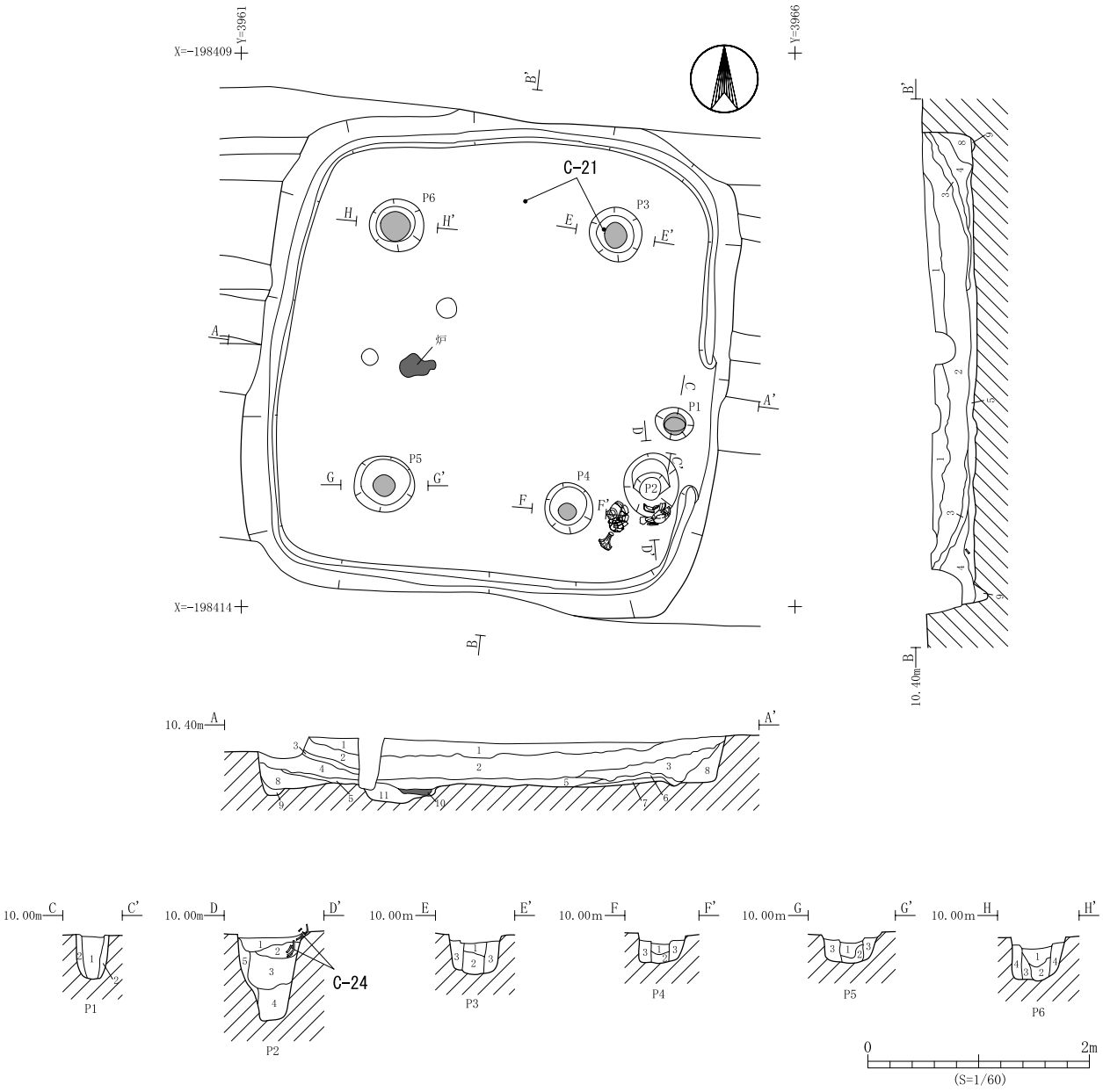
〔床面・壁面〕床面はほぼ平坦であり、地山Ｖ層を床面とする直床式のものであるが、Ｐ１周辺では締まりを有する貼り床状の高まりが認められた。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。検出面から床面までの深さは40～45㎝を測り、遺存状況は良好である。

〔柱穴・周溝〕ピットは床面から合計６個検出されている。Ｐ３～６は住居の対角線上に位置しており、その配置から４本柱の主柱穴構造と考えられる。平面形は円形を基調とするもので断面形はＵ字形である。規模は径45～55㎝、深さ27～40㎝である。いずれのピットからも直径17～27㎝の柱痕跡が確認された。後述するＰ２は検出された位置及び形態から貯蔵穴状ピットと考えられる。Ｐ１はＰ２北側の東壁際で検出されたもので、いわゆる「壁際ピット」である。平面形は楕円形を基調とするもので規模は35×29㎝、断面形はＵ字形で深さ40㎝である。直径20㎝の柱痕跡が確認されている。周溝は住居壁直下で東壁中央の一部分を除いて確認された。規模は上端幅13～20㎝、下端幅５～10㎝、断面形はＵ字形で深さ４～12㎝である。

〔炉〕床面中央から60㎝程西の位置で検出した赤変した部分を炉と判断した。東西方向を長軸とする20～30㎝の不整楕円形の範囲では焼土の広がりと炭化物の分布が認められた。断面では５㎝程下まで赤変した範囲が及んでいるが、被熱による焼け締まりは確認されなかった。

〔付帯施設〕住居の南東に位置するＰ２は位置及び形態から貯蔵穴状ピットと考えられる。平面形は楕円形を基調とするもので規模は60×50㎝である。断面形はＵ字形を基本とするが北壁部分は他と比べやや緩やかに立ち上がる。堆積土は５層に分層される自然堆積層で、南側の床面で検出された土師器Ｃ－24甕の破片が２層に混入していた。出土状況から埋没過程で南側から土師器甕が倒れ込んだ状況が推測される。

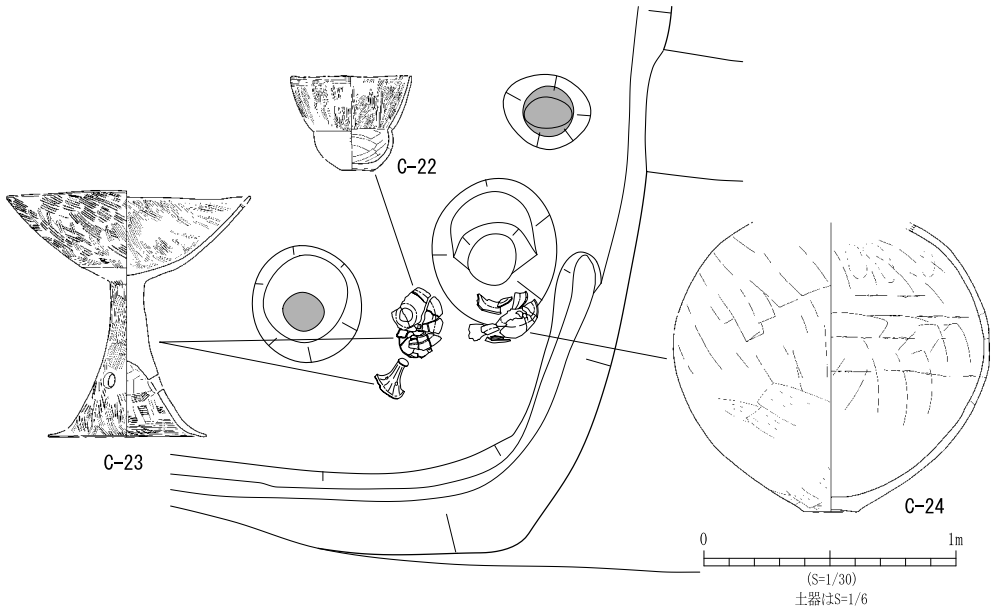
〔出土遺物〕（第20図、図版12）本住居から出土した遺物には土師器坏・高坏・壺・甕がある。堆積土中からは殆ど遺物は出土せず、床面及び直上から出土したものを第20図に示した。以下、出土状況について詳述する（第19図）。住居床面の南東隅のＰ２・４の間で土師器Ｃ－23高坏、Ｃ－22・24甕が検出された。Ｃ－23高坏はほぼ完形品となったもので、坏部と脚部が分離した横倒しの状態で検出されている。伏せた状態で検出された坏部内からは内外面に赤彩が施されたＣ－22小型壺が潰れた状態で出土している。また、これらの東側ではＣ－24甕が横倒しになった状態で検出されている。Ｃ－21小型壺は北側付近の床面から３㎝程浮いた状態で検出されている。本住居跡の時期は土器の器形及び調整の特徴から古墳時代前期の塩釜式期のものと考えられる。



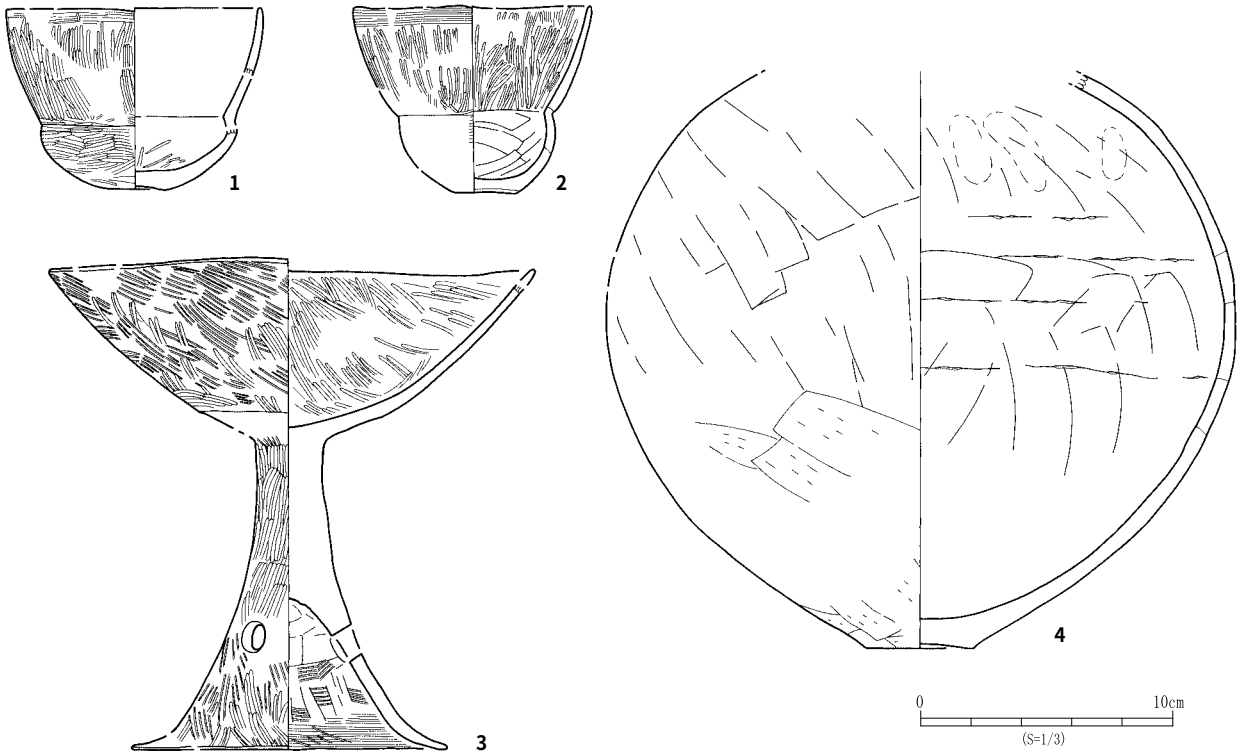
遺構	層位	土　色	土　性	備　考
竪穴	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。砂質味若干有り。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
	3	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。Ⅴ層粒含む。腐植化進行。
	4	10YR3/4 暗褐	砂質シルト	全体斜方向の互層。Ⅳ・Ⅴ層の混合土。
	5	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	腐植化進行。炭化物粒・焼土粒少量。
	6	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅴ・Ⅳ層の混合土腐植化進行。斑紋含む。
	7	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層粒～ブロック斑紋状。
	8	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ主体。壁崩落土。
周溝	9	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土腐植化進行。斑紋含む。
炉	10	2.5YR5/6 明赤褐	砂質シルト	シルト味強い。焼土・炭化物粒含む。
	11	10YR4/4 褐	粘土質シルト	焼土粒・炭化物粒含む。
P1	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒子極々微量(柱痕跡)。
	2	10YR5/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック含む(掘り方埋土)。
P2	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック含む。
	3	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。

遺構	層位	土　色	土　性	備　考
P2	4	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。炭化物粒微量。
	5	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	層相密。Ⅴ層主体。
P3	1	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	炭化物粒微量(柱痕跡)。
	2	10YR4/4 褐	砂質シルト	灰色味有り。炭化物粒少量(柱痕跡)。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	1層よりシルト味強い(掘り方埋土)。
P4	1	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層ブロック斑紋状(柱痕跡)。
	2	10YR4/4 褐	粘土質シルト	炭化物粒微量(柱痕跡)。
	3	10YR6/4にぶい黄橙	粘土質シルト	粘性強い(掘り方埋土)。
P5	1	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅴ層斑紋状に含む(柱痕跡)。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	暗褐色粘土斑紋状含む(柱痕跡)。
	3	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量(掘り方埋土)。
P6	1	10YR5/4 にぶい黄褐	砂質シルト	黄褐色粘土ブロック含む(柱痕跡)。
	2	10YR5/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	暗褐色粘土粒含む(柱痕跡)。
	3	10YR4/4 褐	砂質シルト	Ⅴ層ブロック斑紋状(掘り方埋土)。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐	砂質シルト	シルト味強い(掘り方埋土)。

第18図　ＳＩ４竪穴住居跡平面・断面図



第19図　ＳＩ４竪穴住居跡床面遺物出土状況



№	登録番号	種別・器種	層　位	残　存	口径×器高×底径（cm）	調　整	備　考	写真図版
1	Ｃ－21	土師器・小型壺	床面直上	2/3強	9.2×7.4×(2.5)	外面：ヘラナデ、ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ	－	12－１
2	Ｃ－22	土師器・小型壺	床面	3/4強	10.0×7.2×2.3	外面：ヨコナデ、ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ、ヨコナデ	内外面赤彩、剝離激しい	12－２
3	Ｃ－23	土師器・高坏	床面	復元により略完形（口縁部4/5･脚部2/3強）	19.2［18.8～19.4］×19.5×12.5	外面：ハケ目、ヘラミガキ　　内面：ヘラミガキ、ヘラナデ、ハケ目、ヨコナデ	－	12－３
4	Ｃ－24	土師器・甕	床面	底部ほぼ遺存（一部剝落）・胴部1/3	－×＜22.7＞×4.2～4.4	外面：ヘラナデ、ケズリ　　内面：オサエ、ヘラナデ	－	12－４

第20図　ＳＩ４竪穴住居跡出土遺物

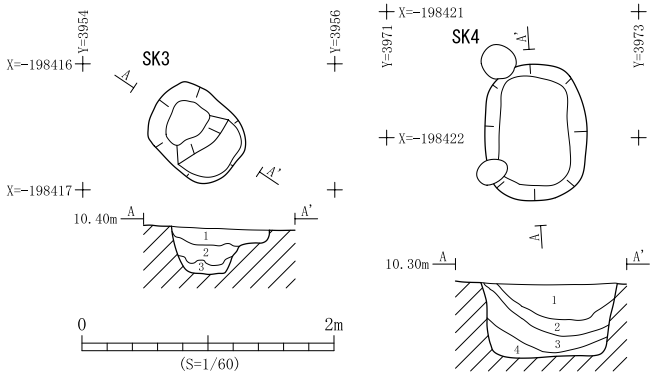
２．土坑

ＳＫ３土坑（第21図）

調査区中央からやや南西のＤ・Ｅ－５グリッドで検出した。平面形は隅丸長方形を基調とするもので、長軸方向はＮ－50°－Ｗである。規模は長軸79㎝、短軸62㎝を測る。断面形は逆台形であるが南東側にテラス状の平坦面を有する。検出面からの深さはテラスまでが15㎝、底面までは38㎝である。堆積土は３層に分層され、Ⅴ層ブロック等が混入する人為堆積層と考えられる。遺物は出土していない。

ＳＫ４土坑（第21図）

調査区南東のＨ－６グリッドで検出した。ピットＰ530・810に切られる。平面形は隅丸長方形を基調とするもので、長軸方向はほぼ南北である。規模は長軸108㎝、短軸81㎝を測る。断面形は箱形に近い逆台形である。底面はほぼ平坦で検出面からの深さは60㎝である。堆積土は４層に大別される自然堆積層と考えられ、断面の一部では砂がラミナ状に堆積する部分やグライ化の影響も認められる。遺物は出土していない。



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
SK3	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。管状斑鉄酸化。
	2	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。Ⅴ層ブロック含む。
	3	10YR5/6 黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅴ層ブロック斑紋状含む。
SK4	1	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。Ⅴ層粒ブロック含む。
	2	10YR4/1 褐灰	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。全体灰色味有り。ラミナ状堆積。
	3	7.5YR4/1 褐灰	粘土質シルト	Ⅴ層主体。上位はグライ化。管状斑鉄酸化。
	4	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。上部にⅣ層粒子集中。

第21図　ＳＫ３・４土坑平面・断面図

３．溝跡

ＳＤ４溝跡（第９図・図版５）

ＳＤ４はこれまでの周辺調査で検出されてきた官衙と考えられる建物群を区画する南辺の溝跡である。調査区の南Ｃ～Ｉ－６・７グリッド付近で検出され、平成６年度の試掘調査№30トレンチで確認されていたものである。ピットとは重複関係にあるが新旧については明らかではない。方向は溝の中心で真東西方向からは若干北に振れたＮ－84°－Ｗであり、西壁及び南壁側の調査区外へと一直線に伸びている。調査区内での検出長は最大で31ｍ程であるが、西壁及び南壁際は壁崩落の可能性に配慮して溝底面までの掘削は行っていない。規模は上端幅2.5～3.3m、下端幅0.9～1.1m、検出面からの深さは約１ｍである。断面形は逆台形を基本とするが上端付近は緩やかな角度で立ち上がる。堆積土は９層に分層される。第４図の調査区壁面土層断面図（西壁Ａ）ではＳＤ４断面Ａ－Ａ’を見通しで合成したもので、Ⅴ層からの掘り込みが確認された。溝の底面はⅧ層（砂礫層）上面であり、調査区内では東側に向かって緩やかに傾斜している。本調査区では底面等に掘り直しは確認されなかったが、周辺部の調査ではその痕跡が確認されており、断面Ａ・Ｂの観察から１～８層が掘り直しに相当するものと考えられる。この場合断面形はＶ字形となり、掘り直しによる溝底面が堆積土中または同じ砂礫層であったことが掘り直しの痕跡が確認されなかった要因に挙げられる。遺物はほとんど見られずいずれも小片であるが、土師器坏・甕、埴輪片、砥石が出土している。出土層位が上層のもので溝の時期を示す資料ではないと考えられるが、第24図に土師器坏、埴輪、砥石を図示した。土師器Ｄ－１坏は西側堆積土最上層から検出されたものである。ロクロ整形され、内面には黒色処理及びミガキが施される。

４．小溝状遺構群

Ⅴ層上面の小溝状遺構群は調査区中央の南から北側の全域で合計４群49条が検出されている。群としてのまとまりは溝の方向及び間隔等から判断して抽出を行った。今時調査の全体の傾向として東西方向の溝が主体を占める中で、ＳＭ８は唯一の南北方向の一群となる。Ⅴ層ではⅣ層上面検出の小溝状遺構群と比較した場合、規模では検出長が長く調査区外に伸びるものが多い傾向が見受けられる。溝の断面形はいずれもＵ字形を基本とするが、上部が削平された深さの浅いものは皿状となっている。堆積土は２層に大別され、１層は暗褐色、２層はにぶい黄褐～褐色系土層を主体とする。２層下部ではブロックの含有が認められることから工具痕等の影響も推測される。土性はシルトを基調とするが同一の溝跡でも場所によって粘土質、砂質の両方が認められることから地山の状況や埋土に起因するものと考えられる。遺物はⅢ～Ⅳ層同様に小片のみであるため具体的に時期や性格を特定できる遺物は検出されていない。以下、各群毎に記述する。

ＳＭ５小溝状遺構群（第８図）

Ａ～Ｉ－１～５グリッド付近で検出された東西方向を主とする溝跡８条をＳＭ５とした。ＳＭ５－６・７は途中分断されるが同一のものと考えられる。方向はＮ－82～85°－Ｗであり、平均ではＮ－83°－Ｗとなる。新旧関係はＳＩ２～４、ＳＭ６～８を切り、ＳＤ２、ＳＭ２・３に切られる。調査区内での検出長は13.9～33.6m程で８条全てが調査区外へと伸びる。規模は上端幅20～55㎝、下端幅８～32㎝、深さ８～35㎝を測る。小溝状遺構の間隔は心々距離で2.25～2.65mであり、平均では2.46m程となる。遺物は土師器甕・壺、須恵器蓋が出土しているが小片のため図示できるものはなかった。

ＳＭ６小溝状遺構群（第８図）

Ｂ～Ｉ－１～５グリッド付近で検出された東西方向を主とする溝跡18条をＳＭ６とした。同じ方向の溝の中には途中で分断された状態のものもあるが、同一のものと考えられる。方向はＮ－89～94°－Ｗであり、平均ではＮ－86°－Ｗである。新旧関係はＳＩ３、ＳＩ４、ＳＭ６～８を切り、ＳＭ２～５、ＳＤ１・２に切られる。調査区内での検出長は0.6～2.14m程で、ＳＭ６－１～４・６～７・９～11・13・16～18は調査区外へと伸びる。規模は上端幅15～50㎝、下端幅７～35㎝、深さ１～26㎝を測る。小溝状遺構の間隔は心々距離で0.6～2.15m、平均では1.73m程となる。出土遺物は土師器甕の小片が数点出土しているが図示できるものはない。

ＳＭ７小溝状遺構群（第８図）

Ａ～Ｉ－１～６グリッド付近で検出された東西方向を主とする溝跡10条をＳＭ７とした。同じ方向の溝の中には途中で分断された状態のものもあるが、ほぼ東西方向であるものが多い。新旧関係はＳＩ１・４を切り、ＳＫ１、ＳＤ１～３、ＳＭ２・４～６に切られる。調査区内での検出長は0.9～15.7m程で、ＳＭ７－１・４～８・10は調査区外へと伸びる。規模は上端幅15～55㎝、下端幅５～32㎝、深さ１～21㎝を測る。小溝状遺構の間隔は心々距離で1.8～3.35m、平均では2.84m程となる。出土遺物は土師器甕、須恵器坏・甕の小片が数点出土しているが図示できるものはなかった。

ＳＭ８小溝状遺構群（第８図）

Ｅ～Ｉ～１～６グリッド付近で検出された南北方向を主とする溝跡13条をＳＭ８とした。同一方向の溝では途中分断された状態のものもある。新旧関係はＳＩ３を切り、ＳＤ１、ＳＭ２～６に切られる。調査区内での検出長は0.5～3.1m程で、ＳＭ８－１・８・10・11は壁断面の観察から調査区外へと更に伸びていく。規模は上端幅15～40㎝、下端幅５～30㎝、深さ１～16㎝を測る。断面形はＵ字形であるが、浅いものは上部が削平されているため皿状となるものが多い。調査区中央と南東部に分布し、後者では小溝状遺構の間隔は心々距離で0.95～2.1m、平均で1.5m程である。遺物は出土してない。

第５表　Ⅴ層上面検出小溝状遺構群観察表

遺構名	番号	規模（cm）				方向	グリッド	新旧関係（古→新）	出土遺物
		全長	上端幅	下端幅	深度				
SM5	1	〈1390〉	30～49	10～28	18～29	N－84°－W	B～F-1・2	SM8-1→SM6-1→SM5-1	土師器甕
	2	〈2615〉	25～45	12～30	9～29	N－84°－W	A～G-2	SI2・3→SM5-2→SM2-4・6、SM3-2	土師器甕
	3	〈2630〉	25～50	8～32	25～35	N－84°－W	A～G-2・3	SI1・3→SM6-4→SM5-3	土師器甕・壺
	4	〈2635〉	30～45	10～30	14～20	N－83°－W	A～G-3	SI1、SM8-2→SM5-4	土師器甕、須恵器蓋
	5	〈2645〉	25～55	10～30	13～23	N－83°－W	B～G-3・4	SI4、SM7-5→SM5-5	土師器甕
	6	〈1515〉	25～50	15～25	8～22	N－82°－W	B～E-3・4	SI4→SM7-6→SM5-6	土師器甕
	7	〈1845〉	20～45	10～28	10～35	N－85°－W	E～I-4	SI4→SM6-10→SM5-7→SM3-11→SD2	土師器甕
	8	〈3360〉	30～50	10～30	10～27	N－82°－W	B～I-4・5	SM6-12、SM8-6・8・12→SM5-8→SM2-9・15、SM3-10、SM4-5、SD1	土師器甕
SM6	1	〈955〉	25～40	6～28	7～11	N－89°－W	D～F-1	SM8-1→SM6-1→SM5-1→SM2-1	－
	2	〈1100〉	28～40	10～30	4～10	N－81°－W	D～G-2	SI3→SM8-1→SM6-2	－
	3	〈705〉	23～48	10～23	9～21	N－83°－W	E～G-2	SI3→SM6-3	－
	4	〈240〉	20～25	13～18	12～15	N－83°－W	F～G-2・3	SM6-4→SM5-3	－
	5	995	15～40	10～28	1～7	N－82°－W	D～F-3	SM8-2→SM6-5	土師器甕
	6	〈205〉	42～48	25～35	8～10	N－86°－W	F・G-3	－	－
	7	〈1615〉	25～50	15～25	5～12	N－84°－W	D～G-3	SM8-2→SM6-7	－
	8	(1170)	23～35	8～25	1～7	N－85°－W	C～E-3・4	SI4→SM6-8→SD2	土師器甕
	9	〈920〉	23～35	10～20	4～12	N－81°－W	E～G-4	SI4→SM6-9	－
	10	〈740〉	18～40	10～33	3～14	N－80°－W	E～H-4	SI4→SM8-3→SM6-10→SM5-7→SD1	－
	11	〈380〉	25～30	15～18	10～13	N－81°－W	H・I-4・5	SM8-10～12→SM6-11	－
	12	〈2145〉	20～42	12～25	2～11	N－81.5°－W	D～G-4・5	SI4→SM8-5・8→SM6-12→SM5-8→SM3-10、SM4-6、SD1	土師器甕
	13	〈505〉	20～40	10～30	5～8	N－88.5°－W	B・C-4	SM6-13→SM3-14	－
	14	(470)	20～23	8～18	5～11	N－86°－W	C・D-4・5	SM6-14→SM2-10、SM3-14	土師器甕
	15	〈1645〉	25～45	15～28	4～16	N－82°－W	D～G-5	SM7-7→SM6-15→SM4-2、SD1	土師器甕、縄文土器
	16	〈100〉	18～22	7～15	12～14	N－81°－W	I-5	SM8-12→SM6-16	－
	17	〈60〉	25	15～18	4	N－86°－W	I-5	SM6-17→SM2-18	－
	18	〈425〉	30～40	15～30	14～26	N－89.5°－W	H・I-5	SM6-18→SM2-18	－
SM7	1	〈310〉	23～35	15～25	2～3	N－87.5°－W	B・C-1	－	－
	2	(370)	20～35)	10～25	3～4	N－86°－W	A・B-2	SI1→SM7-2	－
	3	90	20～25	18～20	3	N－89°－W	B・C-2	－	－
	4	〈295〉	15～25	5～10	1～5	N－83.5°－W	A・B-2	SI1→SM7-4	－
	5	〈280〉	25～28	15～18	14	N－82°－W	B・C-3	SM7-5→SM5-5	－
	6	〈1455〉	25～55	18～32	9～21	N－88°－W	B～E-4	SI4→SM7-6→SM5-6→SD2	土師器甕
	7	〈1240〉	25～45	15～30	10～15	N－87°－W	B～E-5	SM7-7→SM6-15→SM2-10、SM4-1	土師器甕
	8	〈1570〉	25～35	10～25	8～11	N－87°－W	B～E-5	SM7-3→SD3	土師器、須恵器坏・甕
	9	(695)	25～38	10～20	3～11	N－90°－W	F・G-6	SM7-9→SD1・3→SK1	－
	10	〈600〉	20～30	8～12	15～17	N－82°－W	H・I-5・6	－	－
SM8	1	〈235〉	15～25	5～15	6～9	N－90°－W	E-1・2	SM8-1→SM6-1・2→SM5-1	－
	2	〈315〉	20～26	10～18	7	N－3°－E	E-3	SI3→SM8-2→SM6-5・7→SM5-4	－
	3	〈55〉	23～25	15～20	6	N－3°－E	G-4	SM8-3→SM6-10→SM2-13	－
	4	〈49〉	18～20	13～15	6	N－10°－E	G-5	SM8-4→SM2-16・17	－
	5	〈75〉	23～30	10～16	10	N－11.5°－E	G-4・5	SM8-5→SM5-8→SM3-12	－
	6	〈85〉	30～35	15～25	7～10	N－8°－E	G・H-5	SM8-6→SM6-12→SM5-8→SM2-16・17	－
	7	〈110〉	30～40	23～25	2～10	N－9°－W	H-4	SM8-7→SM6-10→SD1	－
	8	〈110〉	33～38	20～30	6～16	N－8°－E	H-5	SM8-8→SM6-12→SM5-8	－
	9	(110)	30～40	25～30	6	N－2.5°－W	H-5	－	－
	10	〈180〉	25～35	15～20	4～7	N－5°－E	H-4・5	SM8-10→SM6-11→SM2-14・15	－
	11	〈260〉	30～35	20～28	2～4	N－4°－E	H・I-4・5	SM8-11→SM6-11→SM5-7→SM2-14・15	－
	12	235	29～35	18～28	6～12	N－4°－E	I-4・5	－	－
	13	225	32～35	20～27	1～2	N－11°－E	I-5・6	SM8-13→SM4-9・10	－

５．鍛冶遺構

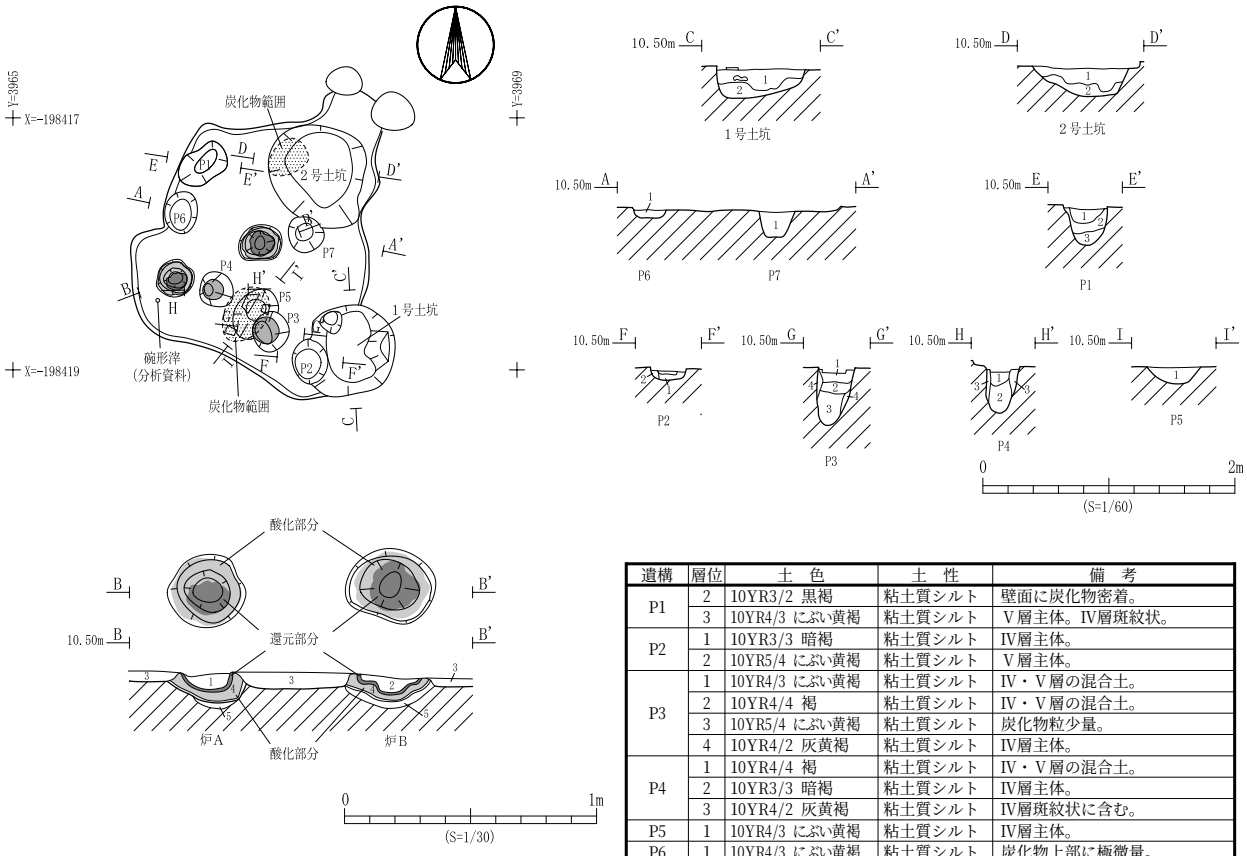
ＳＸ６鍛冶遺構（第22図、図版６）

調査区中央からやや南東寄りのＦ－５グリッドで検出された。ＳＭ４－３・７、ＳＭ６－15、ピットに切られる。西側には隣接してＳＸ５が存在する。検出した当初は一辺が約３ｍ程の方形プランに見えたことから竪穴住居を想定していたが精査を行った結果、内部に鍛冶炉を２基有する鍛冶遺構であることが判明した。平面形では炉Ｂを中心とする不整形の浅い落ち込みが確認されているが竪穴を有するものか、あるいは平地式であるかは不明である。

落ち込みの規模は最長で南北245㎝、東西190㎝程である。断面形は浅い皿形で壁は緩やかな角度で立ち上がる。検出面から底面までの深さは３～７㎝程と浅く、堆積土は単層の10YR3／4暗褐色粘土質シルトで炭化物粒を含む。底面はほぼ平坦であるが硬化面等は確認されず、炉Ｂ北側の２号土坑付近と南側のＰ５周辺の２箇所で炭化物の分布が認められた。

落ち込みの範囲内からはピット７個と土坑２基が検出されているが、断面では新旧が明らかに出来なかったため本遺構に伴うものかは不明である。ピットの平面形は楕円形を基調として規模25～43㎝、断面形はＵ字形で深さ10～45㎝を測る。Ｐ３・４では16～27㎝の柱痕跡が認められ、Ｐ１は堆積土の１～２層中にかけて炭化物がややまとまって検出されている。

１号土坑は炉Ｂの南東に位置し、平面形は楕円形を基調として規模70×65㎝、断面形はＵ字形で深さ27㎝を測る。底面の東側は段を有して３㎝程低く、また北側には小ピットが存在し、底面からは更に15㎝程下がっている。新旧



遺構	層位	土　色	土　性	備　考
1土	1	10YR2/3 黒褐	粘土質シルト	炭化物粒微量。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層斑紋状に含む。
2土	1	10YR4/6 褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。炭化物上部に微量。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
P1	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	灰色味有り。炭化物粒微量。

遺構	層位	土　色	土　性	備　考
P1	2	10YR3/2 黒褐	粘土質シルト	壁面に炭化物密着。
	3	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層斑紋状。
P2	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
	2	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅴ層主体。
P3	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。
	2	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。
	3	10YR5/4 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。
	4	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
P4	1	10YR4/4 褐	粘土質シルト	Ⅳ・Ⅴ層の混合土。
	2	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
	3	10YR4/2 灰黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層斑紋状に含む。
P5	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
P6	1	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物上部に極微量。
P7	1	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
炉	1	10YR2/3 黒褐	粘土質シルト	炭化物粒少量。
	2	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	炭化物粒・焼土粒少量。
	3	10YR3/3 暗褐	粘土質シルト	Ⅳ層主体。
	4	10YR4/3 にぶい黄褐	粘土質シルト	上面に滓付着。
	5	2.5YR3/3 暗赤褐	砂質シルト	鍛冶炉底部被熱痕跡。

第22図　ＳＸ６鍛冶遺構平面・断面図

関係ではＰ２に切られる。堆積土は自然堆積層で２層に分層され、１層からは土師器甕の胴部破片が検出された。２号土坑は炉Ｂの北東に位置し、平面形が不整楕円形のもので規模は90×77㎝、断面形はＵ字形で深さ27㎝を測る。新旧関係ではＰ７に切られる。堆積土は２層に分層される自然堆積層であり、外面にハケ目調整が施される土師器小片が出土している。

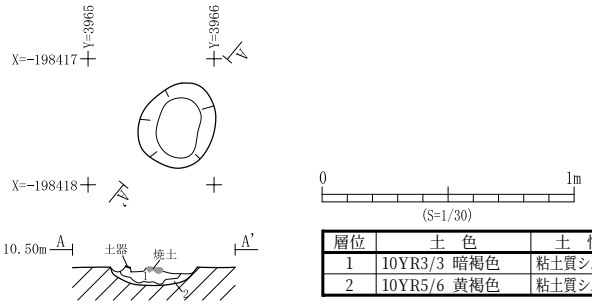
炉は掘り込み中央部とその西側で合計２基が検出された。炉の内面は２基ともに焼き締まりによる硬化が顕著で、還元焔により青灰色となっているが、外側は酸化焔による赤変が認められた。炉の形態および酸化～還元化された壁体の状況から鍛冶炉と判断した。炉Ａの平面形は円形を基調とするもので、規模は直径約18㎝、断面形はＵ字形で炉の底面までは６㎝である。炉Ｂは楕円形を基調としており規模は24×19㎝で、断面形は炉Ａに比べると立ち上がりがやや緩やかな皿状となり底面までは６㎝を測る。炉の堆積土中からは炭化物粒および焼土粒が少量検出されている。炉Ａ・Ｂの断面立ち割りによって底面の還元～酸化による漸次的な地山における土色の変化が４～６㎝まで及んでいることが観察された。遺物は土坑から出土した土師器小片のみで鞴や羽口等の鍛冶関連遺物は出土していないが、炉Ａの南西側で椀形滓が１点検出されている。

時期については土坑出土のものから判断せざるをえないが、内外面ともに摩滅が著しいため調整や技法から時期を特定することは困難であるが、おおよそ古代に比定されるものであり、本遺構もその時期のものと推測される。

６．性格不明遺構

ＳＸ５性格不明遺構（第23図）

調査区中央から南西のＦ－５グリッドで検出され、ＳＸ６鍛冶遺構の西側に位置する。平面形は楕円形で規模69×60㎝、深さ15㎝を測る。断面形は浅い皿形で壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。堆積土は自然堆積層で２層に分層され、１層上面の中央付近からは焼土塊が検出されている。ＳＸ６で検出された１・２号土坑とは検出された位置も近く、形態や規模も類似していることから両者が関連する可能性も考えられる。遺物は検出されていない。



層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR3/3 暗褐色	粘土質シルト	Ⅳ層主体。炭化粒微量。
2	10YR5/6 黄褐色	粘土質シルト	Ⅴ層主体。Ⅳ層ブロック斑紋状に含む。

第23図　ＳＸ５性格不明遺構平面・断面図

７．ピット（第８図）

Ⅴ層では調査区の全域から約900個のピットが検出されている。Ⅲ～Ⅳ層が削平された部分では本来Ⅴ層上面を確認面としないピットが含まれることも考慮されるが、堆積土や検出された遺物等から分離することは出来なかった。ピットは調査区全体で見ると、中央のＥ－１～６グリッドとＢ～Ｉ－５・６グリッドに分布の集中が認められる。ＳＤ４溝跡周辺では北側５ｍ付近での密集する状況が窺えるが、配列が認められず深さが一定しない等規則性は認められなかった。また、ＳＤ４との新旧関係は堆積土の掘り下げ時に精査を繰り返し行うなど細心の注意を払ったが、堆積土が酷似しているため明らかに出来なかった。遺物は弥生土器、土師器小片、鉄滓が出土しているが図示できるものはなかった。

８．その他の出土遺物（第24図・図版12）

ＳＤ、ＳＭ及びグリッドから検出された遺物を第24図に示した。いずれも各遺構の時期を示す資料ではないものと考えるが、今回検出されなかった時期の遺構の存在も考慮して主だった遺物を掲載した。ここでは種別毎に説明する。尚、出土遺構及び層位については遺物観察表を参照されたい。

１は縄文土器・鉢の口縁部破片である。沈線で対向する弧線文を描き、口縁部直下には横位の縄文ＬＲが施文される。また沈線間には弧線文が浅い沈線で描かれる。縄文時代後期後葉金剛寺式と考えられる。

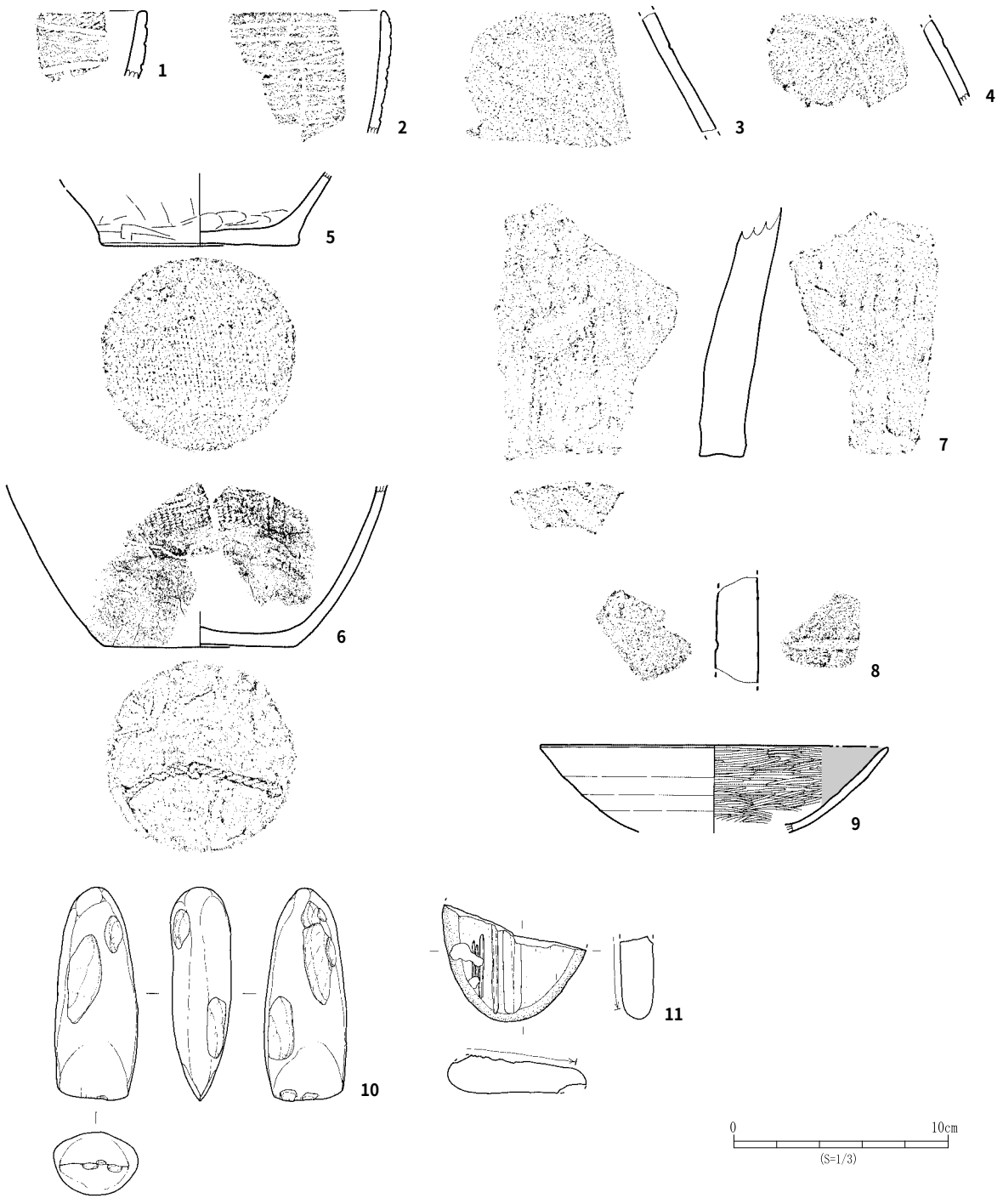
２～６は弥生土器である。２は鉢形土器の口縁部破片で平行沈線で幾何学文が描かれる。３・４は同一個体の壺形土器の胴部破片で、沈線により区画された磨消部分が陰刻風となり縄文帯はやや立体的となっている。５・６は底部破片で、５は布目痕跡が残る。６は胴下部に羽状縄文が施文され、底部には結節縄文の原体圧痕が認められる。

７は埴輪の基底部破片である。摩滅が激しいが外面は縦位のハケ目調整、内面は縦位のナデが施される。また、底面では棒状圧痕が見られる。

８は平瓦片である。凹面には布目痕と端縁に平行するタガ状の痕跡が認められることから桶巻き作りによる製作技法が推測される。

９はロクロ整形による土師器坏で底部を欠損している。内面には黒色処理およびミガキが施される。

10は完形の磨製石斧、11はおよそ半分を欠損する有溝砥石である。



№	登録番号	種別・器種	出土遺構・層位	大きさ(cm)	残　存	特徴等	備　考	写真番号
1	Ａ－１	縄文土器・鉢	SM7-7	現存高＜3.2＞	口縁部片	沈線文、磨消縄文	－	12-5
2	Ｂ－１	弥生土器・鉢	D-7Gr.・Ⅴ層	現存高＜5.8＞	口縁部片	沈線による変形工字文	－	12-6
3	Ｂ－２	弥生土器・壺	D-2Gr.・Ⅴ層	現存高＜5.4＞	胴部上半片	磨消縄文	摩滅顕著	12-7
4	Ｂ－３	弥生土器・壺	D-2Gr.・Ⅴ層	現存高＜3.9＞	胴部上半片	磨消縄文	－	12-8
5	Ｂ－４	弥生土器・壺	SM2-14	現存高＜3.4＞×底径9.1	底部遺存	外面：ヘラナデ　　底面：布目圧痕	－	12-9
6	Ｂ－５	弥生土器・壺	C-4Gr.・Ⅴ層	現存高＜7.6＞×底径9.0	底部遺存	外面：羽状縄文、ヘラナデ、ヘラミガキ 底面：結節縄文原体圧痕	－	12-10
7	Ｓ－１	埴輪	SD4・上層	現存高＜11.7＞	基底部小片	外面：縦位ハケ目　　内面：縦位ナデ	摩滅顕著	12-11
8	Ｇ－１	平瓦	SM4-5	厚さ1.9～2.0	小片	凹面：布目痕 凸面：ナデ、端縁に平行する凹状痕跡	－	12-12
9	Ｄ－１	土師器・坏	SD4・上層	口径16.2×現存高＜4.0＞	口縁部～体部1/3	外面：ロクロ　　内面：細かい横位ヘラミガキ	内面黒色処理	12-13

№	登録番号	種別	出土遺構・層位	石質	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	備考	写真番号
10	Kb-1	磨製石斧	H-5Gr.・Ⅴ層	ホルンフェルス	9.9	3.8	2.8	141	－	12-14
11	Kc-3	礫石器・砥石	SD4・上層	流紋岩	4.1	6.5	1.7	38	－	12-15

第24図　その他の出土遺物

第Ⅵ章　自然科学分析

１．はじめに

大野田古墳群は、地下鉄富沢駅の東側に位置し、標高10～12mの後背湿地及び自然堤防上に立地する。大野田古墳群第14次調査では、竪穴住居跡、土坑、溝跡、鍛冶関連遺構などの遺構や、土師器、須恵器、鉄滓などの遺物が検出されている。今回は、竪穴住居跡の堆積土及び鍛冶関連遺構に関する調査を実施する。

ＳＩ２は、古墳時代前期の竪穴住居跡である。住居内堆積土の中層が上下の腐植層より明るい黄褐色系土層が確認された。この層の堆積要因を植物珪酸体分析により追求する。

ＳＩ３は、古墳時代前期の竪穴住居跡である。住居構築材の一部とみられる炭化材が検出されていることから、樹種同定により種類を明らかにする。

ＳＩ４は、古墳時代前期の竪穴住居跡である。ＳＩ２と堆積土層序が類似する事から同時期に同環境下で埋没したと考えられる。ＳＩ２と同様植物珪酸体分析により堆積環境と周辺植生情報、住居構築材，生産遺構由来の痕跡などを検討する。

ＳＸ６は、古代の鍛冶関連遺構である。ここから出土した椀形の鉄滓について、切断面組織観察を行う。

２．住居に関する調査

（１）試料（第15・25図）

植物珪酸体分析用試料は、ＳＩ２の７点（試料番号１・５・８・10・11・12・13）、ＳＩ４の４点（試料番号１・５・８・11）である（第25図）。このうち、ＳＩ２の試料番号１・５・８・10およびＳＩ４の試料番号１・５・８は堆積土から採取された層厚５㎝の層位試料を選択した。ＳＩ２の試料番号10は床面直上、試料番号８が下層、試料番号５が中層、試料番号１が堆積土最上層である。また、ＳＩ２の試料番号11は床面直上炭化物層のベルト東側、試料番号12は床面直上炭化物層のベルト西側、試料番号13は床下（地山）である。ＳＩ４の試料番号８は床面直上、試料番号５は中層、試料番号１は堆積土最上層、試料番号11は床下（地山）である。一方、住居内の炉跡試料はＳＩ４の炉跡より採取された土壌試料１点（試料番号12）である。

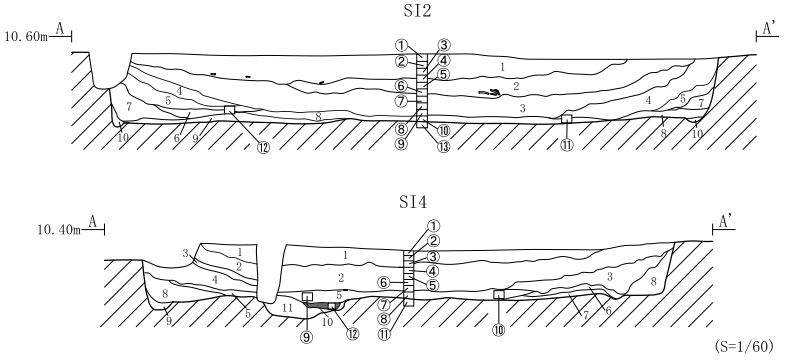
樹種同定用試料は、ＳＩ３の炉跡付近から検出された炭化材２点（炭化物サンプル１・２）である（第15図）。

（２）分析方法

植物珪酸体分析

湿重５ｇ前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを



第25図　試料採取位置図

含む珪化組織片を近藤（近藤 2004）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や燃料材について検討するために、植物珪酸体群集を図化した。その際、出現率は短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

なお、炉跡試料については珪化組織片の産状に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壌中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社 1993）。そのため、珪化組織片の産状により当時の構築材や燃料材などの種類が明らかになると考えられる。

樹種同定

試料は、土塊に炭化材が付着した状態であることから、土塊から炭化材を採取し、自然乾燥させる。木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。なお、木材組織の名称や特徴については、島地・伊東（1982）や Wheeler 他（1998）を参考にする。また、日本産木材の組織配列については、林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

（３）分析結果（第26図、第６・７表、図版13）

植物珪酸体分析

結果を第６表、第26図に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。以下に、各遺構での産状を述べる。

ＳＩ２

堆積土の試料番号10～１にかけては同様な産状が見られ、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。なお下層の試料番号８や床面直上の試料番号10では、ヨシ属の出現率がわずかに高い。床面直上土層のうち、ベルト東側の試料番号11はタケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。ベルト西側の試料番号12では、堆積土試料と同様な産状が見られる。床下（地山）の試料番号13では、タケ亜科などがわずかに認められる。

ＳＩ４

堆積土の試料番号８～１にかけては、ＳＩ２試料と同様に、ネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属、ススキ属を含むウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが認められる。なお下層の試料番号８や床面直上の試料番号10では、ヨシ属の出現率がわずかに高い。

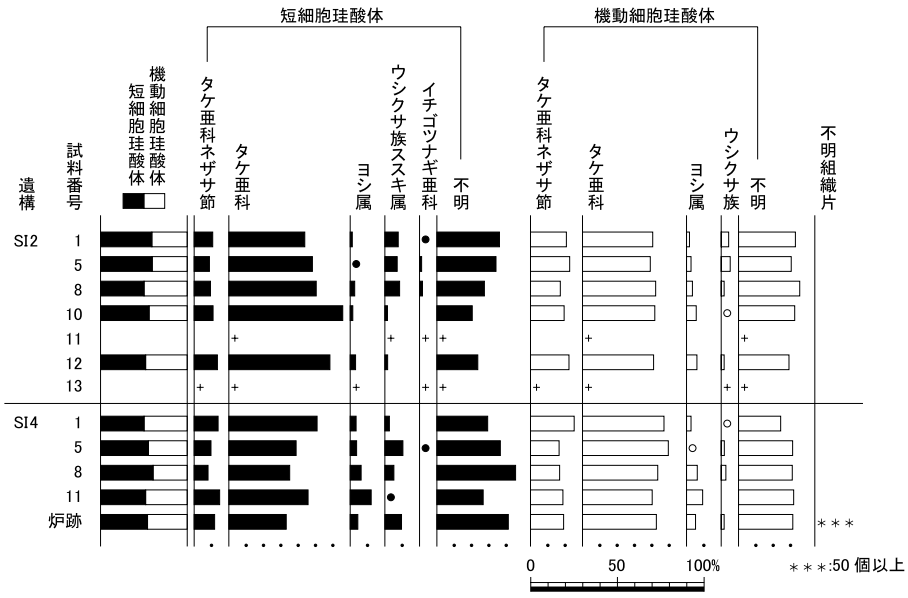
第６表　植物珪酸体分析結果

種類 ＼ 試料番号	ＳＩ２							ＳＩ４				
	1	5	8	10	11	12	13	1	5	8	11	炉跡
イネ科葉部短細胞珪酸体												
タケ亜科ネザサ節	18	15	11	15	－	17	3	16	13	14	17	16
タケ亜科	74	82	59	90	11	74	11	59	52	61	53	45
ヨシ属	2	1	3	2	－	4	1	4	5	11	14	6
ウシクサ族ススキ属	13	12	10	2	2	2	－	3	14	9	1	13
イチゴツナギ亜科	1	2	2	－	1	－	1	－	1	－	－	－
不明キビ型	43	39	25	13	3	10	2	22	36	42	12	36
不明ヒゲシバ型	5	9	2	4	2	8	1	3	5	20	8	9
不明ダンチク型	13	10	5	11	5	12	2	9	8	17	11	11
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
タケ亜科ネザサ節	24	26	20	21	－	26	4	29	18	19	20	22
タケ亜科	47	45	49	45	3	48	14	54	54	49	43	49
ヨシ属	2	3	4	6	－	7	－	3	1	7	10	6
ウシクサ族	5	6	2	1	－	2	2	1	2	3	－	2
不明	38	35	41	35	1	34	9	28	34	35	34	36
合　計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	169	170	117	137	24	127	21	116	134	174	116	136
イネ科葉身機動細胞珪酸体	116	115	116	108	4	117	29	115	109	113	107	115
総　計	285	285	233	245	28	244	50	231	243	287	223	251
珪化組織片												
不明組織片	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	54

床下（地山）の試料番号13では、タケ亜科などがわずかに認められる。

ＳＩ４の炉跡

珪化組織片が数多く認められるものの、特徴的な形態の植物珪酸体が含まれないため、種類の特定には至らない。一方、単体の植物珪酸体は、住居内堆積土の試料と同様にネザサ節を含むタケ亜科の産出が目立つ産状が見られる。



出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●は１％未満、＋は100個未満の試料で検出された分類群を示す。また、珪化組織片の産状を＊で示す。

第26図　植物珪酸体組成

樹種同定

樹種同定結果を第７表に示す。炭化材は、いずれも落葉広葉樹のケヤキに同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

ケヤキ（Zelkova serrata (Thunb.) Makino） ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圏部は１～２列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、塊状に複合して接線・斜方向に紋様状あるいは帯状に配列し、年輪界に向かって径を漸減させる。

道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、１～８細胞幅、１～50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

第７表　樹種同定結果

遺構	時期	試料名	樹種
ＳＩ３	古墳時代前期	焼面炭化物サンプル１	ケヤキ
		焼面炭化物サンプル２	ケヤキ

（４）考察

竪穴住居内堆積土の堆積環境と周辺環境

古墳時代前期とされる竪穴住居跡２軒の堆積土では、いずれも同様な植物珪酸体の産状が見られた。これらは、遺構が廃絶後、土とともに混入したもので、周辺植生を反映していると思われる。また、遺構の地山や埋積物は、地形的に見て河川堆積物を母材としており、母材に含まれていた植物珪酸体にも由来する可能性があり、最も多産するネザサ節を含むタケ亜科である。ネザサ属は、随伴するススキ属とともに、開けて乾いた場所に生育する種類が多い。このため、人里など開発が進んだ場所に好んで生育することから、当時の住居周辺に生育してた可能性がある。ただし、タケ亜科の植物珪酸体は他のイネ科と比較して風化に強く、また生産量が多いことが指摘されており（近藤 1982，杉山・藤原 1986）、他の種類よりも残留しやすい。このため、分析結果から単純に解釈すると遺跡周辺でタケ亜科が優勢であったように見えるが、実際にはそれほど多くなかったとみられる。一方、堆積土の床面直上や下位層を中心に、湿潤な場所に生育するヨシ属も検出される。量が少ないことから、母材である河川堆積物に由来する可能性がある。しかし、遺跡の立地から、周辺に水湿地が存在した可能性があり、そこからもたらされたとも解釈できる。なお、本調査区北方の沖積地（郡山低地）には富沢遺跡が立地する。この第138次調査区の植物珪酸体分析結果では古墳時代の頃にイネ属、タケ・ササ類、ヨシ属、ススキ属などの生育が示唆されている（株

式会社古環境研究所 2007)。今回の結果は、イネ属を除けば組成が類似する。イネ属は、藁や籾が生活資材として使われることも多いため、周辺で稲作が行われていたとされる住居跡の堆積土では、検出されることが多い。今回、イネ属が検出されないのは、埋積過程等に起因する可能性もあるが、詳細は不明である。

住居内堆積土の中層で、上下の腐植層より明るい黄褐色系の土層が確認された。分析課題の一つとして、この成因が挙げられていたが、植物珪酸体の産状に差は見られなかった。色調が異なる要因としては、鉱物や土壌中の無機成分などの違いや、地下水位の影響による無機成分の溶脱や濃集などが考えられることから、別な視点からの調査も必要である。

また、いずれの住居跡でも床面直上と堆積土中で植物珪酸体組成に違いがみられず、かつ珪化組織片も認められなかったことから、燃料材や住居構築材に関する情報も得られなかった。

住居構築材の検討

古墳時代前期の竪穴住居跡（ＳＩ３）の炉跡付近で検出された炭化材は、住居構築材の一部と考えられている。炭化材はいずれも落葉広葉樹のケヤキに同定された。住居全体で利用される構築材の数量に比較すれば、同定点数ははるかに少ないが、今回の結果から少なくともケヤキの木材が住居構築材に利用されていたことが推定される。ケヤキは、適湿で肥沃な土地に生育する落葉高木であり、木材は重硬で強度・耐朽性が高いとされる（平井 1996)。このことから、住居構築材として、強度・耐朽性の高い木材が選択されていたことが推定される。

仙台市内では、中在家南遺跡、高田Ｂ遺跡、富沢遺跡126次等で古墳時代前期の建築部材合計10点について樹種同定が実施されており、ハンノキ節２例、オニグルミ２例、カツラ１例、クヌギ節２例、コナラ節１例、ケヤキ２例が確認されている（鈴木ほか 1996，鈴木・能城 2000，2002，吉川 2004)。これらは建物の所属や部位の詳細が不明の建築部材であり、竪穴住居跡から出土した建築部材は含まれていない。樹種をみると、全て落葉広葉樹であり、針葉樹が認められないことから、広葉樹材を中心とした木材利用が推定される。これまでの調査でケヤキも認められていることから、竪穴住居跡でも同様に広葉樹を中心とした木材利用が行われていた可能性がある。竪穴住居跡の木材利用については、樹種に関する資料をさらに蓄積していく必要がある。

燃料材の検討

ＳＩ４の炉跡では珪化組織片が数多く認められるものの、特徴的な形態の植物珪酸体が含まれないため、種類の特定には至らない。そのため、植物が燃やされたことは確かだが、種類の特定には至らない。

２．鍛冶関連遺構に関する調査

（１）試料（第22図）

ＳＸ６から検出された椀形の鉄滓１点である。

（２）分析方法

試料を切断し、切断面の組織をマクロ的・ミクロ的（電子顕微鏡による）観察を行う。分析は日鐵テクノリサーチの協力を得た。

（３）分析結果・考察（図版14）

椀形の鉄滓は、黒色から褐色を呈し、大きさは70×35×32㎜、重量は144ｇを計る。上面の黒色部には、一部光沢があり緻密である。また、褐色部には鉄錆塊が点在する。炉材の一部とみられる灰色で丸みを帯びた底部の割目には、褐色で丸みを帯びた鉄錆が存在し、割目を伝わって鉄を含む溶融物が染み出たものと考えられる。鉄滓の主要組成は、白色で微細結晶のウスタイト（FeO)、灰色で長柱状のファヤライト（２FeO・SiO2）とマトリックスは

非晶質珪酸塩からなる。鉄滓と炉材の界面には、僅かであるがスピネル化合物が点在する。炉材中に丸い空孔とともに小さな湯玉、あるいは割目に沿って鉄錆が存在することから、炉材界面では溶融あるいは半溶融の鉄が接触し、活発な反応があったことが想定される。

以上、外観ならびに断面組織の特徴から、本鉄滓は炉底滓とみられるが、構成鉱物や結晶粒子の大きさから精錬時の産物と推測される。

引用文献

林　昭三　1991 『日本産木材 顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所.

平井信二　1996 『木の大百科 解説編』朝倉書店，642p.

伊東隆夫　1995 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ』木材研究・資料，31，京都大学木質科学研究所，81－181.

伊東隆夫　1996 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ』木材研究・資料，32，京都大学木質科学研究所，66－176.

伊東隆夫　1997 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ』木材研究・資料，33，京都大学木質科学研究所，83－201.

伊東隆夫　1998 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ』木材研究・資料，34，京都大学木質科学研究所，30－166.

伊東隆夫　1999 『日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ』木材研究・資料，35，京都大学木質科学研究所，47－216.

株式会社古環境研究所　2007 「富沢遺跡第138次調査区におけるプラント・オパール分析」『富沢遺跡第138次発掘調査報告書』仙台市教育委員会，16－18.

近藤錬三　1982 「Plant opal 分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究」『昭和56年度科学研究費（一般研究Ｃ）研究成果報告書』32p.

近藤錬三　2004 「植物ケイ酸体研究」『ペドロジスト』48，46－64.

パリノ・サーヴェイ株式会社　1993 「自然科学分析からみた人々の生活（１）」『慶應義塾藤沢校地埋蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論』慶應義塾，347－370.

島地　謙・伊東隆夫　1982 『図説木材組織』地球社，176p.

鈴木三男・能城修一　2000 「仙台市高田Ｂ遺跡出土木材の樹種と木材利用」『高田Ｂ遺跡 第２分冊 分析・考察編』仙台市文化財調査報告書第242集，仙台市教育委員会，１－42.

鈴木三男・能城修一　2002 「仙台市中在家南遺跡・押口遺跡出土木製品の樹種」『中在家南遺跡（第３・４次） 押口遺跡（第３次）発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第255集，仙台市教育委員会，110－126.

鈴木三男・能城修一・松葉礼子　1996 「仙台市中在家遺跡群出土木材の樹種」『中在家南遺跡他　仙台市荒井土地区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書　第２分冊 分析・考察編』仙台市文化財調査報告書第213集，仙台市教育委員会，339－413.

杉山真二・藤原宏志　1986 「機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－」『考古学と自然科学』19，69－84.

Wheeler E.A.，Bass P．and Gasson P.E.（編）1998『広葉樹材の識別 IAWA による光学顕微鏡的特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯　浩（日本語版監修），海青社，122p.［Wheeler E.A.，Bass P．and Gasson P.E.（1989）*IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*］.

吉川純子　2004 「富沢遺跡第126次調査で産出した木材化石」『富沢遺跡 第126次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第273集，仙台市教育委員会，64－71.

第Ⅶ章　ま　と　め

今回の第14次調査区は大野田古墳群の北側中央部分に位置している。Ⅲ～Ⅴ層上面で検出された遺構は竪穴住居跡４軒、土坑４基、溝跡４条、小溝状遺構群８群102条、鍛冶遺構１基、性格不明遺構４基、ピット約930個であり、遺構の時期は古墳時代前期から古代及び近世以降である。ここでは周辺の調査成果を踏まえ、今次調査の主な遺構であった古墳時代前期の竪穴住居跡、古代の官衙区画溝、小溝状遺構群、鍛冶遺構を中心に見ていきたい。

古墳時代前期の竪穴住居跡について

まずはじめに、古墳時代では新たな古墳の発見はなく、第８次調査区を含めた調査区周辺が古墳群の分布域からは外れることが明かとなった。しかし、今回の調査では古墳時代前期（塩釜式期）の竪穴住居跡が４軒検出され、第８次調査においても住居跡が１軒報告されている（仙台市教育委員会 2005a）ことから、周辺には同時期の集落が展開していることが推測される。特に住居構造や遺物の出土状況等に類似点が認められることから、これらの特徴について見ていきたい。

住居の平面形は隅丸方形を基調として、４本柱の主柱穴構造を持つものを主体とする。炉は床面中央から一方の壁側に寄った位置で確認され、焼土や床面の赤化した状態を認めることができるが、焼け締まりによる硬化は顕著ではない。住居床面のコーナー部分には貯蔵穴状ピットが構築され、ＳＩ２・４では壁寄りで梯子穴の可能性が指摘されている「壁際ピット」（宮城県教育委員会 1992）が検出されている。炉の中央を通り住居を二分割する中軸線でみると、ＳＩ３・４が同じ住居構造を持ち、ＳＩ２はＳＩ４と貯蔵穴状ピット等の位置が左右の線対称となる。周溝は壁直下またはやや内側を巡り、ＳＩ２・３では壁面から直角に交わる間仕切り状の溝が確認されている。以上の様に、それぞれの類似点からは住居構造に対する強い規格性が看取される。

遺物では貯蔵穴状ピット周辺の床面からまとまって土師器が検出されており、甕は口縁部を欠くものを含むが、その他の器種では完形率の高い一括性のある資料といえよう。特にＳＩ３・４では重ねられた出土状態のものも認められ廃棄の状況が看取される。土器の器種構成についてみると坏、高坏、小形鉢、壺、甕が見られるが、器台は破片を含め１点も検出されていない点が注意される。

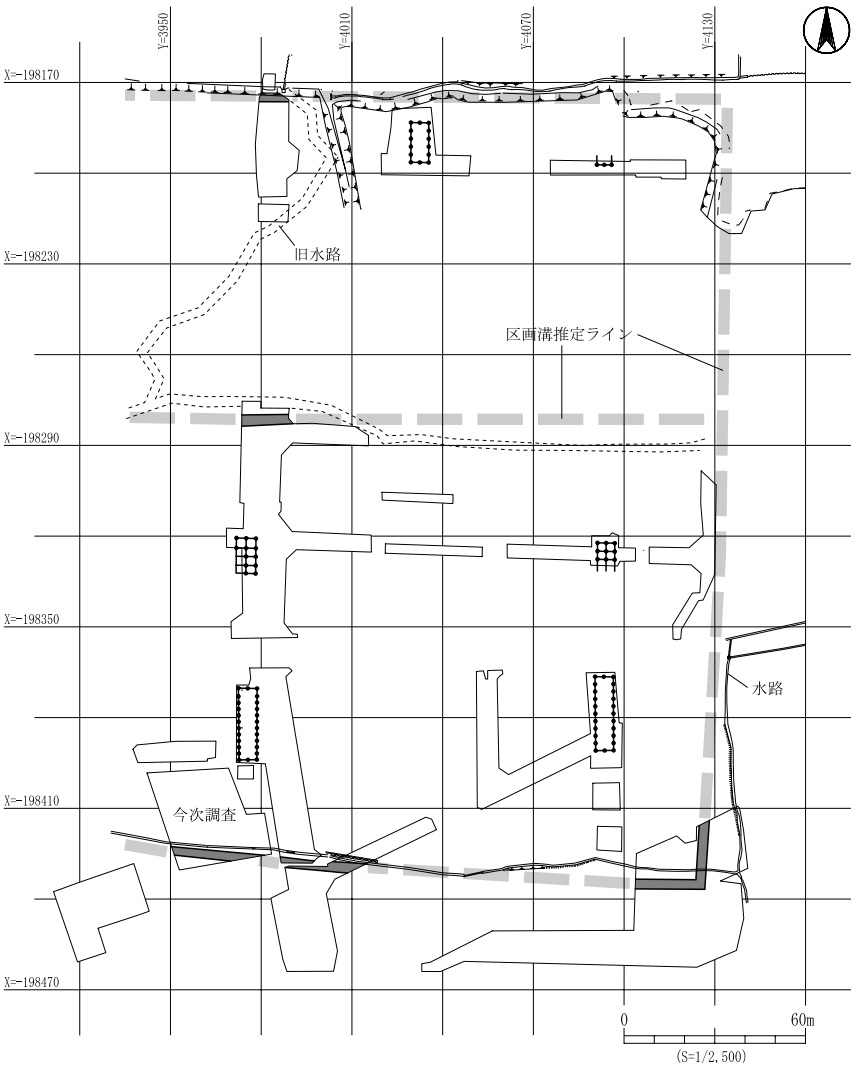
堆積土ではＳＩ１・３とＳＩ２・４のそれぞれに共通性が見られた。検出面から床面までの深さは前者が20～35㎝程であり、後者は40～66㎝と深く、堆積土の遺存はともに良好である。ＳＩ１・３は腐植化が進行した炭化物粒を含む層が下層付近でレンズ状の堆積が見られることを特徴とし、一方のＳＩ２・４では中層の黄褐色系土層を挟んだ上下に暗褐色土層の堆積が認められる。特にＳＩ２・４では地山であるⅤ層（にぶい黄褐色）類似の土層が中～下層付近で層厚約20㎝程の堆積が認められている。このような状況から風化の影響をあまり受けていない短期間の堆積が想定され、さらにその形成要因には住居を覆った土屋根等の可能性が考慮される。尚、第８次調査で検出されたＳＩ１竪穴住居跡（仙台市教育委員会 2005a）は一辺が約4.5m、壁高22㎝の規模を有しており、同報告書を検討すると堆積状況はＳＩ１・３に類似するものと考えられる。尚、ＳＩ２では東から投棄されたような出土状況の土器群が黄褐色土層の上で検出されており、その中に脚部中空の高坏が含まれることから南小泉式期段階までは窪地であったことが推測される。

注意すべき遺物としてはＳＩ２の床面から検出された底部丸底の甕があり、類例は名取市野田山遺跡に見られる（名取市教育委員会 2002）。同報告書では遺物の考察の中で甕の分類が行われ、甕Ⅱａ類としている第１号住出土の甕の特徴に畿内の製作技法の影響が考えられることから、畿内方面との何らかの交流があったことの指摘がなされている（名取市教育委員会 2002）。本調査例は甕Ⅱｂ類とされた「丸底に近い平底のもの」に器形や口縁の特徴が類似しているが、丸底で外面がヘラナデ状のハケ目調整が施される点では甕Ⅱａ類の特徴を備えており、在地におけ

る一つの変容した在り方とも捉えられる。野田山遺跡は本遺跡から名取川を挟んで南南西に約5.5㎞離れた標高約34mの野田山丘陵先端部に位置し、これまで行われた2度の調査から古墳時代前期の塩釜式期の竪穴住居跡が20軒以上検出されている（宮城県教育委員会 1992、名取市教育委員会 2002）。野田山遺跡では大野田古墳群第14次調査で検出された住居と同じ構造をもつものが多く認められ、またⅡa類に類似した甕を共有していること等から、大野田古墳群及び野田山遺跡を含む地域的なまとまりが存在していたことが示唆されよう。

（仮称）大野田官衙遺跡について

大野田古墳群、六反田遺跡、袋前遺跡にまたがって展開する官衙関連遺構は、第5次調査を中心としたこれまでの成果から徐々に区画の規模や内部構造が明らかになりつつあり、これまでに掘立柱建物跡6棟とそれらを区画すると推測される溝跡が検出されている。（仙台市教育委員会 2004・2006・2008a・d・2009）。創建年代等は明らかでないが大型建物跡の柱抜き取り穴から出土した遺物から8世紀前半頃に廃絶していると推定されており、また郡山遺跡とは直線距離で約1.5㎞の近い位置関係にあることや、建物の配置等からも郡山遺跡Ⅱ期官衙との密接な関係が指摘されている（仙台市教育委員会 2009）。区画溝については部分的な調査のため不明な点が多いが北辺及び南東隅の溝が確認されて以降、真北方向を基準とした方形区画が想定されており（仙台市教育委員会 2009aほか）、区画内部の大きさは南北約245～259mの歪みをもち、東西は180m以上と考えられている（仙台市教育委員会 2009）。また、本調査区の北方140m程の地点（六反田5Ｃ区）で新たに東西方向に伸びる溝が確認され、方向性や位置関係から区画内部を更に分割する溝である可能性も指摘されている（仙台市教育委員会 2009）。



第27図（仮称）大野田官衙遺跡全体図

今次調査区は南辺を区画する溝の調査では西端に位置し、最長31mが検出され、北に折れることなく更に西側へ延びて行くことが明かとなった。溝の規模は幅2.5～3.3m、深さ1mを測り、これまでに調査されてきた溝（仙台市教育委員会 2008dほか）とほぼ同じ規模を有し、掘り直しがあったことも断面で確認された。

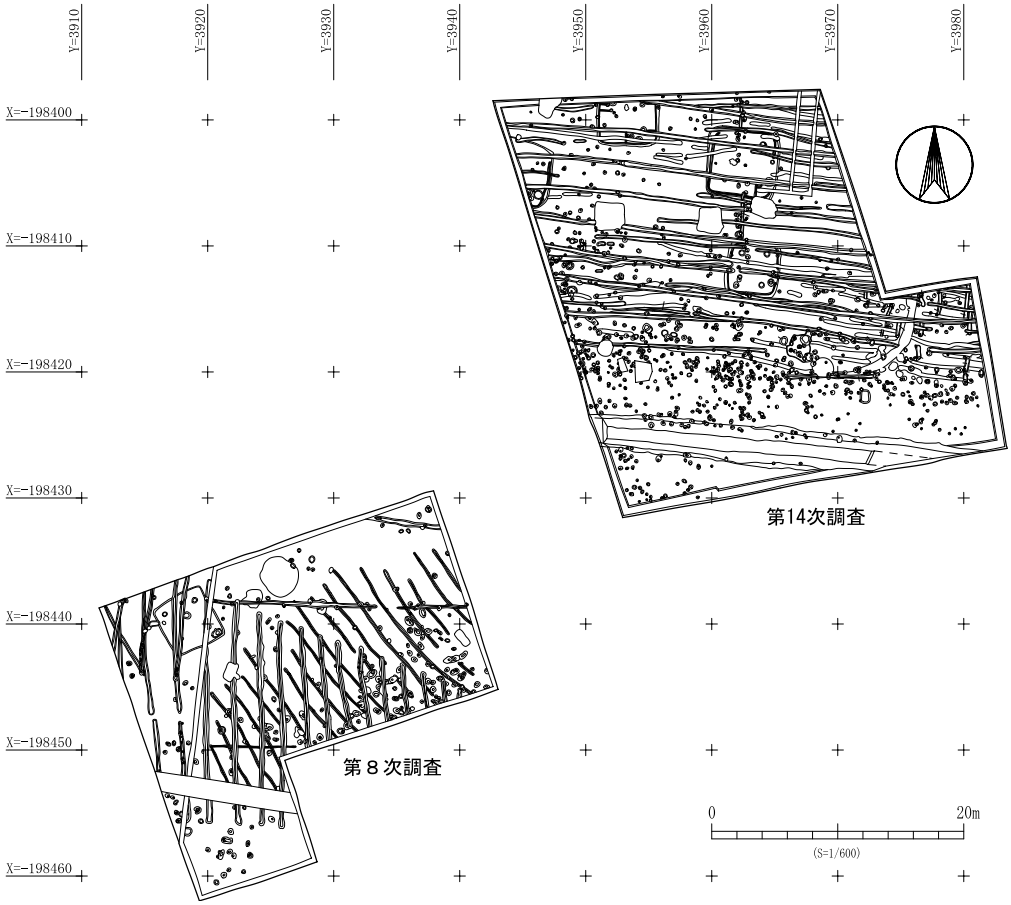
第27図は（仮称）大野田官衙遺跡全体図（仙台市教育委員会　2009）をもとに溝の推定ライン及び当地区周辺に存

在する水路及び旧公図に示された旧水路を合成したものである。本調査区及び東側の調査区で検出された溝のラインを直線で結ぶと、南東コーナーで検出されている南北溝とはほぼ直角に交わり、方形区画の東辺が現在の推定ラインよりも若干東へ振れる可能性も考えられよう。また、今回の調査を開始するにあたって水路の切り回しが必要であったが、区画溝の推定される部分を見ると、水路や現道路、地割りが概ね近い位置関係にあることが看取され、部分的ではあるかもしれないが、古代からの区画性を反映している可能性も指摘されよう。

小溝状遺構群について

小溝状遺構群はⅢ～Ⅴ層の各層で検出され、整理時に溝の堆積土や方向性または間隔等から分析を行い群の抽出を行った。調査範囲が限定される場合には対応関係が把握できないものもあるが、Ⅴ層上面のＳＭ５はその他の同一方向の溝とは堆積土や深さなどの点で遺存状況が良好であり明瞭に判別されることから、これを一つのモデルにして分析を試みて３群に分けることが出来た。今回、その他の小溝状遺構群が全長10m未満を主体とするのに対し、ＳＭ５は８条全ての溝が調査区外へと伸びる大規模なもので、最長33mを超すものも存在している。調査区全体では中央から北側にかけて平均約2.5mの間隔で区画溝ＳＤ４とほぼ平行する整然とした配置が看守された。

Ⅴ層における今次調査と第８次調査の小溝状遺構群を比較すると（第28図）、今次調査では東西方向を主体としているのに対し、第８次調査では南北または南東－北西のものが多数をめ、ＳＤ４区画溝を境にして方向性に相違が認められることから溝が何らかの境界として認識されていたものと考えられる。また溝の北側で帯状に群集するピットの存在や区画溝の南北部分において小溝状遺構群が検出されない空間地帯があることにも注意が必要であろう。



第28図　第８次・14次調査（Ⅴ層）全体図（仙台市文化財調査報告書第290集を転載し合成）

鍛冶遺構について

調査区中央からやや南東で検出されたＳＸ６鍛冶遺構からは鍛冶炉２基が検出された。出土遺物の他に鍛冶関連遺物も少なく、上屋構造等の不明な点が多いが、鉄滓の分析を行った結果は精錬時の産物との推測がなされた。出土した土師器片からは時期の特定が出来ないながらも、およそ古代に位置づけられるものと考えられる。このような遺構については、大野田地区における古代集落の様相を復元する一つの事象として把握しておかなければならないものと言えるだろう。

引用・参考文献

氏家和典　1957 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史　第14輯』東北史学会
仙台市教育委員会　1981 『仙台市文化財調査報告書第34集　六反田遺跡発掘調査報告書』
仙台市教育委員会　1987 『仙台市文化財調査報告書第193集　大野田古墳群　春日社古墳・鳥居塚古墳』
宮城県教育委員会　1992 『宮城県文化財調査報告書第145集　野田山遺跡』
仙台市教育委員会　1993 『仙台市文化財調査報告書第173集　下ノ内遺跡－第４次発掘調査報告書－』
辻　秀人　1994 「東北南部の古墳出現期の様相」『東日本の古墳の出現』山川出版
仙台市史編さん委員会編　1995 『仙台市史　特別編２　考古資料』仙台市
仙台市史編さん委員会編　1999 『仙台市史　通史編１　原始』仙台市
仙台市史編さん委員会編　2000 『仙台市史　通史編２　古代中世』仙台市
仙台市教育委員会　2000a 『仙台市文化財調査報告書第243集　大野田古墳群・王ノ壇遺跡・六反田遺跡－仙台市富沢駅周辺区画整理事業関係遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』
仙台市教育委員会　2000b 『仙台市文化財調査報告書第249集　王ノ壇遺跡－都市計画道路「川内・柳生線」関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ－』
名取市教育委員会　2002 『名取市文化財調査報告書第47集　野田山遺跡』
仙台市教育委員会　2004 「仙台市大野田古墳群」『平成16年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会
仙台市教育委員会　2005a 『仙台市文化財調査報告書第290集　大野田古墳群－第８次発掘調査報告書－』
仙台市教育委員会　2005b 『仙台市文化財調査報告書第291集　大野田古墳群－第９次発掘調査報告書－』
仙台市教育委員会　2006 「仙台市富沢駅周辺遺跡群」『平成18年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会
仙台市教育委員会　2008a 「大野田古墳群他－官衙関連遺構－」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』古代城柵官衙検討会
仙台市教育委員会　2008b 『仙台市文化財調査報告書第319集　大野田古墳群－第13次発掘調査報告書－』
仙台市教育委員会　2008c 「仙台市　春日社古墳」『平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会
仙台市教育委員会　2008d 「六反田遺跡・大野田古墳群」『平成20年度宮城県遺跡調査成果発表会発表要旨』宮城県考古学会
仙台市教育委員会　2009 「(仮称)大野田官衙遺跡」『第35回古代城柵官衙遺跡検討会－資料集－』古代城柵官衙検討会

写　真　図　版

1．調査区全景（南から）

2．完掘全景（東から）

写真図版１　調査区全景

1．ＳＩ１全景（北から）

2．ＳＩ２全景（南東から）

写真図版２　竪穴住居跡（１）

1．ＳＩ３全景（東から）

2．ＳＩ４全景（東から）

写真図版３　竪穴住居跡（２）

1．ＳＩ１ピット１断面（南から）

2．ＳＩ２断面（南東から）

3．ＳＩ２－２層遺物出土状況（西から）

4．ＳＩ２床面遺物出土状況（南から）

5．ＳＩ３床面遺物出土状況（南東から）

6．ＳＩ３ピット７断面（西から）

7．ＳＩ４断面（北西から）

8．ＳＩ４床面遺物出土状況（西から）

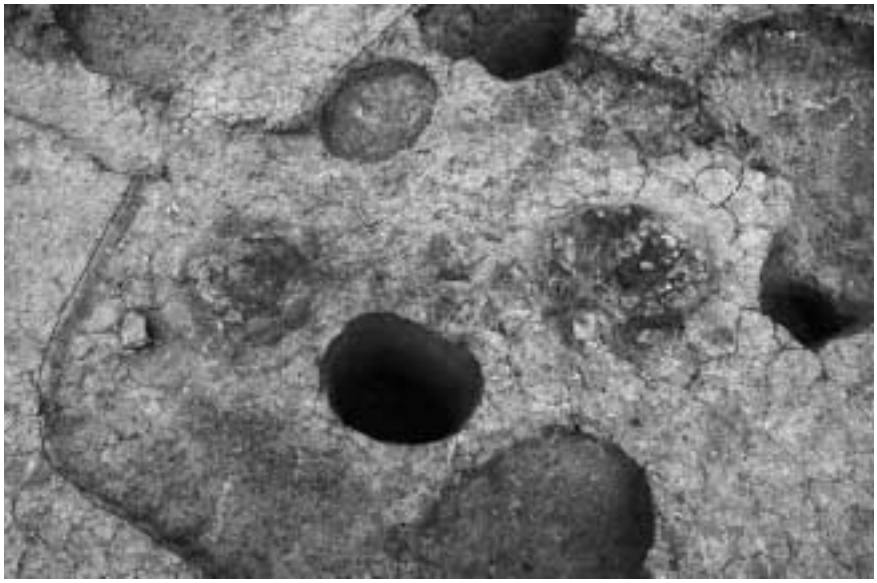
写真図版４　竪穴住居跡（３）

1．ＳＤ４全景（西から）

2．ＳＤ４断面Ａ－Ａ’（東から）

3．ＳＤ４断面Ｂ－Ｂ’（東から）

写真図版５　溝跡（１）

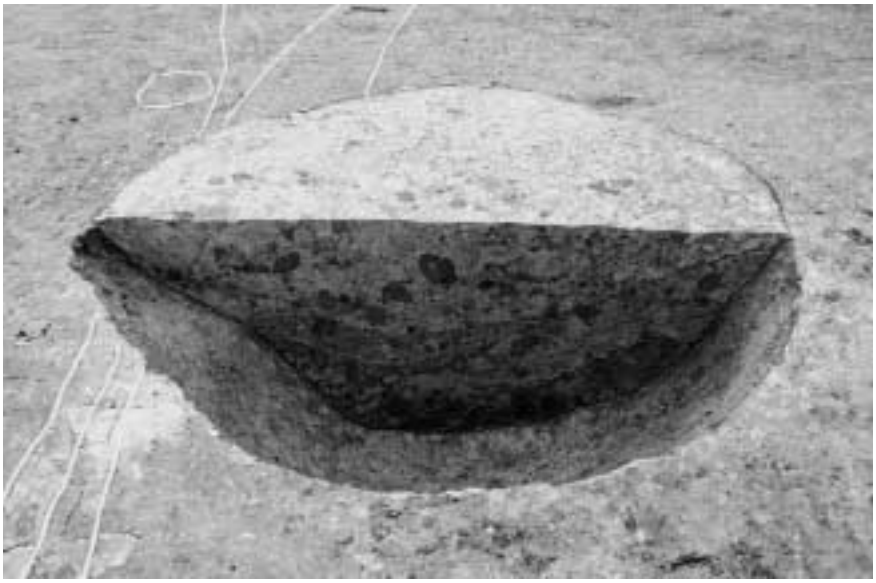


1．ＳＸ６全景（南から）

2．ＳＸ６炉Ａ・Ｂ断面（南東から）

3．ＳＸ６ピット１炭化物検出状況（西から）

写真図版６　鍛冶遺構



1．ＳＫ１断面（東から）

2．ＳＤ１全景（南西から）

3．ＳＤ１北壁断面（南から）

写真図版７　土坑・溝跡（２）

1．Ⅳ層遺構検出状況（東から）

2．Ⅳ層上面全景（北西から）

3．ＳＭ１全景（西から）

4．ＳＭ５全景（北西から）

5．ＳＭ５全景（東から）

6．ＳＭ６－12、５－８、４－５断面（西から）

7．調査区西壁断面（南東から）

8．調査区南壁断面（北西から）

写真図版８　小溝状遺構群・調査区壁断面

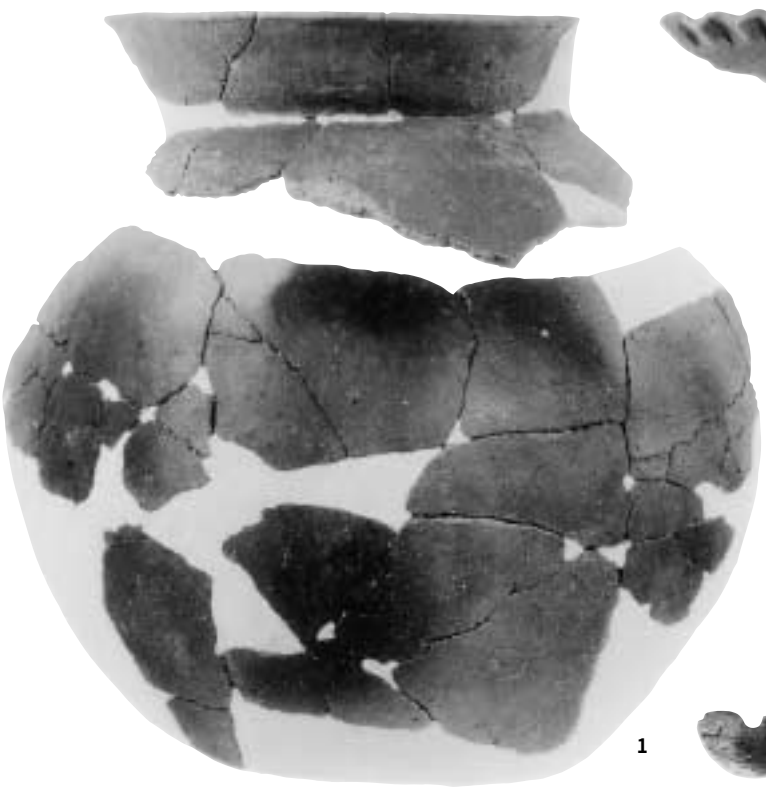
1．ＳＩ２出土土器

2．ＳＩ３出土土器

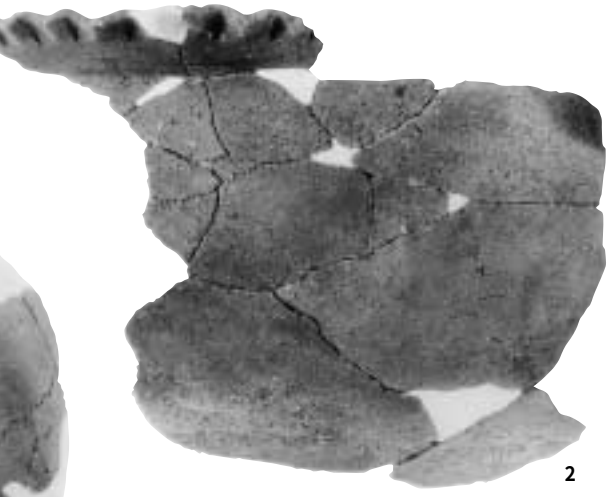
写真図版９　竪穴住居跡出土遺物（１）

ＳＩ２出土土器（１）

写真図版10　竪穴住居跡出土遺物（２）



1



2

3

1．ＳＩ２出土土器（２）

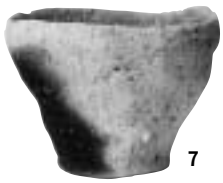
4

9

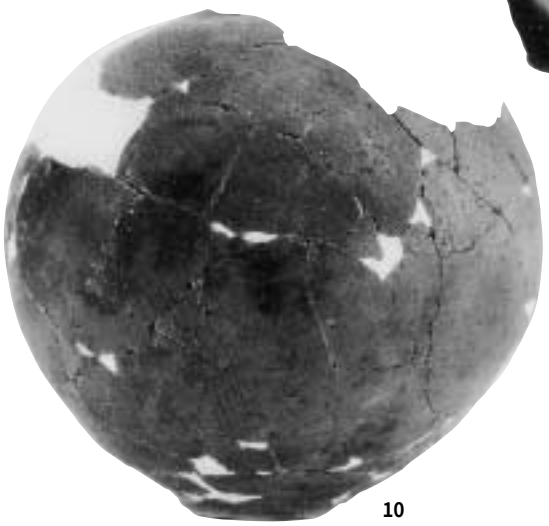
5

6

8



7

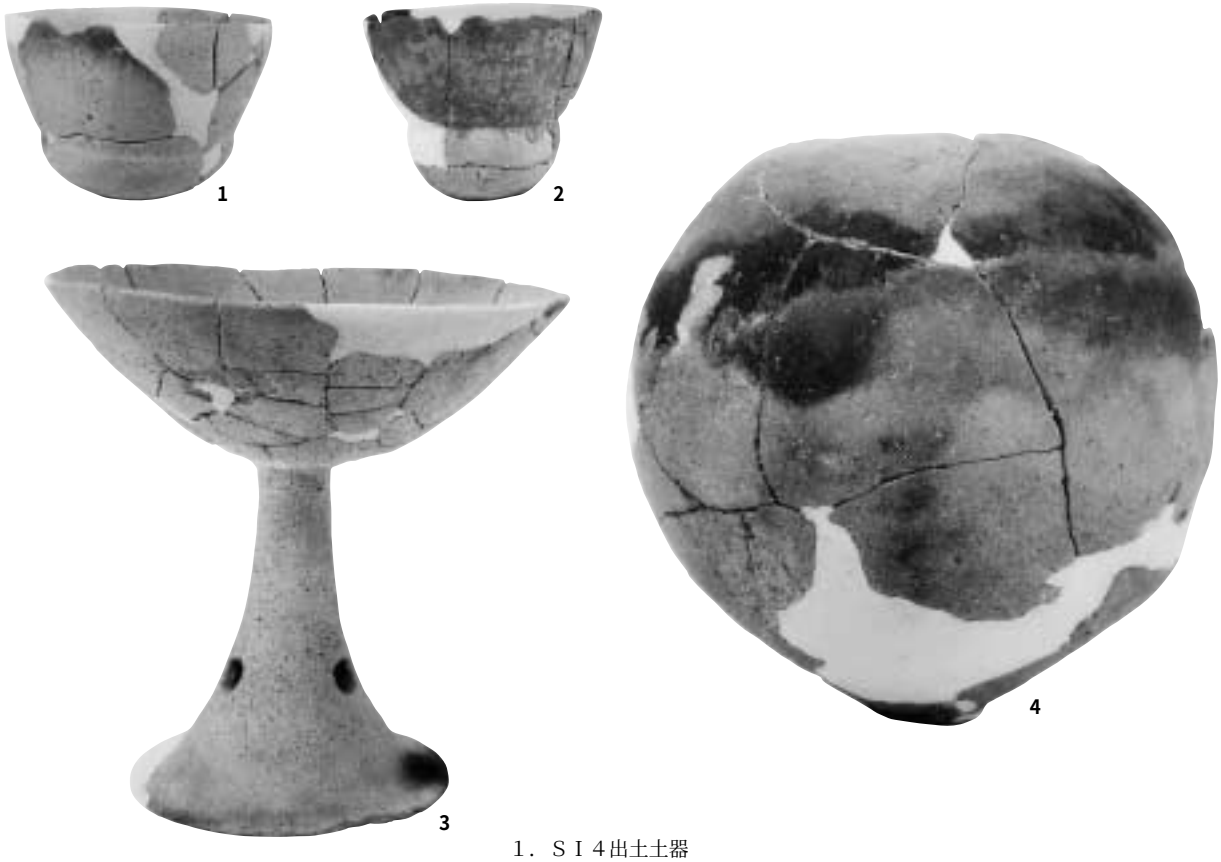


10

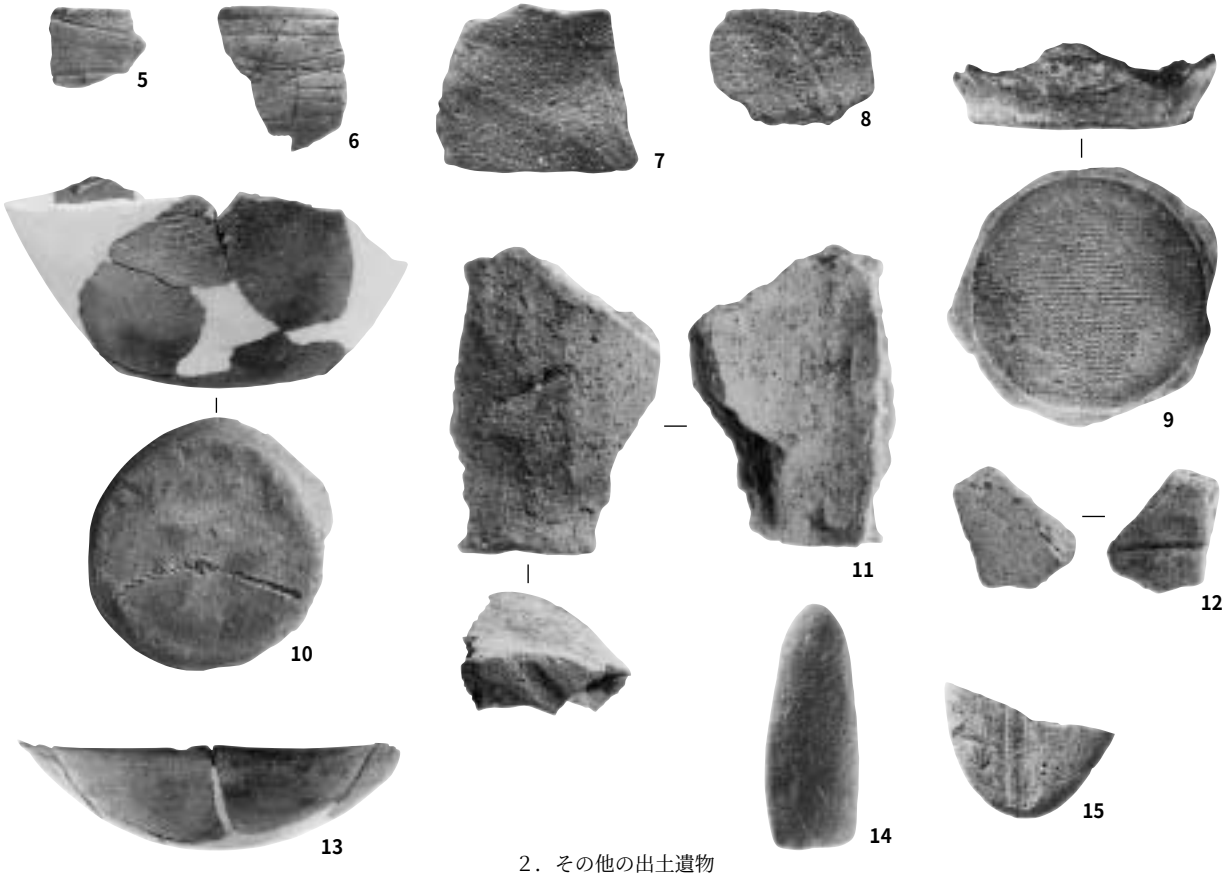
11

2．ＳＩ３出土土器

写真図版11　竪穴住居跡出土遺物（３）

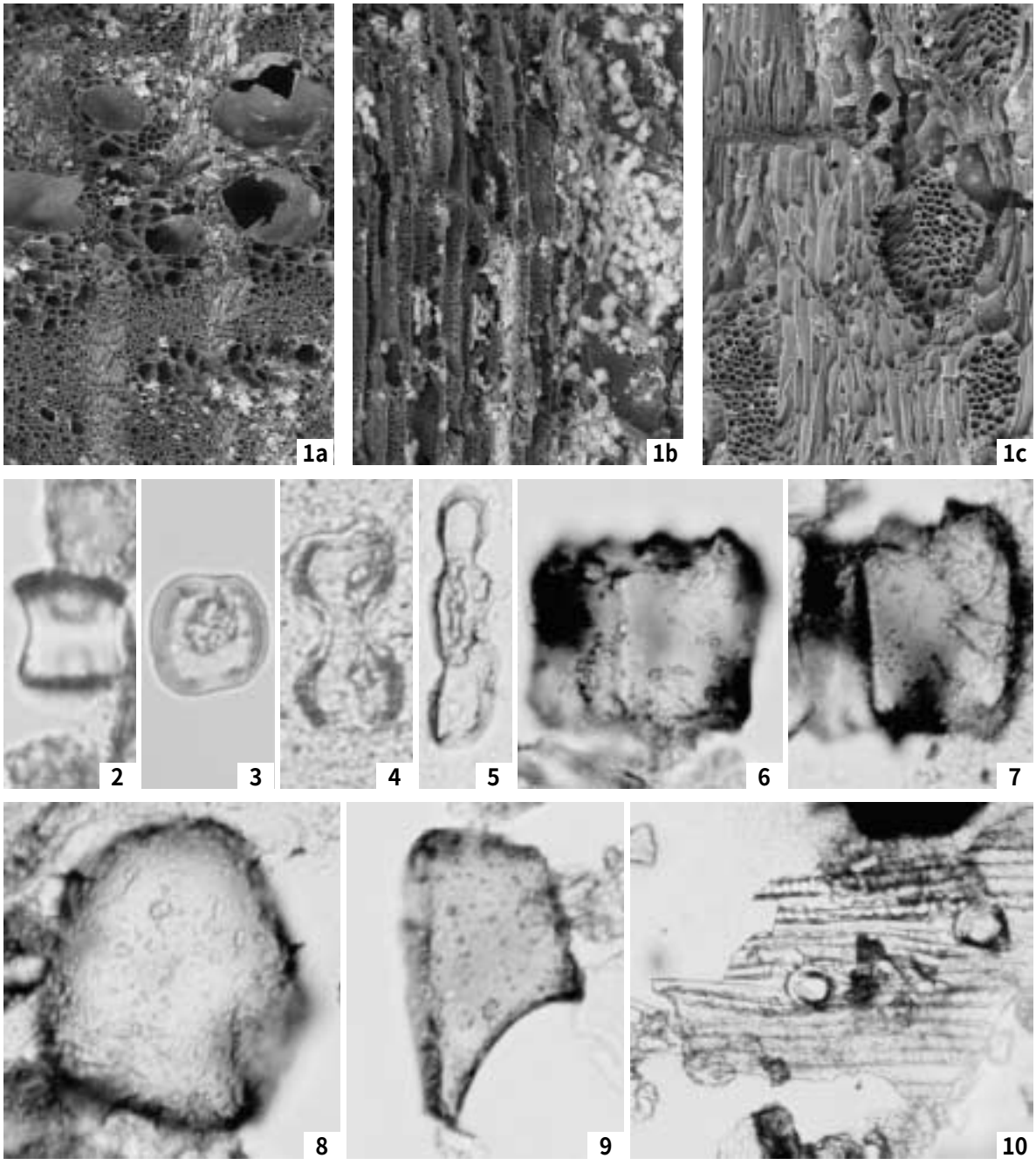


1．ＳＩ４出土土器



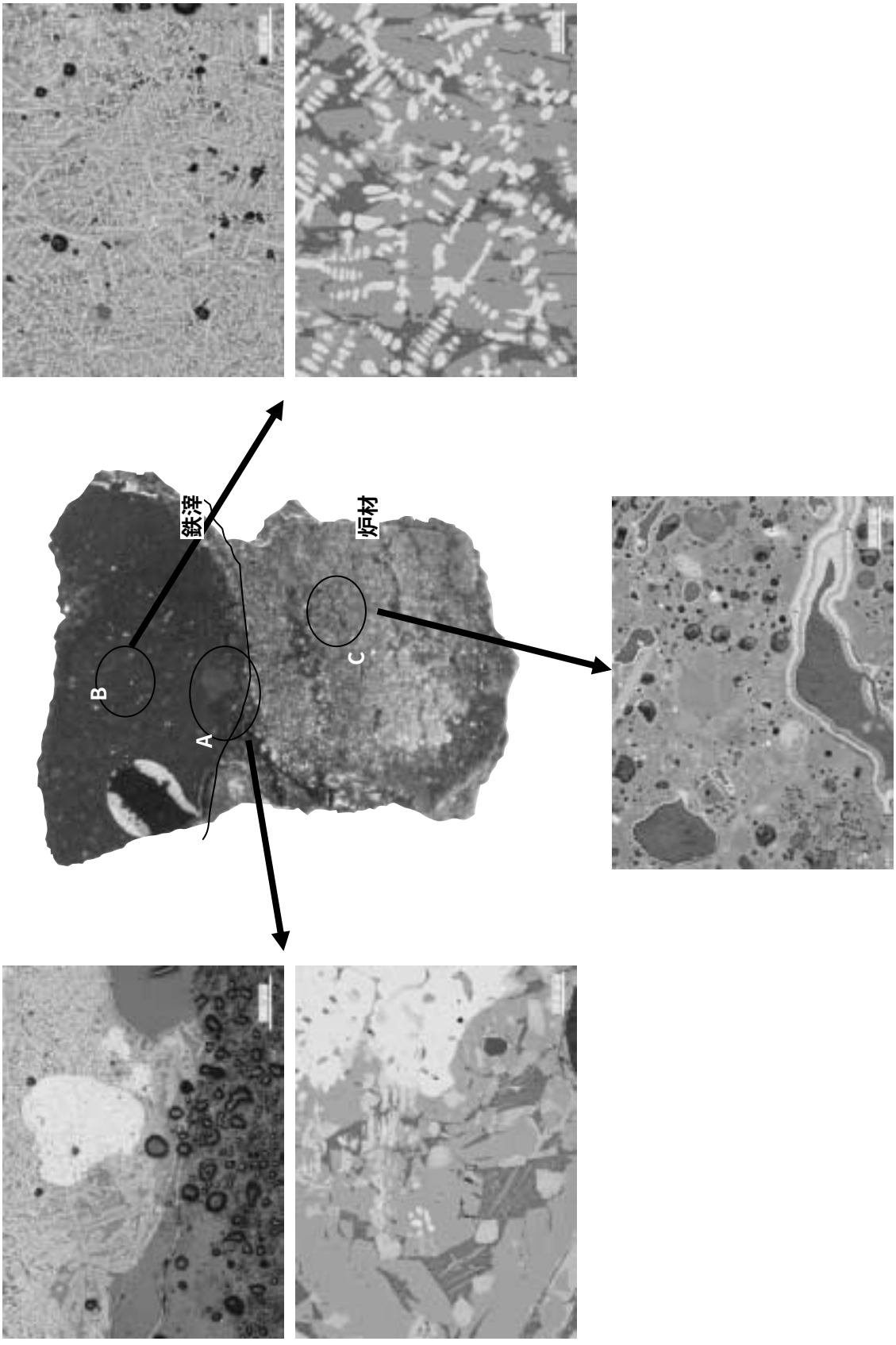
2．その他の出土遺物

写真図版12　竪穴住居跡出土遺物（４）・その他の出土遺物



1．ケヤキ（SI3；焼面炭化物サンプル②）a：木口，b：柾目，c：板目
2．ネザサ節短細胞珪酸体（SI2；5）　3．ヨシ属短細胞珪酸体（SI4；8）
4．ススキ属短細胞珪酸体（SI2；1）　5．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体（SI2；5）
6．ネザサ節機動細胞珪酸体（SI2；5）　7．ネザサ節機動細胞珪酸体（SI4；5）
8．ヨシ属機動細胞珪酸体（SI2；8）　9．ヨシ属機動細胞珪酸体（SI4；8）
10．不明組織片（SI4；炉跡）

写真図版13　炭化材・植物珪酸体



写真図版14　鉄滓のマクロ・ミクロ断面組織

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおのだこふんぐん
書名	大野田古墳群
副書名	第14次発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第339集
編著者名	平間亮輔・佐々木竜郎
編集機関	仙台市教育委員会（文化財課）
所在地	〒980－8761　宮城県仙台市青葉区国分町３丁目７番１号　　TEL 022－214－8894
発行年月日	2009年3月13日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
おおのだこふんぐん 大野田古墳群	みやぎけんせんだいしとみさわえきしゅうへんとち 宮城県仙台市富沢駅周辺土地区画整理事業27B13，14，15 （たいはくくおおのだあざたけまつみやわき 太白区大野田字竹松・宮脇）	04100	01361	38° 12′ 45″	140° 52′ 43″	20080701 ～ 20081022	916㎡	仙台市大野田保育所の改築移転工事に伴う埋蔵文化財の事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大野田古墳群	集落跡 畑跡	古墳時代 古代以降	竪穴住居跡　４軒 土坑　４基 溝跡　４条 小溝状遺構　８群102条 鍛冶遺構　１基 ピット　約930個	土師器（古墳時代前期）	古墳時代前期（塩釜式期）の集落跡及び官衙関連の区画溝の一部が検出された。

仙台市文化財調査報告書第339集

大 野 田 古 墳 群

―第14次発掘調査報告書―

2009年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市青葉区国分町３丁目７番１号

仙台市教育委員会文化財課

TEL　022（214）8894

印刷　（有）平電子印刷所

福島県いわき市平北白土字西ノ内13番地

TEL　0246－23－9051